

# 吃音者宣言

言友会運動十年

伊藤伸二編



たいまつ新書



たいまつ社

■ どもりであるがゆえに他人に気を使い、劣等感を強いられ、あな  
どられ、差別されるといふ現実がある。

■ ゆえに矯正に努力し、どもりからの脱出を目指して生きなければ  
ならなかつた人びとが、助け合い、励まし合いの連帯のなかから、  
人間解放へつき進み自ら「吃音者」たることを宣言する。

■ 「逃げの人生」から脱皮し、堂々と胸を張って生きる反差別の思  
想と論理の構築を目指す言友会運動十年のたくましい航跡がここに  
ある。





たいまつ新書 4

吃音者宣言 言友会運動十年

伊藤伸二 編



たいまつ社



たいまつ新書 4

**吃音者宣言** 言友会運動十年

伊藤伸二 編

たいまつ社

## 吃音者宣言

私たちは、長い間、どもりを隠し続けてきた。「どもりは悪いもの、劣ったものという」社会通念の中で、どもりを嘆き、恐れ、人にどもりであることを知られたくない一心で口を開くことを避けてきた。

「どもりは努力すれば治るもの、治すべきもの」と考えられ、「どもらずに話したい」という、吃音者の切実な願いの中で、ある人は職を捨て、生活を犠牲にしてまでさまざまな治すころみに人生をかけた。

しかし、どもりを治そうとする努力は、古今東西の治療家・研究者・教育者などの協力にもかかわらず、充分にむくわれることはなかった。それどころか、自らのことばに嫌悪し、自らの存在への不信を生み、深い悩みの淵へと落ちこんでいった。また、いつか治るという期待と、どもりさえ治ればすべてが解決するという自

分自身への甘えから、私たちは人生の出発（たびだち）を遅らせてきた。

私たちは知っている。どもりを治すことに執着するあまり悩みを深めている吃音者がいることを。その一方、どもりながら明るく前向きに生きている吃音者も多くの事実を。

そして、言友会一〇年の活動の中からも、明るくよりよく生きる吃音者は育ってきた。

全国の仲間たち、どもりだからと自分をさげすむことはやめよう。どもりが治つてからの人生を夢みるより、人としての責務を怠っている自分を恥じよう。そして、どもりだからと自分の可能性を閉ざしている硬い殻を打ち破ろう。

その第一歩として、私たちはまず自らが吃音者であること、また、どもりを持つままの生き方を確立することを、社会にも自らにも宣言することを決意した。

どもりで悩んできた私たちは、人に受け入れられないことのつらさを知っている。すべての人が尊重され、個性と能力を発揮して生きることのできる社会の実現こそ私たちの願いである。そして、私たちはこれまでの苦しみを過去のものとして忘れ去ることなく、よりよい社会を実現するために活かしていきたい。

吃音者宣言、それは、どもりながらもたくましく生き、すべての人びとと連帯し

---

ていこうという私たち吃音者の叫びであり、願いであり、自らへの決意である。  
私たちは今こそ、私たちが吃音者であることをここに宣言する。

全国言友会連絡協議会

昭和五十一年五月一日 言友会創立一〇周年記念大会にて採択

---

## まえがき

——本書の構成について——

本書は吃音者宣言に添って組み立てられている。通読すれば、吃音者宣言の解説となるように工夫した。

プロローグでは、言友会が吃音者宣言で目指すものを明らかにした。本書の要約でもある。第一章は、どもりは悪いもの、劣ったものだという吃音児（者）を取り巻く社会通念が、いかに吃音児（者）を悩みの中に追い込んでいくかを探った。

どもりを嘆き恐れ、どもりたくない一心で自らの殻に閉じこもっていった山川夏雄氏の体験がある。さらに、壁に直面し何度も逃げようと計りながら、ぶつからざるを得ず不安に脅えた体験を村上英雄氏が日記に綴っている。かつて、東京言友会の事務局長として積極的に活動した彼でさえ、大きな壁にぶつかってはどもることを恐れ避けようとした。どもりの問題の根の深さを知っていただきたい。

そのような壁にぶつかった時、私たちは悩みを一気に解決してくれる特效薬を探し求める。松本進氏の体験では、いかに吃音者がどもりが治ることを願ひ矯正所にあこがれたかを知ることが出来る。松本氏は四回（一回三カ月）繰り返し返して矯正所を訪れたと言う。

二章では、どもり矯正所の歴史を概観し、治ると宣伝する矯正所がどもりを治し得ていない現実注目した。さらに、言語治療教室の実態は大分県教育センターの佐世省吾氏に明らかにしていただいた。

どもりを治そうとする治療家、教育者の努力にもかかわらず充分に治し得ていない現実の中で、「どもりは治るはずだから矯正所へ行って治しなさい。治らないと会社をやめてもらいます」と言われた吃音者がいた。「どもりは治せる」という前提が、一人の青年の人生を変えた。千葉芳秀氏の体験は特別なものではない。どもりのために職を追われた人の話は時々聞く。

三章は、言友会活動一〇年の紹介である。言友会を紹介し、一通り会の歴史を見た後、私が会の創立に参加し一〇年間の活動を続けた中で思い出を物語風に綴った。明るくよりよく生きる吃音者が育つ土壌を知っていただきたい。

四章は「どもりはどう治すべきかではなくどう生きるかにつきる」という私たちの考え方を紹介する旅に出た全国吃音相談会の話である。私に同行した辻中忍氏に吃音相談会を開い

たいきさつと経過を報告してもらった。「明るく生きる吃音者たち」は、福岡市で行なわれた吃音相談会の時に、私が話をした時の録音テープに若干の、加筆をしたものである。これは、全国各地の相談会で会った多くの吃音者たちとの出会いが話の中心になっている。

五章では、社会にも自らにも吃音者であることを宣言し、どもりを持ったまま生き、また生きようとしている吃音者の体験を集めた。特別の解説を抜きに直接体験に触れていただきたい。また、京都府綾部市立綾部小学校きこえ、ことばの教室にはその実践報告をしていた。さらに吃音児を持つ母親にも体験をお書きいただいた。

六章では、全ての人が尊重され、個性と能力を発揮して生きる社会の実現を、私たちが願う（京都市言友会の連帯の歴史）、それに応えて、青年運動の良き理解者である中神秀子氏に言友会への期待を述べていただいた。

一九七六年九月

編著者

本書を誰よりも言友会を愛し、活動に打ち込んだ  
故、吉田昌平氏に捧げる

目次

吃音者宣言

2

まえがき——本書の構成について

5

プロローグ——吃音者宣言の目指すもの

伊藤伸二 12

第一章

- |   |                     |      |    |
|---|---------------------|------|----|
| 1 | どもりは悪いもの、劣ったもの      | 伊藤伸二 | 16 |
| 2 | とらわれへの軌跡            | 山川夏雄 | 22 |
| 3 | 十秒のあいさつ——去来する不安との闘い | 村上英雄 | 31 |
| 4 | どもり矯正所へのあこがれ        | 松本進  | 43 |

## 第二章

- 1 民間のどもり矯正所でどもりは治るか……………伊藤伸二 50
- 2 言語治療教室で吃音はなおるか……………佐世省吾 56
- 3 三カ月でどもりを治せ……………千葉芳秀 66

## 第三章

- 1 言友会の歴史……………伊藤伸二 74
- 2 言友会誕生のエピソードと言友会活動の思い出……………伊藤伸二 84

## 第四章

- 1 全国吃音相談会……………辻中 忍 108
- 2 明るく生きる吃音者たち——福岡での相談会のテープより……………伊藤伸二 112

## 第五章

- |   |                       |                        |     |
|---|-----------------------|------------------------|-----|
| 1 | たとえどもりでも——K児の吃音克服指導記録 | 綾部小学校きこえ・<br>ことばの教室担当者 | 138 |
| 2 | 七年の歲月の中で——吃音児を持つ母親の体験 | 安藤百枝                   | 157 |
| 3 | どもりに負けないで             | 中島秀雄                   | 169 |
| 4 | 新しい青春を求めて             | 山川夏雄                   | 172 |
| 5 | 『吃』よ、誉あれ              | 鳥羽 稔                   | 182 |
| 6 | どもりと私                 | 守部義男                   | 188 |
| 7 | 講談に賭けた人生              | 田辺一鶴                   | 195 |
| 8 | たとえどもりでも              | 高橋庄治                   | 206 |

## 第六章

- |   |                   |      |     |
|---|-------------------|------|-----|
| 1 | 連帯の輪の中で——京都言友会の十年 | 梅原正之 | 216 |
| 2 | どもりの問題を持っていればこそ   | 中神秀子 | 225 |
|   | あとがき              |      | 231 |

## ■言友会十年の歩み

235

## プロローグ

——吃音者宣言の目指すもの——

伊藤伸二

どもりに悩み、不本意な生活を送ってきた私たち吃音者は、一気にその悩みを解消し、有意義な人生を送ることを夢見た。どもりを治したいと願った。その夢を、公的な相談機関がない中で、民間のどもり矯正所に託した。しかし、どもりは治ると宣伝するどもり矯正所で、私たちのどもりは治らなかつた。そこで、私たちは長期にわたる努力ができる言友会をつくって、どもりを治そうとした。しかし、どもり矯正所が、どもりを治せなかつたように、言友会一〇年の活動の中でも、どもりを治すことはできなかつた。

私たちは、どもりが「治っていないという」事実を直視する。一方、言友会の活動の中で、どもりつつも明るく生きる吃音者が育ったことを評価した。どもりを持ちながら、明るく生きる人が多くいる事実と、どもりが治っていない事実を前にしても、それでもなお、「どもりを治すことにこだわり続ける」のか、それとも、「治らなくてもどもりを持ったまま自分らしく生きることに確信を持つ」のかの選択を私たちは迫られた。

私たちは後者の道を選んだ。治すことにとらわれ、治そうと努力すればする程悩みを深めた経験を持つ私たちは、治す努力を否定した。いつまでも、どもりにこだわり続け、そのことでエネルギーの大半を使ってしまい、人間として大切な日々の社会生活がおろそかになってしまふことを恐れたからである。

どもりは隠そうと思えば隠し続けることができる。人間として当然すべき責務を放棄し、主張すべきことも発言せず、人生のあらゆる場面で消極的になっていけば、自分のどもりを隠し通すことはできる。どもることの苦しみから逃れるために、自分を殺し、相手に迷惑をかけても、「どもりだから仕方がない」と言い訳する甘えを私たちは持っていた。自分に甘え、社会に甘える姿勢が続き、逃げの人生を歩んできたのだった。

どもっているのはあくまで仮の姿であり、近い将来どもりが治れば、一気に本来の自分を取り戻し、楽しい生活を送ることができる。「どもりさえ治れば」とますますどもの殻に閉じこもっていった。そのような生活の中では、都合の悪いことが起これば、それを全てどものせいにしてきた。あれ程自分を苦しめたどもりが、逃げの人生の中では、自分を守るための隠れ蓑の役割を果たしてしまったのである。

隠れ蓑を捨て、逃げの人生から脱皮するため、逃げている自分、甘えている自分を自覚することから私たちは始めた。逃げている自分を自覚し、意識的に生活の中で逃げない選択を

続けていると、これまでできないと思つていたことが、思つたよりできる自分に気づいた。今までの甘えた、逃げた自分の生活態度を変えることは苦しい。またどもることに対する不安や恐れは一朝一夕に消えるものではない。不安を持ちながらも、頼りない自分を自覚しながらも、恥をかきつつ自分を出していくしかなかった。

一方、私たちは、この吃音者の生き方を阻むものにも目を向けなければならぬ。それは、長いどもりの歴史の中で育まれてきた、一般社会のどもりに対する誤つた通念である。「恥しい」「不自由」「みっともない」「小心」「神経質」などのイメージが社会にあり、「どもりは努力すれば治る」という考えも根強い。私たち吃音者が、どもりを持ったまま明るく生きることを、それらが著しく阻害している。私たちは、どもりが治つた後の人生を夢みるのではなく、どもりを持ったままいかに生きるかを考える一方、このどもりに対する社会通念を変えていくことに取り組まなければならないと考へた。

言友会は、一〇周年を記念した全国大会で、社会にも、自らにも、どもりを持ったままの生き方を確立することを宣言した。この吃音者の生き方を通して、どもりに対する社会通念を変えていこうとしているのである。

どもりが、どもりとしてそのまま認められる社会の実現こそ、私たちの願いなのである。その道は遠くとも、行かねばならない。

## 第一章

私たちは、長い間、どもりを隠し続けてきた。「どもりは悪いもの、劣ったもの」という社会通念の中で、どもりを嘆き、恐れ、人にどもりであることを知られたくない一心で、口を開くことを避けてきた。

「どもりは努力すれば治るもの、治すべきもの」と考えられ、「どもらずに話したい」という、吃音者の切実な願いの中で、ある人は職を捨て、生活を犠牲にしてまでさまざまに治すころみに人生をかけた。

1 どもりは悪いもの、劣ったもの

伊藤伸二

あなたはどもりのためにどのような態度をとられたか

言友会の理論研究部が昭和四五年に行った調査の報告がある。

小・中・高校時代に教師や家族、友人がどのような態度を吃音児にとったかの質問に対して次のような回答が寄せられている。

教師からは、

○小学校時代

- ・ 矯正所へ行くように言われた。
- ・ ゆっくり読むよう指導された。
- ・ なるべく本を読まさないようにされた。
- ・ わざと本を読ませられ、からかわれた。

○中学校時代

- ・「なんだ、どうしたんだ、お前どもりか」と言われた。
- ・冷たい態度の先生と思いやりのある先生の両方がいた。
- ・放任で朗読はさせられなかった。
- ・矯正所のパンフレットを見せられた。

○高校時代

- ・放任で、朗読、発表をさせられなくなった。
- ・治療するよう注意された。
- ・先生に無関心な態度をとられた。
- ・「お前どもりか」と言われた。

家族からは、

○小学校時代

- ・どもると嫌悪の情を示された。
- ・どもりではないと言い聞かされた。
- ・どもる度に注意された。

- ・冷淡で、物笑いの種にされた。……
- ・ゆっくり話せと言われた。
- ・矯正所につれていかれた。

### ○中学校時代

- ・嫌悪の情を示された。
- ・どもつても注意されなくなった。
- ・先生に相談してくれた。
- ・どもつても気にしないで接してくれた。
- ・ゆっくり、はっきり言えと言われた。

### ○高校時代

- ・ゆっくり話せと言われた。
- ・まったく放任であった。
- ・無関心。
- ・そのうち良くなるだろうと言われた。
- ・話をまとめておけと言われた。

友人、その他の人びとからは、

○小学校時代

- ・あまり気にされていない。
- ・変な人<sup>々</sup>、だまり屋<sup>々</sup>と思われていた。
- ・よく笑われた。
- ・物笑いの種にされた。
- ・からかわれた。

○中学校時代

- ・あまり気にされていない。
- ・もつと落ちついてと言われた。
- ・友人はいなかった。
- ・物笑いの種にされた。
- ・無関心。

○高校・大学時代

- ・あまり気にされていない。
- ・どもった方が愛情がわくねと言われた。

- ・早口を注意された。
- ・無関心。
- ・どもってもよいから話せと言われた。

(東京言友会 昭和四五年『理研報告』第二号)

家庭、学校、近隣がどもりに対してどのような態度をとってきたかの一端を知ることができさる。

程度の差はあるにせよ、友人や兄弟にからかわれたり、学校では教師さえからも拒否された体験を持つ者は少なくない。

A氏は、小学校五年の時、号令をかける番があたっていた体育の時間にどもって声が出ず立往生してしまい、その時に、教師から、

「お前、俺をばかにしているのか」となぐられたと言う。

国語の時間、どもっているのをからかうために教師が何度も何度も指名し、非常につらかったとB氏は話す。

現在はさすがにそのような教師はいなくなった。級友もまた面と向っては、どもることをからかったりしなくなった。成人吃音者がかつて味わった苦痛は表面的にはなくなったと言

える。

では、実際に同級生、教師は吃音児をどう見ているかの報告を見てみよう。

### 吃音児を友人はどう見ているか

大阪府下の小学生・中学生（約七〇〇名）に岸本哲氏が意識調査をした。

どもりの人やどもりのお友達のことをどう思いますかの質問に次のような結果が出ている。

- ◎気のどく、かわいそう、みじめ。◎からかったりばかにしてはいけない。
- ◎早く治ったらいい、早く治してあげたい。◎治そうと努力しているのを見て感動した。
- ◎何かしてあげられないか。◎治す方法を早く考えてほしい。◎治す学校を作れ。
- ◎いやだ、不愉快、いらいらする、うつりそうな気がする。◎病気だから仕方がない。
- ◎おもしろい、愉快だ、ばかみたい。◎努力して治すべきだ。

この結果を岸本氏は次のように考察している。

「この結果は吃音児にとって大変希望的なものである反面、苦しい状況であることをも示している。無関心な友だち、積極的に吃音児の立場に立って、よき友だちとなるよう努力して

いる友だち、吃音児の努力も考えないで足をひっぱっているような友だちと、三者三様である。しかしながら、一〇人の友だちや、吃音児・者自身の努力の成果も、ただ一人の友だちのために無駄になることが多いことを考えた時、われわれは、次に必ず打つ手を見い出さなければならぬ。このようなことは、単に吃音児教育のみに限られたものではなく、教育の基本的な問題であることを再確認した」。

(第一回吃音問題研究集会資料集 昭和四七年)

成人になった現在でも悩みが解消されずにいる成人吃音者には、過去に、どもりに関する暗い、いやな体験をしている人が実に多い。それらの体験を積み重ねるにしたがって吃音者自身も、「どもりは悪いもの、劣ったもの」という意識を強めていくのである。

## 2 とらわれへの軌跡

山川夏雄

いま私は

暗い会議室の中で、私はひとり思いに耽ります。満たされぬ心をあらぬ空想でいやすので、人前でほとんど話せないほどひどいどもりの私は、同僚ともなじめず、昼休みになると自分の世界を求めて、誰もいない図書館の会議室にこもるのです。

時折足音が聞こえると、私はびくつとしてしまいます。誰かが部屋に入ってくるのではないかと、足音が消え去るまで息を殺してしまいます。

足音が去っても私のおびえは去りません。どもっていやな思いをした記憶の多さから人間不信になっていく私は、ただ人と顔を合わせるだけで恐怖を覚えるのです。

ある大学の図書館に勤めて三カ月。私は人の視線さえ恐く、職場へ通う毎日が、針のむしろにすわるような苦痛に思えるのでした。

### 幼い頃から

幼い頃からどもりがちで気の弱かった私ですが、子供の頃の表情に暗さはありませんでした。神経質ではあっても運動が好きで、小学校に入ってからも元氣な子供でした。

どもりを気にするようになったのは、友だちにどもりをからかわれていやな思いをした四年生頃からでしょうか。少しずつどもりは重くなっていき、六年生の学芸会では、ひどくどもって大恥をかいてしまいました。

中学の時には、出席をとられて返事が遅れ、「目の前にいてなぜすぐ返事をしないのか」と先生にどなられたこともあります。いやいや学級委員長に選ばれた私は、授業始めの「起立」という号令がかけられず、みじめな思いをしたこともありました。また、国語や社会の時間に本を読まされ、どもって困ることもたびたびでした。

こうした経験が私をだんだん消極的にしていきました。どもりは恥ずかしいやなものだという思いにとらわれていったのです。

### どもりを治そうとして

中学時代、どもりに対するひきめを持ってはいても、私は周囲に受け入れられていました。ところが、高校に入ってから先生に親しみを持つことができず、友だちにも心を許すことができなくなっていました。受験々々の雰囲気の中で、私はとり残されたような気分になつていったのでした。

先生も生徒も知らない人ばかりの中で、私は自己紹介で恥をかき、出席をとられて返事ができませんでした。もうどもることは単なるひきめどころではなく、切実な問題になりました。なにより出席をとられて返事のできないことが、それ以後堪えられない苦痛になつていったのです。

高校一年生の夏休み、母に勧められた私は大阪のある矯正所へ行きました。私はどもりで悩んではいたものの、矯正所へ行くのはあまり気が進みませんでした。どもるのがいやで矯正所へ行くにも不安を感じていたからですが、自分をどもりだと認めて矯正練習をすることに抵抗を感じたからでもあったのです。

矯正所では発声練習、呼吸練習を中心に、皆の前に立ってスピーチの練習などもしました。息を思い切り吸って口を大きく開け、ゆっくり話すのがその方法でした。

確かにこの方法で話せば、その時はほとんどもらえないものの、ほかの場所でこれをやる勇氣は、私にはありませんでした。このような特別な方法でなくても、どもらずに話せないかと私は悩みました。

夏休みが終わって学校生活に戻った頃、私は話そうとしてどもると、舌が出るようになってしまいました。おそらく矯正所で練習した結果、どもらずに話そうと神経質になり、余計緊張してしまったからだと思います。

ともあれ舌が出るようになったせいもあって、話すのが以前にも増して恐くなった私は、友だちから少しずつ離れていきました。自分の殻を作り、ひとりの時間を持つことが多くなっていたのです。

三年生の春休み、大阪へ巡回に来ていたある先生に再び矯正を受けることになりました。

さほど期待はしていなかったものの、あわよくばという気持があつて出かけたのでした。

その先生は、氣力を充実し、思い切つて話していけばどもりは治ると説明しました。そして、街頭で知らない人に道を尋ねる実地訓練を私に勧めました。しかし、知らない人に話しかけるのがとても恐かつた私は、家で朗読をするくらいでお茶を濁していました。

そんな時、中学校の同窓会がありました。高校に入りだんだん孤独になつていった私にとつて、中学時代の友だちはかけがえのないものでした。しかし、そこでもみんなと思つてに話せず、ひとりとり残された氣持になつた私は、このままでは全く孤独になつてしまふ、なんとかしなければと思いつめました。勇躍決意を固め、私は街へ練習に出かけました。

最初は人に声をかけるのが恐く、通行人を何度もやり過ぎていました。しかし、だんだん焦つてきた私は、人通りの少ない道を選び、やさしそうな人をみつけて話しかけたのです。うまい具合に少しもどもりません。この調子だ、まだまだ恐いけれど、そのうち慣れてくるだろう。私はそう思い、どんどん話していこうと思いましたが、恐怖を克服するのはむづかしく、結局その日は三人だけで終わつてしまいました。

二回目は少し慣れてきたのか、六人まで話しかけることができました。やはり道を選び人を選んでいましたが、少しずつ慣れてくる感じでした。

驚いたことに、家や学校でも以前よりどもりが軽くなつていきました。授業で出席をとら

れても返事ができるようになり、やはり効果があるのかと感心していました。

ところが、少しどもらなくなった私は、この次どもるのではないかと、かえって不安を持つようになり、再び話すのが恐くなっていったのです。

ある時、私はひとりの男の人に道をたずねました。ところが、なかなかことばが出ず、私は慌ててしまいました。その人のうさくさそうな表情を感じながら、私は必死に言おうとしました。結局なんとか言うことはできたものの、それを機に話しかけるのが決定的に恐くなってしまったのです。

しばらく期間を置いてまた街へ出て行きましたが、話しかける恐さを振り切る気力はもう残されていませんでした。

私はこれ以上続けられないと思いました。自分は根性がないのだと情けなくなりましたが、一方で肩の荷が降りてほっとした気分にもなっていました。

この挫折によってどもりはまたひどくなっていきましたが、それ以上に自分に自信を失ない、ますます殻に閉じこもるようになっていったようでした。

### 殻の中で

高校を卒業し、大学受験に失敗した私は浪人をするようになりました。先生から当てられ

ることもなく、本を読まされることもない予備校通いは、気楽なものでした。この頃になると、友だちのないことがかえって気持を軽くし、毎日が楽しいとはいえないまでも、どもりの不安からは解放されていました。

この時期は吃音矯正の練習など全くやる気にならず、ラジオを聴いたり好きな本を読んだりして、自分の世界に閉じこもっていました。将来に対する展望もなく、また不安もありませんでした。自分の生き方について真剣に考えることなく、現状の安逸の中で自分を動かしたくない私だったようです。

### 空想へ逃げ込んで

中学の頃まで勉強も運動もよくできた私は、心の奥に高いプライドを持っていたようでした。そのため、どんなに殻に閉じこもっても、何かで認められたいという欲望を、私は消しえませんでした。高校の後半から浪人時代にかけて私は小説を書き、作曲をし、自分を作家、大作曲家にみたててることで、代償的な満足を求めました。空しい空想の中に慰安を見出すようになっていったのです。現実から逃げ、空想に引きこもった私は、行動への気力を失っていきました。ただ自己を主張したいというプライドの空回りのみが、現実へのあがきのすべてだったのです。

## サッカー部で

何かで自分を主張したいという気持ちの現われだったのか、一浪して入った大学で、私はサッカー部に入りました。どもる自分のみじめさをプレーで相殺しようと、私はサッカーに打ち込んだのでした。

その頃、私は相変わらずひどくどもり、話す時には舌が出て困っていましたが、下級生のうちは同じ学年の連中がまとまっついて、それほど疎外感を持っていませんでした。ただ心配だったのは、先輩と出会った時のあいさつでした。上下関係の厳しい大学の運動部であらさつができれば大変です。私はできるだけ先輩と出会わないよう、駅から大学まで遠回りして行ったり、先輩のいそうな所を避けて通ったりしていました。

上級生になると私は時々試合に出ました。しかし、サッカーの試合では、ボールを味方にパスする時やパスを受ける時、声をかけねばならないのです。私は声をタイミングよく出すことができなかったのです。そのため私ひとりチームの中で孤立し、スタミナのないせいもあって、途中でよく交代させられました。

プレーがうまくいかないこともあって、私は自分に自信を失ない、人間関係でもだんだん卑屈になっていきました。表情はますます暗く陰気になり、どうしたわけかひとりであるこ

とに以前の気楽さはなく、ただ苦悩が増すばかりでした。

### 再び治そうとしたが

大学時代には吃音矯正の実地訓練を時々やりました。高校の時にやって、一時的に効果のあったことが頭にあったからです。ところがある時、通りがかりの人を呼び止めて道をきこうとすると、ことばがつかえて舌が出、そのまま声が出なくなってしまうのです。舌を出したままもがいている私を見て、相手の人は気味悪がり、けがらわしい物でも見たように逃げ出してしまいました。私はとてもばつが悪く、穴にでも入りたい気持でした。言いようのないほどのショックでした。それから恐くて実地訓練ができなくなってしまったのです。

### みじめな社会への門出

四年生になりました。早い人はもう就職試験を受けて、通ったとか通らなかったとか、かまびすしいことでした。私はその頃、まだまだ試験を受けようとはしませんでした。面接が恐く、受けてもどうせだめだという気持があったからです。それに就職してからのことを思うと、すすんで就職したいという意欲もわかなかったのです。

秋になっていよいよせば詰まってきた私は、恐る恐る三カ所ほど受験してみました。

面接ではひどくどもりました。重苦しい雰囲気の中でこちこちになり、ほとんど話せないような状態でした。受験はすべて失敗でした。

冬が来て次の年になっても、就職は決まりません。私は就職を引き延ばして、その間にどもりを治さねばと考えていました。しかし、治るといふ確信をもちや持てなかった私は、前途になんの希望も見出せないまま、暗い毎日を送るしかなかったのです。

二月の半ば、知人の紹介である大学の図書館に入れそうだと、ということを知りました。私は就職した後のことが不安でしたが、どうにでもなれという気持ちで就職することにしました。こんな自分を採用してくれる職場に申しわけなく思い、実力で入らなかった後ろめたさも感じていました。なるべく人には迷惑をかけず、細々と生活していこうと思えました。恋愛も結婚もあきらめていた私は、自分ひとりの世界を大事にしていこうと考えました。こうして私の社会への門出は、人生への惨めな諦めから始まったのでした。(第五章4参照)

### 3 十秒のあいさつ

—— 去来する不安との闘い ——

村上英雄

吃音者は、ちょっとしたつまずきでもって失望感や不安感に悩む。私自身、離任式(学

校で教師が転勤のため全校生徒にお別れのあいさつをする式」という絶体絶命の場に立たされ、不安が募り身も細るほどに悩んだ。その時までの様子を日記によって振り返ってみた。

三月二十六日

教職に就いて一年目。初年度の修業式も終わってほっと一息して、机に坐ってお茶を飲んでみると、教頭が近づいて来て、

「送別会と八日の離任式には、必ず出席して下さいよ」と耳打ちした。

「はい、わかりました」と、何のためらいもなく口から出てしまった。隣の同僚の先輩が聞いていて、離任式は、ひどく緊張してしまふことを、私に話してくれた。普通の人でも緊張するのに、まして、どもりの私がかうまく言えるはずがないと思ってしまう。一年前、私が新任して着任したのと入れ替わりに、転勤されていった人びとの離任式でのあいさつが思い出された。

七百余名の生徒の視線を一身に浴びて、お別れのあいさつをする、極めて厳粛な儀式であった。

短いあいさつでもどもらずに話すことは、私にはまず不可能に思えて、不安が広がる。しかし、去年の離任式には、用事で出席できなかった人が半数以上もいたことに気づき、なん

とか用事をみつけて欠席すればいいと思いつく。ここで不安は解消でき、忙しさに追われて考えなくなってしまう。

三月二十七日

新しい勤務校発表と面接のため、会場の高校体育館へ赴く。二百余名の新任が体育館の演壇に向かって坐って待つ。離任式もこんなところでやるのかと思うと、とたんに不安が私の体中に押し寄せてきて、折からの寒さに加えて、こきざみに震えが起きだし止まらなくなる。

三月二十八日

新しく行く職場の抱負など、いろいろと頭の中に思い浮かべてみるのだが、時どき離任式のことを脳裏をかすめ、憂うつになってしまう。思いきって出席し、晴れ晴れとあいさつして、自分の教えた生徒と一人一人握手をして別れたいと思うのが心情だろう。そんなことで悩みぬかねばならない自分がいやになってしまう。そして、なんとかどもらずにうまく話す方法として、小型のテープレコーダーに吹き込んで、口だけ動かしてみても思ったりする。

三月二十九日

家においてぶらぶらしていると、頭に浮かぶのは、離任式のことばかり。「うまく言える」「いや、言えない」ああでもない、こうでもない少し悩んでは立ち消えることが、このころ日課のようになってしまっている。

三月三十日

ノーベル物理学賞を受けた江崎玲於奈博士は、小さい時から重いでもりで、今でもどもっているとのことであったし、テレビでもその様子を見ることが出来る。しかし、苦しそうにどもりながらも、自分の主張をしっかりと述べ、自信のある物おじしないその態度に、なんとなく勇気が湧いてきたようである。

三月三十一日

NHKテレビの「勝海舟」を見ていたら、島田正吾が口をやや左に下げながら、気張った口調で話していた。離任式の時も、彼のように口を力ませて話したら、しゃべる時に気がそちらへそそがれて、うまく言えるのではないかと考えたりする。とりあえず、送別会のあいさつで練習しようと、早速寢床の中でも口元を力ませながら、歯に口肉をかませたりして言ってみたりする。

四月一日

午後から新しく勤務した職場の会議があり、まず全職員の自己紹介から始まった。前任校と名前、それに簡単な抱負を述べるだけのものではあったが、近づいてくるに従って、自分の言う事柄に思いを巡らすようになり、人の話は満足に耳には入らなかった。

「大垣南中から参りました村上と申します。経験といっても、わずか一年しかない未熟ものですので、新任同様にご指導をよろしくお願い致します」

こんなせりふを早速考えて何度も頭の中で繰り返し言う。雰囲気はよかったが、中にはよく知っている人がいるので、その人に自分のどもりが気づかれては恥ずかしいとも考える。大垣の「オ」が言い難いので、村上の「ム」から切り出そうと思いつく。名前を忘れて話していた人もいたので、

「肝心の名前を忘れるといけませんので、まず名前から申します」

と言えば、ユーモアがあつて爆笑するだろうと思つたりするが、そんなにスラスラ出るはずがないとも考えてやめる。

とうとう私の番になつてしまった。席を立つが、足も床についていないようで、体が自分ものではない感じを受ける。不安がさつと頭の中をかすめる。もしや……恥ずかしい思い

をしなければ……。礼をして頭を上げ、村上の「ム」を言おうとするが、出てこない。人の顔が満足にわからないのに、何か熱い視線を感じる。「マ、ミ、ム」と五十音順に軽く口ずさみながら出そうとしても、肝心の「ム」が出てこない。この間五秒の沈黙だった。口ずさんでも出ない私の顔は、きつと何かにあがいている、とてもみっともない顔つきに見えたのであろう。私のまん前に坐って私の顔を下からみつめていた二人の若い女性が、クスクスと笑いだしてしまった。つつ立ったままでも何もしゃべろうとしない男と、前で大笑いする女性。なにが起こったのかと全員が首をこちらへ向けてきた。ところが、私は二人に笑われて、不安や恥ずかしさが一度に吹き飛んでしまった。妙に心が落ち着き、胸につかえていた息が出てしまつて、新しい気分にたちかえる。そして、あらためて礼をして、大きく足を横に動かしながら、

「村上と申します」

ことばがスラスラと出て来たのである。次に予期しないことばが出てしまった。笑われてしまった私は、そのことを弁解しようとしたのか、

「私は、どもりで二〇数年間悩み続けてきまして、今なお克服をめざして頑張っています。ご迷惑でしょうが、よろしく願います。南中での経験はわずかですので、ご指導よろしく願います」と言ってしまったのである。席に坐つて、やっと自分自身に立ち返ったよ

うな落ち着きをとり戻す。自分のいやな恥ずかしい面を、この時にすべてはき出した感じで、何か胸につかえていたものがなくなり、すっきりする。

「自分はどもりで悩んでいます」

と、こんな場で言ったのは、もちろん初めてである。言おう言おうと観念的にはわかっている、実際逃避したり、ごまかしたりして、いつも切り抜けたりしていた自分を顧りみて、「やった！ 言ってしまった」

という成功感を体に覚えるようになる。

「どもりと言われるけど、ほとんど気づきませんよ」

「うまいしゃべり方ではなかったですか」

会議が終わって、回りから同情や慰めみたいなことばが私に寄せられた。

自分のどもりを公表したことで、肩の荷がすっかりおりて、これから何も気にせず仕事に打ち込めると思うと、自信が百倍にもなってくるように思われる。

四月二日

自分の恥ずかしいものをさらけ出しても、翌日になると考えが微妙に変ってきた。顔を合わせる度に、相手の視線が妙に気になり、笑っているような、軽蔑しているような風に自分

で受けとめてしまった。昨日の成功感とはうって変って、敗北のような感じであった。自己紹介であんな軽卒なことをよく言ったものだと思われるのかもしれないと考えたりする。自分から話しかけることもなく、黙りこくっていた。

四月三日

辞令交付を受けにセンターへ行く。交付後次々と講話が始まる。その中のある講師が、フールド成功五訓の印刷文を全員に渡し、読むように指示した。誰がいいかと三〇〇名の名簿を手にとつて無作為に番号を選び出された。急に私の不安が高まった。「もしや、私の名前が呼ばれ、読まされるのではないか」「いや、三〇〇人だから、まず当たるはずがない」

あれこれ考えるうちに、不安は高まり、頭の中は当たったらどうしようということばかりになってしまふ。ひとりの名前が呼ばれ、自分でないとほっとした。次の不安がまた湧き、またほっとする。このようなことを繰り返しているうちに五人が読んで、すべてを読み終えてしまった。

四月四日

研修に今日もセンターへ行く。分科会に分かれて話し合う。手を上げて意見を述べようと

するが、そんな勇氣もなく、自分がこう言えば皆の共感を呼ぶのではないかと、事柄だけを何度も頭の中で言ってみたりする。考えていると、話は次つぎと展開していき、自分の考えている事柄は、すでに合わないようになってとり残されてしまう気がする。こんな事を言ったら笑われてしまうだろう。どもらないだろうかと、とめどもなく考えが入り乱れ、ついに発言はできなかった。

四月五日

研修の三日目。講師が自分の言ったことを覚えさせるために、同じことを当てて言わせる。全体会なので、三〇〇分の一、まさか当たらないだろうと思いつつも、一昨日と同じような心境におちいり、不安は深まる一方であった。三〇〇人の中で身を縮みこませ、ただ当たらぬように祈るだけであった。その甲斐あったか、なんとか当たらずに済んだ。

四月六日

今日は予定がなく、体を休めることができた。しかし、暇になると、もう考えることは明日の離任式のことばかりである。今ではもうどうしたらうまくいって、その場を切り抜けるかだけである。言いにくい言葉、どもりやすい言葉を省いて、言いやすい言葉に置き換え

てみようとする。できるだけ長話を避け、短かくまとめようとする。反面、こんな短かいとよけい笑われるのではないかと思ったりする。講堂の正面横の額をさして、それについて話したり、毛筆で大きく書いた紙を提示した人が昨年あったので、自分もそうしてみようかと考える、しかし、ただ考えるだけで実際の行動には移さなかった。

四月七日

もう明日に迫ってしまった。朝から考えは離任式のことばかり。一室に閉じこもって、あれこれと考えたりする。もう日数はなく、精神的にかなり追い込まれ、ここ二、三日でだいぶやせたように思える。

ふと誰かがしていたように、手話を使って話したらと思う。早速本をとり出して、「一年間、お世話になりました。何事も努力です。頑張ってください。」

という短い文を手話を使って、一字一字練習する。熱心に練習をしたが指が思うように動かず、もたついてばかり、結局あきらめてしまう。昼頃も手話の次にかつて言友会でやった発声練習のことが思い浮かび、ゆっくりと大きい口形で、腹式呼吸を使ってやれば、必ずうまく言えると自分を思いこませる。不安はつきないが、なんとかいけそうだと、自分に暗示を与える。思いつきにすぐ動かされる自分を情けない奴だと思つづく思う。

四月八日

いよいよ離任式の当日になってしまった。今日着ていく服のことや、午後からの新しい職場での仕事など、別なことばかり考えて気分を紛らわそうとつとめた。しかし、時々風邪で欠席との電話をしたら、という考えがさつと浮かぶ、逃げるのなら今だと思つと、本当に考えこんでしまふ。

結局は逃げる勇氣もなく、時間に追いかけられるように出かけてしまふ。行く途中でも、ここらで逃げようと何度も思う。いろいろ考えているうちにもう校門についてしまった。なぜ来たのか？　すぐ前に大きな不安が横たわつて、恥をかくに決まっているものと、自分でない自分を叱責したりした。

式の前に別室へ案内されて休んでいると、もうなるようになれといった感じになる。運を天に任せた。しかし、ここまで出て来た自分に感心もする。

いよいよ式の時間になった。案内されて講堂に入る。生徒がすでに静かにして待っていた。不安に負けまいと胸を張つて歩く。

五分もかけた先輩の落ち着き払ったあいさつに感心する。やはりあれくらい内容をかけてしゃべるのが本当なんだろうと思ふ。

いよいよ私の番となった。名前を呼ばれ、階段をひとつひとつ踏みしめながら登った。すでに皆の視線が背中にあることを感じた。演壇の前に立つが、前がはっきりわからない。司会の人の、「礼！」という大きな声に合わせて、七〇〇人の頭が一度に見事におじぎをした。私もおくれて礼をした。私が頭をあげると、すでに七〇〇人の頭は起きていて、おくれて上がった私の顔を見ようとして視線が集中した。調子が狂ったのだ。極度にあがってしまい、これまで練習してきた言葉が全く出てこない。ただ言葉を出そうと、右足を大きく右に動かすと、自分でない自分の口から思ってもみなかった言葉が飛び出したのであった。

「ファイト、ファイト」

次の「頑張って下さい」の「が」が出てこない。再び、右足を右後方に大きく動かしてみよう。司会の人動いた私をみて、終わりの礼だと直感したのか、「礼」と大きな声でいってしまわれた。私はあわてて、

「以上簡単ですが、終わります」

やや頭をおくれて下げながら、一気に言った。その間わずか数秒であった。このわずか一〇秒でも一時間、二時間もの間、壇上にさらされていたようで、体が熱くなっているのを感じる。

考えもしなかった思いがけない短いことばに、バツの悪さを感じながらおろる。もうこれ

で終わってしまったという安堵が心の中を支配して、これまでの悩みが一度に吹き飛んでしまった。もう体の中には、張りつめたものはない。生徒と一人一人握手をして帰るとき、やはり来てよかった。悩んだけれど、そんなに恥などかきはしなかった。とにかく逃げないで来た自分になんとなく誇りがもてたようであった。

#### 4 どもり矯正所へのあこがれ

松本 進

#### A 矯正所との出会い

新聞の漫画の下の方に、矯正所の院長の顔写真といっしょに「どもり、赤面恐怖」云々と宣伝していたA矯正所を知ったのは、小学校高学年の時だった。

私は小学三年の時からどもりはじめ、ずっと悩んではいたが、「何としても治したい」と深刻に考えはじめたのは中学二年の時が初めてであった。全校朝礼で、号礼と「今週の目標」というのを発表する週番の役目が近づいたのである。

思いきってA矯正所へ案内書請求のハガキを出した。すぐにきた返事には、当時の私にと

つてはかなり高額な本の紹介があった。本を郵便で買うという慣れない買い物だったが、こずかいをはたいて思いきって買うことにした。

それからの毎日は、その本が到着するのを今か、今かと待つ日々だった。一カ月近く待つて私が本を手にしたのは、偶然にも、来週から私が週番だという、その前の土曜日だった。昼、学校から帰って、家族からその本を渡された時は飛びあがらんばかりに喜んだ。と同時に、これで週番がうまくいくとホッとした。家族がその本のことを尋ねたり、無断でそのよくな買い物をしたことをなじる声を、「むこう（矯正所）から勝手に送ってきたんだ」などと適当にごまかし、大急ぎで二階に持ってあがった。

二階で一人きりになり、かなり厚い本を、難しい漢字も何とか意味をとりながら、二時間ほどで一気に読んでしまった。

本には、矯正の技術的なこと、精神的なこと、それにその矯正所を訪れてどもりが治り、成功した人の多くの例が載っていた。各地の弁論大会で、優勝したという人たちの体験談が多く載っていた。その人たちの体験談、どもりが治った人の矯正所への礼状が、「僕も、もうじきあんなになれるんだ」という希望を与えてくれた。本に載っていた矯正所の建物や、いろんな測定器具の写真が非常に頼もしく私の目に映った。その日までいつも頭のどこにかぶっていた黒い雲が、きょうから取り払われて、目の前がパッと明るくなった感じだった。

## 矯正練習を始める

その土曜日の夜、早速、本に書いてあった通りに、腹式呼吸と発声練習をした。家の者に気づかれぬよう、できるだけ静かに練習をした。「この方法で練習すれば本当に治るのだろうか？」という不安と、「これを徹底的にやったら本に書いてある人たちのように、雄弁になれるに違いない」という期待が交錯していた。

土曜、日曜と懸命に練習した成果かどうかわからないが、月曜日の全校朝礼では、壇上に立つても不思議に落ち着いていた。そして一言ももらなかった。残る二回の全校朝礼もうまくいった。この成功は私を有頂天にさせ、このまま練習を続ければ、私のどもりはすっかり治るんだ、という確信みたいなものを与えてくれた。以来、その矯正所の本は私にとって一番大切な本、バイブルとなった。

本には、所要時間といっしょに、毎日続けてやる数種類の練習法が載っていた。はじめの二週間くらいは毎晩練習をした。しかし、つい面倒臭くてさぼる日が出てきて、翌日、国語か英語で当てられそうな時だけ練習するようになっていた。どもりは以前とあまり変わりなく、授業中当てられそうになると胸は高なり、言いつらい音ではどもった。

そんな状態が、高校に入ってもずっと続いた。学校で失敗した日などは特に、矯正練習を

さぼり続ける自分が情けなかった。それでも、いつかは治るはずだという考えは変らなかつた。そして、「本に書いてある通りに練習すれば必ず治るんだ」という考えは、「自習では効果がなくてもA矯正所へ直接行って、そこで先生の指導を受けながら練習すれば治るに違いない」という希望に変わっていった。本には「この本を読んで自習するより、直接来院して治療に励んだ方がより効果的だ」とあった。

高校も二年、三年となり、社会へ出る日が確実に一步一步近づいてくるのを避けられない運命として、身近に感じ始めた頃、「このままどもりが治らなかつたらどうしよう。将来会社に入っても仕事が入りまくできないに違いない」という思いに脅かされた。大学へ進学することに決めていた私は、社会人となるまでにあと四年間の猶予が約束されていた。大学を卒業するまでには絶対にどもりを治しておかねばならない、と痛切に感じていた。

## 大学受験

私は目標の大学を、内心秘かにB大学にしぼった。それは、A矯正所がB大学のすぐ近くにあったからである。今から思えば、A矯正所に通うのなら、東京都内ならどこからでも可能である。しかし山口県の片田舎に住んでいた私には、東京の交通の便利さまで考えが及ばなかつた。受験シーズンが近づくとつれ、「僕のどもりを治すためには、B大学へ入らねば

ならない」と、ほとんど強迫観念のように自分に言い聞かせ続けた。私の受験勉強へのエネルギーは、B大学へ入り、A矯正所へ通うという目標から生まれていた。

大学で特に学びたい理由は何一つ考えられなかった。ただ、A矯正所へ通えることと、のんびりとした自由な下宿生活、これまでのようにどもりに脅えなくてよい生活があこがれだった。結局、一年浪人しても、受験したB大学の延べ五学部は全て不合格で、同じ都内のC大学へ入学した。

高校時代、私はまずまずの成績で、三年の時の担任は国立大学の受験を勧め続けていた。しかし、三年の夏場から私は、国立大受験に必要な数学と理科の勉強を全く放棄し、密かに国立大学を諦めた。そのことは誰にも言わず、形だけ国立一期校と二期校を受験し、予定通り落ちた。その頃、東京のA矯正所は私の明るい未来への唯一の通り道だったのだから、間違っても地方の国立大学に合格などしてくれたら、困ったのである。

学生生活を送るため、東京へ出発した時のカバンの底には、中学生の時に買った、手あかに汚れたカパーのA矯正所の本が大切に収められていた。その時もまだその本は、私にとって最も大事な本であった。

東京に着いた翌日、私はその本を抱えて、A矯正所へ行き、長い間あこがれ続けてきたその建物を初めて目にしたのだった。

## 第二章

しかし、どもりを治そうとする努力は、古今東西の治療家・研究者・教育者などの努力にもかかわらず、充分にむくわれることはなかった。それどころか、自らのことばに嫌悪し、自らの存在への不信を生み、深い悩みの淵へと落ちこんでいった。また、いつか治るといふ期待と、どもりさえ治ればすべてが解決するといふ自分自身への甘えから、私たちは人生の出発（たびだち）を遅らせてきた。

## 1 民間のどもり矯正所でどもりは治るか

伊藤伸二

## どもりは治る

電柱に貼ってあるビラや看板で、また雑誌の広告の中で、どもりは治る、というどもり矯正所の宣伝を私たちは目にする。本屋では、どもりは必ず治せる、どもり最新治療法、なる本を見かける。また、新聞の学芸欄では、ことばの教室でどもりが治ったという報告やどもり矯正家の治した報告が目に入る。新聞の情報ほとんどは、どもりはこのように治った、また治せる、治す方法についての記事である。

この、どもりは治る、という情報は、まさに吃音者にとって唯一の救いであった。私たちは吃音者は、その矯正所に行き、そこで治療を受ければ、これまでの暗い人生がバラ色になると思っていたのである。

どもりは治る」と組織的に宣伝がなされた歴史は、七〇数年前にさかのぼる。それは、日本における吃音問題解決のための歴史の始まりでもあった。

東京師範学校長や東京音楽学校の初代校長を歴任した教育家伊沢修二が楽石社の事業を開始したのは明治三六年のことであった。

楽石社は、もともと吃音矯正を主な目的として発足したのではなく、正しい日本語や英語を教えたり、方言を矯正すること等を目的として発足した。しかし、その楽石社の募集に応じたのは吃音矯正の希望者ばかりであった。

伊沢のあみ出した矯正法は①呼吸練習——腹式呼吸法 ②発声練習——「ハへホ」練習、③精神強化訓練——精神統一等による吃音恐怖症の解消の三つにまとめられる。創業六カ月で二百名の吃音者を矯正し、その結果を恩師に次のように報告している。

「小生は本年五月此事業を開始し、今日迄に百九十三名の吃音者を矯正致し候。各患者に就き要する時日は種々にして、最も短きは唯七回に過ぎず、最も長きは二十回を責せり。その一回は各一時間を限りとす。其中全く治癒し能はざりしものは唯二人のみにて、其他は小生の指導の下に全く過程を練習し終り、何れも殆んど全治の効果を奏したり」

(信濃教育会・伊沢修二選集——昭和三三年)

明治三九年九月には矯正者千名、明治四三年には二千名の達成の記念会を開いている。伊

沢は二千名の吃音矯正を行なった経験をもとに、その効果と限界を明治四四年二月に開かれた楽石学院新築落成記念会の演説で述べている。

「先づ以てハへの練習で咽の繩をといてやると云ふと楽になりますから始めて落着くことができる。そこで精神の修養も出来る。先づ障碍を取ってから徐々と精神修養も積み然る後に此の発音器官を自由に使はせると云ふ方法でやる。そこで先づ二週間も致しませんと云ふと、一通りの障碍も取れ、あと一週間も尚母韻練習や会話の練習をしますると何でも言へるやうになる。そこで先づ出してやる。出してやるが何時も私が訓戒してやることは、決してこれで直ったとは思ってはならぬ。十年、二十年、三十年も吃って居た人が今直ったからと云っても後を練習せぬと云ふと又再び起るからして能く練習しろと云ふことを言つてやる。所が吃る人はそれが治ると非常にうれしい。今迄で締められて居た咽が解かれて自由に何でも言へるから是程嬉しいことはない。非常に嬉しい感じと共にもう自分で自分が十分直ったと云ふ心持がするから不養生したり、平日訓戒して置いたことに背いたりやる。是は吃が再発しないなどと思ふ為であろうが決してさう云ふものでない。吃りと云ふものは吃る原因があつて起るのだから、其の原因を取つてやれば直る。併し又其の原因を再び自ら拵へれば又吃るやうになるのは当然の話である。併しながら此処で矯正し

た者の中、三週間ですっかり直ってしまったと云ふ者も随分ありますが、それを原則と心得てはならぬ。大抵は其の後二、三ヶ月位の練習を要し、最も長いものは一年もかかっても尚確実に直ったと言ふことの出来ぬものもある」

(信濃教育会・伊沢修二選集―昭和三三年)

ここで注目すべきは、指導によってほとんど全治したと二百名の吃音者を矯正した実績を報告した伊沢が、二千名の指導をした後では「治っていないどもり」も認めていることである。つまり、吃音矯正終了後のどもりの再発を十分認めているのである。そして、その再発を防ぐには、吃音者自身による「どもりは治る」という強い信念と、日常の生活での絶えまざる努力にかかっていると述べている点である。

これは、現在の民間のどもり矯正所とかなり似ており、吃音者が矯正所終了後、何度も繰り返し矯正所を訪れるのはこのあたりの事情からくる。つまり、矯正所ではどもりらずに話せたという自信は必ず治るといふ信念を強化する。しかし、再発したら自分自身の努力が足りなかったと考え、再び矯正所を訪れるのである。どもりで悩んでいる人が四回、五回と矯正所行きを繰り返すのは稀なことではない。

### 治すという前提

吃音矯正事業創立の動機も、楽石社とそれ以後の矯正所には共通するものがある。それは、どもりをなんとかしたい、という吃音者への強い愛情から出発している点である。伊沢は実弟のどもりを治したいという兄弟愛が一つの動機となった。伊沢以後の吃音矯正家では、自分自身が吃音者であったことが動機となっている場合が多い。すなわち、自分が治ったように他の吃音者にも治ってもらいたいという思いが出發となっている。

どもりを伊沢によって矯正され、後に楽石社の副社長となった松沢忠太は次のように熱情を吐露している。

「我が多年の暗愁・苦悩は、今やこの嬉しき快癒に際して猛然として一種の反動的責務の情を喚起せしめたり。乃ち余は是より我全生涯を傾けて、必ずや吃音矯正の事業に委ぬざるをべからず」

(上沼八郎・人物叢書・伊沢修二、吉川弘文館―昭和三七年)

松沢のように、自分自身が吃音者であった人は吃音者への愛情がとりわけ深い。そのためにも、「どもりを治す」ことに執着し、また自分の体験から「どもりは努力次第で必ず治る」と信じてもきた。

「治す」ことを前提に出發した吃音問題の歴史は、明治三六年以来その前提を変えてはいな

い。矯正事業開始の動機も、その内容も、そしてその効果も限界も約七三年間ほとんど変わってはいない。

そして、残念なことに、吃音者の悩みは解決されなのまま続いている。どもり矯正所の終了者の実態調査をみても、完全もしくは、ほぼ完全に治った者は極めて少なかったことが報告されている。また、成人吃音者の団体である言友会に入会する人のほとんどは、一回または数回、どもり矯正所に行った経験を持っている。

「治す」前提を示され、「どもりは必ず治る」と宣伝された吃音者は、当然のこととして「治したい」と願う。そしてどもりを治す努力をする。自分で努力をして、または矯正所で指導を受けてどもりが治らなかつたら、たとえ、一時治っても再発した場合は、吃音者は自分の努力不足を責める。さらには、「どもりが治らなくては自分の人生はない」とまで思いつめてしまう。これらの吃音者は、治そうと努力すればするほど悩みが深まっていくという悪循環の中に入りこんでいってしまう。

伊沢・松沢らの愛情が、かえって吃音問題の解決を遅らせる原因となってしまうといえよう。

## 2 言語治療教室で吃音はなおるか

佐世省吾

## 不可解な吃音

八月に別府市で五年度の夏季カウンセリング・ワークショップがおこなわれた。私のグループにYさんという青年がいた。初日に、いろいろとYさん自身の心の悩みが出され、家庭問題など苦しい気持が吐露されていった。Yさんは、「これ以上、どうしても他人に言えない秘密がある」と言い、ついに泣き出してしまった。グループの人びとはそれから先、Yさんの秘密にまで立ち入ることはできなくて三日間がすぎた。

そして、偶然の出会いというか、夜中に私と二人で風呂に入った。二人でいろいろ話をする間、私はふと「私はどもりで大変困っている」ということをもらすと、急にYさんが心を開いて、「私も実はそうなんです。私のどもりは、私以外の誰も知らない。それで私は、絶対に人に知られまいとして必死なのです。しかし、それだけにことばの出ない苦しきはたとえようもない」と述懐してくれた。私もグループの人々も、まさかYさんの絶対に人に言え

ない苦しみが吃音であったとは、想像もできなかった。とうとう四日間、Yさんは自分が吃音であることを自分の口から他人の前で言わなかったし、グループの誰も気がつかなかった。このように、吃音は他人からみても聞いても吃音とわからなくても、本人はそれで死ぬ程の思いをしている場合と、その反面、他人はどもりと思っただけでも本人はそれ程問題にしていなない場合などいろんな在り方がある。両者が合意して吃音であるとかないとか言っても、場と時間がちがうとその在り方もちがうのがどもりの特徴である。この不可解などもりに対して公的な学校教育の場でのとり組みがはじまったのが言語治療教室である。

### 言語治療教室での現状

現在、わが国には、言語治療教室が全国で六三二カ所あり、(昭和五一年三月三一日現在、『NHKことばの治療教室』より)、小学校・中学校・教育センターなどの教育機関に設置されている。

これは、学校教育の立場からいうと、言語障害児のための特殊学級であるが、一般には「ことばの教室」と呼ばれており、通級制という形で学級経営がなされている。

この言語治療教室がではじめて、すでに一〇年以上の歳月がたっているが、その量的発展を見ると、今から一〇年前の昭和四一年には、全国でわずかの二四カ所だったものが、五

年後の昭和四六年には約一〇倍、一〇年後の昭和五一年には二六倍の六三二カ所という驚異的、まさに雨後の筍のごとき増加ぶりである。

これらの言語治療教室では、吃音児のみならず、構音障害、口蓋裂、言語発達の遅れ、難聴、脳性まひ、声の障害まであらゆる種類、程度の主訴をもつ子どもたちがその対象となっている。

しかし、全体的にみて、吃音児が大多数を占めているようで、教室によっては吃音が全体の半数以上を占めているところもある。

### なおりにくい吃音

それでは、これらの言語治療教室で吃音児に対して何がなされているのかを調査した結果を列記すると次のとおりである。

音読検査と称して教科書、劇の台本、紙芝居、スライド等を素材にして音読をしたり、読む練習をする。遊戯療法・本人との対話・電話機を使用しての訓練・録音しての話し合い・落語・即興劇・アナウンス教室・言語遊戯・ランゲージマスターの使用・リラククスな状態へ持ち込むための環境設定・本人や母親とのカウンセリング・サイコドラマ・ロールプレイング・催眠・自律訓練・行動療法・脱感作……等々その他の心理療法となっている。

これらのものがどういう目的で、何のためにおこなわれているかはそれぞれの教室でまちまちである。

結局、これらの方法を専門的に研究している人の知恵とテクニックを借りものにして、それを道具として、吃音をなおそうとしている。

なおるか、なおらないかわからないが、とにかくやってみようということである。うまくなおればよいが、なおらないときの責任はだれがとるのか、深く考えればおそろしいことである。

フロリダでは、なおらなかった子どもの親が当局を告訴したといわれている。

それでは実際に、これらの学級で指導を受けた児童生徒たちのなかで障害の程度が軽減されたり、除去されたとみなされたものがどれくらいあり、なおらないものがどれくらいかをみると、吃音についてはわずかに四割のものがなんらかの改善されたこととみなされ、あとの六割のものはよくなっていないというのが実情であった。これは、大分県下の言語治療教室六校の開級時から、昭和四七年度末までの調査の結果である。

もちろん、さきの四割は、どんな状態なのか、その時点ではよくなったとみなされても、一年後、二年後の時間的経過を考慮に入れたその子が「将来生きていく」という長い目でみた見地からのものではなかった。幼児の場合、数年後には吃音など忘れてしまったという事

例はあるが、それらは、はじめから吃音と呼ばれない方がよいわけで、とにかく吃音の予後はよくないといえる。

### 言語治療の教師とその研修

これだけ驚異的急増をとげている言語治療教室の実態の中で、言語治療を担当する教師の養成についてみると、今のわが国の現状では到底これに間に合うはずがない。研修の機会に恵まれたごくわずかの教師が、二カ月から一年の期間で研修が受けられる。その他の教師は、三月三十一日まで普通学級を担当していて吃音ということをほとんど知らないまま、辞令発表と同時に四月一日から言語治療教室の担当になり、吃音児を集め、指導をはじめるといふ現状がある。

吃音というものが、一年か二年の研修を受けて、それで他人の吃音がなおせるぐらい簡単なものでないことは、明治の楽石社以来、古今東西を問わず、幾多の先輩のたどった跡をみてもわかることである。

このわかりきったことが、なかなかわからない状況である。

吃音を治療するということが、どんなことか定義づけることも、きわめて困難なことなのかでおこなわれている。通常、吃音児の言語治療といえば、吃音者の発語行動における非流

暢さの改善がその目的とされ、ことばのくりかえし、ひきのぼし、ためらいをなくすることだけだと思われている。それがうまくいかないと吃音者のもつその他のいろいろな問題を解決してやることだとか、吃音者の行動や考え方をなおしてやることのように考えている人が多い。そののできる人が言語治療の教師であると自他ともに自負するところに大きなあやまりを見い出すことができる。

### 言語治療教室は吃音をなおすところではない

なんとすれば、吃音児の問題を解決してやるのか、なおしてやることができるか考えることは、あまりにも安易な、あまりにも人間というものを知らない、もっともきびしい言い方をすれば「傲慢」な人間存在の本質をわきまえない態度であるとさえ言える。

このような態度がある限り、吃音はさらに再生産され、永久に解決のできない問題となるであろう。

吃音治療というものは、もっともっと、はるかに人間存在の深い本質に根ざしたものであることを、これまで吃音で悩んで生きてきた人々が教えてくれている。

そして、そのなかには、これまでの「教育」ということばで呼ばれている一般通念的あり方への大きな反省が含まれており、人間教育への新しい方向性が指向されている。

ここではつきり言うのと、ことばの教室。言語治療教室は、吃音をなおすところでは決してない。もちろん矯正や治療をするところでもない。あえていうなら、吃音と呼ばれている子どもたちと、ともどもに生き教育をするところであろう。

その教育も、決して今までの学校教育の中で行われてきた、いわゆる「教える」というレベルで営まれている一般通念的な既成の教育でなく、これまでの教育の殻を打ち破った新しい次元のものである。

その教育への脱皮がなくして、現在、学校教育のなかでやられている教育のパターンをそのまま言語治療教室の中に持ちこんだのでは、言語治療教室の存在意義はなく、そのままであるなら、吃音を対象にする言語治療教室はもう不必要であるとさえ言えよう。

普通学級と同じパターンで行うとすれば、わざわざ言語治療教室を学校の一角につくって一週間にわずか二〜三時間通級するような無益なことはやめた方がよいことになる。

なぜなら、一週間に二〜三時間という時間は、児童生徒の全生活時間帯のなかで睡眠時間を除いて、わずか三パーセントの時間である。このわずかな時間であるとの九七パーセントの時間の言語生活に責任のもてる吃音治療ができるなど無謀な考え方であろう。

それが無益だとするならば、その無益のため二〜三時間の貴重な時間を費やすことは、現在の知育偏重の教育のなかで一層の無駄であることさえ人びとは気づいていない。「言語治

療教室で吃音児を扱うので、普通学級の担任教師が自ら行うべき、その子どもに対する教育の責任を放棄してしまっている」という人びとのことばを、今一番大切にすべきではなからうか。

### 新しい次元での教育

私たちはこれまでに吃音を客観的に科学的に扱おうと努力し、懸命のアプローチが続けられ数多くの理論がうちたてられ、治療法が工夫されてきた。

しかし、そのような科学的理解、客観的理解の上にたったアプローチのしかたは、吃音行動を「そのあるがままに」理解してきたのだろうかというところ、そこでいう理解なるものは、「吃音の理解」でなく、吃音についての私たちの理論を吃音と呼ばれる人びとに投射してきただけのものにすぎなかったのではなからうか。

むしろ、これまでのやり方で、治療してきた努力は、かえって吃音の再生産に結びついてきた傾向さえみられる。

そのことが事実「吃音」であるかどうかが問題でなく、そのようなことばで呼ばれている現実の事実（人間または場面）に対する私たちの関係の仕方が問題である。

関係の仕方ということになると、これまでの相手をどうしようか、こうしようかという

(How to do is to do) 1)とより脱皮し、そのことに対して治療者がいかにあればよいか (How to do is to be) への脱皮が提案されてくる。

すなわち、吃音者をどうするか、こうするかという「なおす努力」よりも、その吃音者に対して吃音者をとりまく人びとがいかにあればよいかということが、治す努力の否定への第一歩となっていく。

### なおす努力の否定のうえにたった吃音へのアプローチ

したがって、吃音が「よくなる」とか、「なおる」ということは、どもること、すなわち症状が改善され、回復する過程というよりも、広い意味の「自己実現」への過程であり、吃音治療の目的も、どもることを治療したり、問題を解決してあげたりすることではなく「完全に機能する人間」への育成であり、症状の消失や、知覚の変容、行動の変容は、その結果として起こることである。

症状の消失や、知覚の変容は、あくまで副次的なもので、この副次的なものの効果が皆無であっても、それが決して目的ではないわけである。

そのように考えると、吃音治療の目的は、一切の学校教育の目的と同じであり、人間としての生き方にかかわるカウンセリングの問題に帰結してくる。

## 最後に実践事例より

八月に別府市の五一年度夏季カウンセリング・ワークショップが開催された。

七〇人の参加者の中に言友会の三名が参加した。三名の者は「なおす努力」の否定の上になつて、自己の吃音を真正面からぶつけ前面にうち出した。

ワークショップの中で、三名の者は受容され、①自己一致 ②無条件の尊重 ③共感的理解という人格変容の必要にして十分な条件に一步でも近い雰囲気の中で、十分に機能する人間像に接近していった。

この四日間、この三名にとっては、吃音が吃音でなくなつてしまった。話し手と聞き手との関係の中で三名のことばのくりかえし、つかえ、ひきのぼしの非流暢さは、貴重な価値あることばとして高く評価され、むしろどもることに誇りがもたれていった。

どもることが受け入れられ、どもることがどもらないことよりも優位に立つと、そこにはどもりをなおそうとする動きは全くみられなくなる。

ここにこそ、どもる人の本当の意味の自由があることがはっきり証明され、ワークショップ終了後、彼らは言友会で、また実際の生活の場で益々生き生きと十分に機能しはじめていく。

なおす努力の否定の上にたった新しい次元からの吃音アプローチがカウンセリング・ワークシヨップの中でみごとに実証されつつある。

これらを学校教育の中にどう展開していくかが、これからの課題である。

さらに一般の全ての人びとに対する言語衛生の普及徹底のため、中学・高校の基礎教材の中に言語に関する知見を盛りこむことはもちろん、教員養成大学の一般教職課程の中で、是非とも全員に正しい認識をもってもらうことも目下の急務のひとつである。

### 3 三カ月でどもりを治せ

千葉芳秀

### 入社

昭和五〇年度の春、私は人並みに大学を卒業した。しかし、足を運んで試験を受けた会社は、ほとんど面接で拒否され、役所なら通るかもしれないと思って受けた私は、そこでも自分の実力のなさと、考えの甘さを思い知らされた。そこで仕方なく、かねてから親類の人に頼み込んであった大阪の会社に就職することになったのである。

親類の人は、その会社の幹部たちに僕を紹介する時、「どうかひとつお願いします」と、深々と頭を下げてくれた。このことが、いつまでも私の頭に残った。二二歳にもなって、知人に頼りながらしか職にありつけなかった自分が、情けなかったのである。

とにかく採用が決まり、私が配属されたのは、総務部人事課であった。私と一緒に入社した者は、ほとんど営業であったが、会社が私のハンディを考慮に入れてくれたのだろう。

私の採用にあたって幹部の人達は、一年もすれば本人も努力して、どもりを治すに違いないと考えていたようだ。どもりを治した人の例をあげて、お前にもできないことはない、治せないのは努力しないからだ、といわば三段論法でやってくるのだった。

入社後、社長との面接があった。社長は私に入社動機を尋ねた。私は即座に、「他の会社をたくさん受けたが、すべったから」とありのままに答えた。社長は表情を険しくて「もし君が、この会社で三カ月たって何もできないようなら、おとなしく立ち去りなさい」と言った。

私はこう言われた時、恐ろしいとも悲しいとも思わなかった。普通の人なら、無理に採用してもらったのだから、他の社員以上に頑張らなくてはと考えるだろうが、どうせ本意で入った会社ではないと思っていた私には、そういう気持は起こらなかったのである。

私の仕事は、人事課での月給計算と保険金算定の助手であった。ところが私は、算盤は上

手ではなかったし、細かい数字をながめるのも好きではなかった。むしろ、向いていないとさえ思っていたのである。

私と同期に入社した仲間達は、一カ月もすれば、すべての面で順調であるように見受けられた。私はまず、電話の応対でつまづいた。同期の仲間が、まったく上手に電話応対しているのを見るのは、辛いことであった。

それに各職場には必ず朝礼がある。朝礼当番は、平社員が交代制で受け持っていたが、当番にあたった者は、必ず前に立って何かを話さなければならなかった。私は、この時が苦痛であった。冷静になろうとすればするほど言葉が出ず、どもってしまったのである。

### 吃音矯正にとりくむ

ある時、私の現状を見かねたある上司が、民間矯正所に行くように勧めてくれた。私は、仕事にもまれていると、次第にどもりは治っていくだろうと考えていたが、利潤を目標とする企業においては、そんな悠長なことも言っておれなかった。

私は、さっそく民間矯正所を探し出した。案内の人から説明を聞き、その矯正所でどもりを治した先輩の話を聞いた時、私はもう大丈夫だと思った。これでなんとかなるだろう。その時、私には民間矯正所が神様のように思われた。私は職場に帰り、上司や同僚に、矯正所

に通うことにしたからもう大丈夫だと報告した。

矯正所の教師たちは熱心であった。ここで私はいろいろな技術を教わった。口のあけ方、母音のつけ方、呼吸の仕方など、この技術をより忠実に実行している者が、いわば優等生であった。だからみんなは、人前に立つ時、できる限り大口をあけ、できる限り息を吸い込み、できる限り母音を引きのばして話そうと努力した。

しかし、日がたつにつれて、私は初めのような忠実さがなくなり、次第に矯正練習に矛盾を感じ始めるようになった。話すことに、あれ程の努力がいるものなのか？ 話すということとはもっと別のものではないか？ 呼吸ひとつとっても、どもりでない人で話す前に意識して息を吸い込む人が、どれだけいるだろうか？。

矯正所が要求しているのは、言葉の上での完全さであって、各人の個性を滅却し、常人でもできないことのような気がした。反面、本当は私の努力が足りないからよくなるのか、という疑問も感じた。

とは言え、他に方法も知らない私は、惰性的に残業を早めに置き、矯正所通いを続けた。

この頃の私は、会社の電話を大いに活用してやろうと思いついた。電話から逃げずに、とにかく電話と接していれば、そのうち慣れてくるに違いないと思ったのである。

## 現実の厳しさ

ところが、事態は私が予想したほど、うまくは運ばなかった。電話に出る時、私はいつも周囲の眼が気になり、「あいつ、今度はうまく話せるだろうか」と職場の人たちが、耳をすませてこちらを窺っているような気がしたのだ。このような心理状態では、何度電話を取ってもうまく話せるはずがなかった。

これをみかねた私の上司は、こう言った。

「君の努力は認めるとしても、電話の相手のことも考えてあげなさい。それに、君が答えられることでも、相手に内容が通じないため、他の誰かがまた代わって答えなければならなくなる。そうなると、電話ひとつで二重の手間がかかることになる。利潤を目標とする企業では、なるたけロスを少なくしなければならぬのに」

その時から私は、電話の応対は必要最少限度にとどめることにしてしまった。

前にも書いたように、私は算盤や簿記が得意ではなかった。にもかかわらず、どもりを治すことばかり考えていて、算盤や簿記の練習をしなかった。私が計算したもののなかにミスが見つかり注意をうけたことも何度かあった。仕事を完全にやり遂げることにより、どもりのハンデの穴埋めをしなければならぬのに、これではまさしく泣き面に蜂である。上司

の信用をなくしていったのも、当然のことだったのかもしれない。

とにかく、この頃は仕事への熱意がなかった。いわば悪循環の繰り返しであった。

ある時、私が矯正所に通っているにもかかわらず上達しないのを見て、上司はこう言った。

「君は最近矯正所に通っているのかね」

実のところ、私はその頃矯正所の限界を感じ、週に一度位しか行っていないかった。しかし、上司には、よく行っていると返答するしかなかった。

「君がどもりを治す努力をしているかどうかを、私は、君が矯正所にまじめに通っているかどうかで判断する。それ以外に判断のしようがないからね」

私は、この時ほどいらだちを覚えたことはなかった。周囲のどもりに対する認識について、ほとんど絶望的なものを感じたのだった。

「君を誠にする」

その年も暮れの忘年会の席でのことだった。酒を飲み、歌を歌い、酔いもさめてきて、そろそろ皆が帰り支度をする頃、総務の部長が私を席に呼んだ。

「君はどもりを治す努力をしているのかね。今の君では、まだまだ社会人として半人前だ。ほんとうに矯正所に通っているのかね。まさかうそを言っているわけでもないんだろうな」

私はいろいろと弁解をした。最後に部長は、「では、ほんとうに矯正所に行っているのだな。電話で問い合わせてもかまわないのだな」と念を押した。

私はさんたんたる気持だった。説明することもできなかった。いや、説明すること自体がナンセンスであった。営業マンが売上高によって評価されるように、私もまた、どもりを治すことによってのみ評価されていたのだ。大事なものは結果であって、過程ではなかった。

帰りの電車の中で、酔っている頭の中に響いたものは、部長が最後に付け足した言葉であった。

「君がどもりを治さない限りは、私は君に対して断固たる態度で臨まなければならないだろう。もし君が、三カ月たつてもどもりを治せなければ、君を誠にする」

来るなら来やがれ、するなら勝手にしやがれ、私の腹はこの時決まった。

私が会社をやめたのは、それから三カ月たつてからであった。

## 第三章

私たちは知っている。どもりを治すことに執着するあまり悩みを深めている吃音者がいることを。その一方、どもりながら明るく前向きに生きている吃音者も多くいる事実を。

そして、言友会十年の活動の中からも、明るくよりよく生きる吃音者は育ってきた。

## 1 言友会の歴史

伊藤伸二

### 最初言友会は

言友会は、どもりを矯正する会として出発した。副称として『日本吃音矯正会』が使われ、呼吸・発声練習を中心に、構談・詩吟・街頭演説など吃音矯正に有効と思われるものは積極的に例会に取り入れた。全員のほとんどが、民間のどもり矯正所で指導を受けた経験があり、各矯正所のいろいろな矯正法から学ぶことができたのである。

### 言友会の活動

言友会は、どもりを治すというこれまでの矯正所と同じ目標で出発したが、活動のスタイルでは大きな違いがあった。

次の五つが主な特徴である。

① 専門家がいなかったこと。

言友会の例会で指導をする人びとに、いわゆる吃音の専門家は一人もいなかった。そのために教える側と教わる側にはっきりとした区別はなかった。教わる立場にいた人が、二、三カ月後には教える立場に立つこともできた。新しく会に入った人には、例会での司会をできるだけまかせるようにした。五〇人程の前で挨拶をしたり、講談や詩吟などを通して人を指導する経験は、これまでほとんどの人が経験してこなかったことだけに、会員各自に大きな自信を植えつけることになった。

どもりながら司会をする人に、ヤジが飛び、笑いがあたらえられた。会員たちは、そこにこれまでのどもって笑われた笑いとは違う笑いを感じ、どもることへの暗いイメージは少しずつ薄れていった。

②例会の中心がクラブ活動であったこと。

言友会では、当初から呼吸・発声練習そのものよりクラブ活動が重視された。講談クラブ、詩吟クラブを通して、自分の生涯の趣味としてそれを本格的に続ける人もできてきた。演劇クラブは専門家の指導も受けながら、文化祭等で楽しい演劇を披露した。

これらのクラブの他に、社交ダンスクラブがあった。ダンス教室の先生を例会に呼び出すトップの練習をした。その後はダンス会館がクラブの例会場となった。

どもってどもって申し込んで断わられた人も、回を重ねるうちに堂々とフロアを中心で

踊ることができるようになった。これまで女性と話をしたことがなかった人もダンスを通じて始めて女性と話ができた。創立記念祭や文化祭の時には、一流バンドを呼びダンスパーティが開かれた。パーティ券を売りに歩く会員には、もう会に参加した当初の暗い雰囲気はなくなっていた。

③ いろいろな行事を企画したこと。

創立記念祭、合宿、文化祭を私たちは東京言友会の三大行事と呼び重視した。

これらの行事の実行委員は、原則として会に入って日の浅い人が選ばれ、企画を立て、スケジュールを組み行動しなければならなかった。これまで自分の殻に閉じ込もっていた人が、自分のことより言友会全体のことを考えざるを得なくなり、新聞社に放送局へと交渉に出かけた。ひどくどもりながらも交渉が成立し、新聞やラジオに取り上げられた時の喜びは、新入会員にとって何にもまして大きかった。これまで全く電話をかけられなかった人が、実行委員を引き受けたために、電話をかけられるようになった。

一人、一人の行動がこれらの行動に取り組むことによって積極的になっていった。

④ 全国に会が広がり井の中の蛙にならなかったこと。

東京で活動した会員が関西に言友会を広げ、昭和四一年一〇月には言友会関西支部結成大会がもたれた。昭和四三年には、東京で各地の言友会の連絡を密にしようと全国言友会連絡

協議会（全言連）の第一回全国大会がもたれた。そして、「全国のどもりを解放しよう」と全国の仲間と呼びかけた。各地の言友会は、その地域に根ざした活動をし、全国大会では、活動を通して学び得たものを互いに交換し合った。京都言友会が自治体から助成金を得たという経験は、さっそく東京や大阪でも生かされた。東京の例会スタイルは各地の一つのモデルになった。各地が刺激し合うことによって、活動が自分たちだけの枠に閉じ込もっていくことを防ぐことができた。

⑤他の団体との交流を深めたこと。

言友会が生まれたほぼ同じ時期に、全国の障害者運動が活発に進められるようになった。障害を持つ人びとが自分たちの要求を自分たちの手で獲得するのだと立ち上がったことは、私たちにも大きな勇気を与えた。京都、大阪、東京の各言友会がこの運動に加わっていく中で、障害者の要求事項の中に成人吃音者の要求も加えられていった。

一方、青年サークルとの交流も盛んに行なわれた。合同ハイキングがもたれ、文化祭などには他のサークルからの友情出演が花をそえた。昭和四六年三月、「ひとりぼっちの若者をなくそう」のスローガンのもとに、東京で第一回若者フェスティバルが開かれ、言友会は事務局団体として活躍した。

障害者運動に携わる人びと、青年サークルに集まる人びととの交流の中で、社会に対する

私たちの目はいつそう開かれ、どもりに対する考え方も大きく変化していった。

### 矯正から克服へ

このような言友会の活動の中から、自分の殻を打ち破り、行動に自信を持つ明るい吃音者が育っていった。吃音矯正とともに明るく生きる吃音者づくりが大きな柱となっていたことが、これまでの吃音矯正機関との大きな違いでもあった。

しかし、会創立の目的であった「吃音矯正」については何らの成果をあげることではできなかった。会員のどもりは治らなかつたのである。

会を作った二年後、明るく前向きに生きる吃音者が活動の中で育っていった自信から、私たちは『日本吃音矯正会』という看板を降した。その看板を降してもどもりが治っていかなくとも活動を続けていく自信が持てたからである。

言友会は「吃音矯正」から「吃音克服」の立場をこれまで以上にとり始めた。

### 言友会の拡大と全言連大会

東京、京都、大阪と広がっていった言友会が全国に広がっていく過程には三つの型があった。

①東京言友会で活動していた人たちが大学を卒業したり、職を変えたりして帰郷し、地元で言友会を組織する。

②マスコミ等で東京や大阪の言友会を知りその言友会の指導のもとで、地元と言友会を組織する。

③独自の吃音者グループを作っていた人たちが言友会と名称を変え全言連に加入する。

このように言友会が全国に拡大されていくにつれ、言友会の全国大会では様々な論議が交されるようになっていく。

第三回大会（昭和四四年、大阪市）では、京都言友会が自治体から助成金を得たことをきっかけとして、各地の言友会の国や地方自治体に対する働きかけが強まった。

第四回大会（昭和四五年名古屋市）では、吃音克服の問題について話し合われ、京都言友会のどもりながらも明るく話す姿が注目を集めた。第五回大会（昭和四六年、東京都）では、言友会の運動を障害者運動として取り組もうという意見が出された。

第六回大会（昭和四七年、京都市）は第一回吃音問題研究集会として開かれ、言語障害児教育の担当教師や、研究者が参加した。

第七回大会（昭和四八年、長崎市）は、全国大会が、始めて地方の都市で開かれた。これは地方の言友会が大きく発展する契機となった。しかし、どもりについての考え方は、それ

その言友会が独自のものを持ち、お互いの主張にはかなりの違いがあった。

### 全言連事務局

長崎大会後、これまで東京、京都言友会が担当していた全言連事務局が、新しく大阪市平野区に設置された。

新しいこの事務局は地域の言友会から独立し、どの言友会からも影響されず全国の動きを考えていくことができ、単に言友会をどうするかという問題だけでなく広く成人吃音者の問題を考えてゆこうとした。新事務局は言語障害児教育教員養成課程が置かれている大阪教育大学平野分校に近く、ことばの教室や研究者からの情報が入りやすく、子どものどもり、ことばの教室の問題、他の障害の問題などどもりを総合的に考えられる有利な立場にあった。

### どもりは治らないかもしれないことを考えていこう

多くの吃音者の典型的な体験をもとに構成した「K・M氏の体験」をテーマに、昭和四八年一〇月に全国言友会代表者会議（京都市）が開かれた。これまでの吃音者のあり方が反省され、次の事が論議された。

1 「どもりを治したい」、「努力すれば治る」という考えが根強い中で、治すための努力を

することは、治るかもしれないという期待を持ちつづけて、どもりながら行動していくということの妨げとなっているのではないか？

2 どもりが治ればなんでもできるという甘えを切り捨て、どもりを受け入れて生きるには、「治らない」と考えることが大切ではないか、

など、どもりから逃げ、人生を消極的に送っている吃音者に注目して、代表者会議の話し合いをもとに、言友会の機関誌「ことばのりずむ」7号（昭和四八年）では、「どもりは治らないかもしれないことを考えていこう」という特集が組まれ、全国の言友会に問題提起された。これにより、全国各地の言友会は共通の問題について考えようとする方向がでてきた。

### 行動する吃音者へ

第八回全国大会（昭和四九年、高野山）は、「どもりは治らないかもしれないことを考えていこう」を別の角度からとらえた。

『これまでもることを問題としてとらえ、どもりを治すことを考えてきたが、我々が積極的に行動しようと思ってもいつも第一歩が踏み出せなかったのは本当にどもりが行動の障害となっていた為だろうか。静かに、これまでの自分の体験をふり返り、一度、どもりという枠を取り払って、どもりに隠されてきた様々な問題を考えてみよう』と、問題提起された。

## 治す努力の否定

これ等の討論の中で、どもりを治そうとすることが吃音者の問題解決につながらないばかりか、どもりの悩みを深めていきやすいことが分ってきた。

これまでの言友会活動を振り返り、明るく前向きに生きている吃音者が育ってきたことは、広く社会に出ることを目指した言友会活動の成果であると積極的に評価をした。

幾多の話しあいを通して、言友会では全言連ニュース（昭和四九年八月）で「治す努力の否定」が提起され、引きつづき「ことばのりずむ」8号（昭和四九年十一月）で「治す努力の否定」の特集が組まれた。「治す努力の否定」は「どもりは治らぬものと考え、どもりを持つままの生き方を確立していこう」という考えを一步進めたものであった。治す努力を否定することにより、言友会も吃音者もどもりのとらわれからぬけ出し、これまで費やしてきた治す努力を、よりよい人生を送るためにの努力に向けようとした。

「治す努力」というこれまで誰もが信じて疑わなかった吃音問題解決の一方向を私たちは否定した。「治す努力の否定」は、言葉の持つ強烈なイメージもあって、全国に議論を巻きおこした。言葉そのものへの抵抗もあり、多くの批判も受けたが、各地の言友会が積極的にこれを受けとめ討議のための合宿が何度ももたれていった。

## 吃音者宣言まで

第九回全国大会（昭和五〇年、兵庫県鉢伏高原）では、「治す努力の否定」を受けて、「よりよい人生を送るために我々はどんな努力をすればよいか」ということを話し合い、一人の人間としての生き方の確立を目指した。

昭和五〇年一〇月から、全国各地で開かれた吃音相談会では、「治す努力の否定」の考え方を、言友会外部の吃音者に訴え、悩みの中にある吃音者から批判を受けて今後の活動にかそうとした。しかし、意外にも私たちが相談会で知り得たことは、「治す努力の否定」とわざわざ言わなくとも、言友会の活動を知らなくても、どもりを持ちながら明るく生きていく人たちが多くいるという事実であった。

全国でどもりながらも明るくすばらしい人生を送る人が多く出、どもりながらの人生を主張していくとき、どもりのイメージは暗いものから明るいものへと変えることができる。私たちがこれまで犯してきた失敗（どもりを治すことにとらわれる）と同じ失敗を繰り返す人はなくなるであろう。どもっていることがそのままが受け入れられ、個性と能力を発揮して生きられる社会の実現を目指した『吃音者宣言』が昭和五一年五月言友会発祥の地東京で開かれた言友会創立十周年記念大会で採択されたのである。

## 2 言友会誕生のエピソードと言友会活動の思い出

伊藤伸二

### どもり講談教室での出会い

偶然に会い、なんとなく別れてゆく淡白な出会いの多いなかで、その人と私の出会いは何かが起りそうな、そんな殺気をはらんでいた。

民間矯正所に籍を置き、「どもりが治るのならなんでもやってやろう」と意気盛んだった私は、「講談のリズムでどもりを治そう」との田辺一鶴さんの呼びかけにもすぐに応じていた。今でこそテレビ・寄席などで大活躍の一鶴さんも、トレードマークのヒゲがまだ生えやらぬほんのかけ出しだった。どもりを治すために講談の世界に入り、講談ではどもらなくなったという実績をふまえての呼びかけだけに、かなりの人が集まっていた。

一人での個人参加が多いなかで、ひととき声高にしゃべる集団参加の一団があり、その声がそれでなくてもおとなしいまわりの人達をますますおとなしくさせていた。私が矯正所仲間を大勢ひきつれて顔をみせていたのだった。一応の説明が終った時、おとなしいはずの参

加者のなかから異質な人間が前に出て、「先生」と、大声を出した。これまでの説明の間に、はみかけなかった顔だった。医者と教師以外の「先生、先生」に不快感を持っている私には、それだけでいやになっていた。

「私もどもりを治すためのこのような会のできるのを待っていました。私も一生懸命やりま  
すから頑張りますよ」と握手を求め、贈り物まで手渡した。説明も聞いていないで、私達  
大集団をさしおいての大きな態度に私達は相当頭にきていた。

矯正所仲間のなかで、どもることにかけては質量共に一番と折り紙つきのK君には、態度  
そのものより彼の口から飛び出す流暢な日本語にがまんならなかった。会合が終るとK君は  
その人に詰め寄っていた。「君は全然どもらないのになぜこの会に来たのか？ それに贈り  
物なんかして何か魂胆でもあるのか」。仲間内では通じるK君のことばもその人には通じな  
かったかも知れない。しかし、K君の態度からただごとでないことはわかったらしかった。

一瞬殺気立った空気が流れ、帰りかけていた人も立ち止った。「なあ、みんなで食事でも  
してゆっくり話そうや」と、声をかけたのは今は故人となられた親話会（どもり矯正会）の  
依田さんだった。冷静に考えれば彼に詰め寄る積極的な理由を見つけられなかった私達は、  
その言葉に救われた思いだった。むしろK君の森の石松ぶりにおかしさすら感じていた私達  
は、むしろ全員参加でのぞんだ。

おなかが一杯になったK君がおとなしかったので話ははずんだ。「遅れて来たんで、すわる場所がなかったんです。それで『チョット』と思ったパチンコで、思いがけずにとれた景品を、持って帰るのもめんどろなので渡したのがどうも誤解されてしまつて」と、その人はテレで説明をした。大笑いだった。誤解はとれてもK君にとっては、「私も前はひどいでもりで苦しんだんです」のことばだけは納得いかなかったらしい。それだけその人の日本語は確かなものだった。

この人こそ、言友会の生みの親、長い間東京言友会の会長をつとめ、全国言友会運動の先頭にも立つ丹野裕文その人だった。そして民間矯正所の仲間をひきつけてきていたお山の大将は、当時大学一年生の私で、言友会はこの二人の殺気だった出会いから始まったのだった。

### 矯正所で格闘するどもりたち

私には、丹野さんがどもるどもらないより、彼が歯学部で家が歯科を開業していることの方に関心があった。私の歯はやぶ医者に徹底的に痛めつけられていたのだった。私はずうずうしくもさっそく丹野さんの家を今度は一人でたずねていた。これが丹野さんと私のつきあいの始まりである。

私の虫歯が治るころ、一鶴さんの「講談教室」への参加は随分減っていた。また依田さん

の親話会も謡曲が中心で若者の心をとらえることはできなかつた。

私の通っていた矯正所といえ、ユックリ、呼吸を整えて話せば治る」というのが基本で、「わーたーくーしーはー」の、どこか間の抜けた話し方を守る者が優等生ということになっていた。早口でしゃべりまくる私など、基本に忠実でない劣等生であった。まじめな人間からは、「君は本当にどもりで悩んでるのか」とまじめに聞かれもした。

ここには北は北海道から南は沖縄まで全国各地のドモリストが集まり、社会人の多くが職を捨ててまできていた。中小企業で働く者に、一カ月間の吃音矯正のための東京行きは職を捨てることにも等しかった。よくなったと喜んで帰る人に、「あれは一時的なもので、すぐに元にもどるさ」と、三回目というS氏が先輩顔に話すのが印象的であった。でもみんな一生懸命に頑張っていたし、雰囲気も結構楽しいものであった。

劣等生の私には、いつの頃からかどもりの治る治らないより、どもりの人がこんなにもいて、それぞれ力いっぱい闘っているのだという現実に関心があった。私はどもりがこんなにも大勢いる、ということが大きなショックだったのだ。

### 吃音者の組織づくりを決心する

矯正所の有効期間も終り、講談にもあき始めていた私は、赤倉という学生と丹野さんを訪

れていた。當時を振り返って丹野さんは、

「私は講談のリズムによる矯正法というよりも吃音者の会づくりに興味をもち、毎回出席していたが、その間多くの吃音者と知りあいになることができたのである。そしてその中の数名の人とともに親話会の会合に出席し、一鶴氏の講談教室と合併して新たな会を作っては、と提案したが予期に反して猛反対にあってしまった。

私としても、以前吃音者の会づくりに失敗している経験があるので、新たな会づくりの意欲はなく、また一鶴氏の教室のように会員の減少を見るにつけても、吃音者の組織づくりの至難さがつくづくわかるのである。

そんなとき私の家へ、一鶴教室で知りあった赤倉智（日大生）、伊藤伸二（明大生）の二人が訪れ、是非とも自分たちで新しい会を作ろうと相談をもちかけてきた。

しかし、私としても以前の失敗があるので、即座に応ずるわけにはいかなかった。が彼等の情熱と若いエネルギーならばもしかしたら今度は成功するかも知れない、と思う気持ちもあつた。

そこで彼等に質問した。

『自分はやり出したからには最後までやり通したい。君達にもその意気込みがあるのか？』すると二人は口をそろえて『必ずやり通す。失敗しても最後まで頑張っていく』と熱意をこ

めて答えてくれたので、『それでは！』と会づくりをする決心をしたのである。

(言友会誌『泪羅』七号より)

### 言友会結成

昭和四〇年一〇月、一三名のサムライが上野公園に集まった。熱っぽい話し合いに、映画好きのA君は、「血判状を作って誓おう」とまで言い出した。彼こそ最初の脱落者だったのだから、血判状を作っておけばとくやまれる。会の名前をつけるのに相当の時間を必要とした。「わかば」「あすなる」は紅一点のM子さん。政治好きのK君は、「日本吃音同志会」「吃音撲滅同盟」などといかめしい。五〇近くの名前が出て迷っていた時、それまで押し黙っていた神野芳雄君が重い口を開く、「ことばで結ばれる……ことばのとも……言友会」このことばで「言友会」は誕生した。

その後の役員人選では、丹野会長、伊藤幹事長以下、一一名全員役員という豪華な体制を作りあげた。私達は一日も早く会員を集める必要があった。役員ばかりでは会は動くものではないのだ。

講談・詩吟・弁論・話し方・社交ダンスのクラブ活動中心の例会は厳しい中にも楽しさいっぱいで、役員の自覚で欠席者はほとんどなく、例会後の喫茶店の語らいがまた楽しく、私

達は日曜日の例会が待ち遠しくてならなかった。私達にとって丹野さんはよき先生であり、また、兄貴でもあり、丹野さんの魅力が言友会の全てのような感じだった。それでも一カ月もすると、会員が増えていたのに例会参加者は減り、寒い冬の数名の例会はさびしさも一段とこたえた。早くもピンチを迎えたのだ。

翌四一年一月中旬、言友会の一大転機を迎えた。丹野さんの投書が朝日新聞に掲載されたのだった。言友会のマスコミ界への初陣であった。

#### ◇サークルへの誘い◇

「現在、日本の吃音矯正はすべて民間に委託されているが、営利が目的で、真に吃音者のためを考えていないようです。それで都内に住む吃音者有志で、言友会をを作り吃音者自身の団結の力で克服しようとして試んでいます。

会員は現在三〇余人で、弁論、講談などのクラブ活動を行っています。吃音者の参加を歓迎します」。

反響はすごく、電話や手紙で問い合わせが殺到し、言友会は役員だけの会からの脱皮に成功した。毎週水曜日開かれていた幹事会に新しい人も加わり熱っぽい話し合いが続いた。終

ったあとのおにぎり屋での一杯こそ若い私達をひきつけていた。会の将来を、また先輩の人生をみんなで考え語るうちによく最終電車に乗り遅れ、近くの会員の家で泊ったりもした。丹野さんのエネルギーが会に熱っぽい雰囲気を与え、人間関係も血の通ったものになったり、会は除々に力をつけてきた。

### 言友会発会式

昭和四一年四月三日、朝日新聞は大スプークをやつてのけた。他紙に全く載っていない大きな記事。「力を合わせてどもり克服に励む言友会、今日発会式」、三段抜きの大きな扱いに、私たちの二カ月にわたる努力がむくわれた思いだった。例会にほとんどの会員が参加し、演劇に講談にと練習にはげんでいたのだった。新聞を見ると私はすぐに丹野さんの家に向つた。二人で会場に向う車のなかで私達ははしゃいでいた。「あんなに大きく出たんだから二〇〇人は来るな」「いや三〇〇はかたいよ」やけに車が遅かった。みんなもすでに新聞のことを知っていてうれしそうに準備をしていた。記者席、来賓席は前列に用意した。私といえは三〇〇人の大聴衆の前での報告を頭にえがいて胸は高なっていた。しかし開始の時間が来ても目につくのは準備をしている会員だけ、三〇分遅らせても結果は同じで、会員すら全員参加でなく、新聞を見てきた人などほとんどいなかった。

私たちはここでやっと現実に戻らなければならなかった。やたらと主のない椅子席が目立ち、私はそこに目をやりながらこれまでの会の報告をした。どもる元気もなかった。でも、会員は出席者の少ないのに反発するかのような熱演ぶりだった。中でも演劇部の「模擬国会」の迷演には、笑いとひやかしの声援がとんだ。みんな素直に自分の地を出していたのだ。

### 老朽した家屋を事務所に

発会式が無事に終って、会員も八〇名近くになり、いろいろな活動が可能になってきた。新聞発行、会員の連絡と会の仕事は急が増え、いつまでも丹野さんの家をずうずうしく使うわけにはいかなかった。聞きとりにくい電話、それもひんぱんにかかってきては丹野さん一家がノイローゼになるのも無理なかった。

しかし役員以外の会員はどこまでもずうずうしく、総会で提案された「事務所設置のため、千円カンパ」に猛烈に反対をし、そのまま丹野さんの家を使っていこうと言うのだった。やっとの思いで、わずかの差で可決されたものの前途は暗かった。

そんなとき私達の新聞での呼びかけに、すぐ応じてくれたのは、かつてどもりで苦しんだ坂谷松栄さんで、その日すぐ私達は喜びいさんで坂谷さんの貸そうという一軒家に出かけた。港区白金とくれば迎賓館が頭にうかぶ東京の一等地、この家がその家ですと言われてもしば

らく信じられなかった。東京の文化財保存の実績を誇るかのように、今どきめずらしい汲み取り式の便所までついていた。私達が靴をぬいで上ろうとすると、そのままがいい、とおっしゃる。恐る恐る足を踏み入れると、バリ／＼と床板が破れる。私はもうがまんならなかった。とても人が住めるとは思えなかったのだ。案の定一〇年近く人が住んでいなかったらしい。

若い私達の思いは通じず、坂谷さんと丹野さんの話はすすみ、一カ月五、〇〇〇円で話は決った。総会でもめながらも集めたカンパ金は全て家屋修復に使われ、会員である大工さんを中心に一〇数名の会員が作業にあたった。ほこりにまみれているうちに、私達はこのボロ家に愛情をいだき始めていた。電話が入りタタミを入れ替えると泊り込む人も増え、まさに仲間のたまり場となつていった。

### 映画「若者たち」のこと

事務所が言友会の活動の中心の場となるにつれ、そこには常に明るい笑い声が絶えなかった。若い私たちには雨もりのするどんなボロ屋でも、五人も一〇人も同じ屋根の下で夜遅くまで語れる場があるということはありがたかった。マージャン屋や酒場に早替わりすることもたびたびあったが、悲しいときうれしいとき、自然と足は事務所に向かった。

会が充実するにしたがつて、これまでの活動では物足りなくなってきた私たちは、何か夢のあることがしたくなっていた。また言友会の存在を大きくアピールすることはできないか、常にそのことが頭の中にあつた時期でもあつた。

ある日、新聞で「若者たち」という映画が制作されながら、配給ルートが決まらず、おくらになりかけているという記事を読んだ。テレビで放映されていたものが映画化されたのだつた。テレビで感動を受けていた私は、いい映画が興業価値がないことでおくらになることが不満だつた。そしてその置かれた立場を言友会となぜかダブらせていた。

「そうだ、この映画を全国に先がけて言友会で上映しよう。そして吃音の専門家に講演をお願いし、講演と映画の夕べを開こう。吃音の問題を考えると同時に、映画を通して若者の生き方を考えよう」

そのことが頭にひらめくと私の胸は高鳴り、もうじつとしておれなくなつた。さっそく制作した担当者に電話をし、新星映画社と俳優座へと出かけていった。どもりながら前向きに生きようとしている吃音者のこと、言友会のこと、そして今の私たちに必要なのは、映画『若者たち』の主人公のように、社会の矛盾を感じながらも、社会にたくましくはばたこうとする若者の生き方であることを訴えた。私たちの運動には理解や共感をしえても、未封切の映画の無料貸し出しとは別問題であつた。あっさりとは断わられたが、私は後ろへ引き下が

れなかった。東京の吃音者に言友会の存在を広く知らせ、共に吃音問題を考え、生きる勇氣を持つにはこの企画しかないと思は思いつめていたのだ。

私は、六本木にある俳優座にその後も何度も足を運んだ。交渉を開始してすでに七カ月が過ぎた。そして、映画『若者たち』も上映ルートが決まらぬままであった。再度私はプロデューサーに長い長い手紙を書いた。あまりのしつこさにあきらめたのか、情勢が変化したからなのかわからなかったが、この手紙がきっかけとなって映画を無料で借り出すことに成功した。そして、上映運動が展開される時には協力を惜しまないことを約束した。これまで私が生きてきてこの日ほどうれしかった日はかつてなかった。さっそく事務所にいる仲間に伝え、手をとって喜んで。

とにかく、二五〇名もの人を集め、主演の山本圭も参加してくれての夕べは成功した。会場を出る時参加者は『若者たち』の歌を口ずさんでいた。

### 吃音者、街に出る

私たちのすばらしいオンボロ事務所も、四年間の会の活動の重みに耐えられなくなるほどに老朽化してきた。これまで活動が続けられたのはこの事務所のおかげと思えば、壊れてしまふのをそのまま見過ごすわけにはいかなかった。会費月二〇〇円の言友会に、事務所を修



署名運動展開

理するまとまったお金があるわけではなかったが、私は昭和四五年の活動方針に事務所改築を入れた。方針案説明の時その費用の捻出方法を質問された私は、何とも答えられなかった。故吉田昌平氏と私は、京都と東京に離れてはいたものの、会活動で困ったことが起きた時や新しいことを考えついた時、私が京都へ出かけたり、彼が東京へ来るなどして常に密接に連絡をとりあっていた。新宿のサウナが彼と私の会議室だった。ゆったりした休憩室の中に

二人でいると、夢はいつも果てしなく広がっていくのだった。私以上に政治の力を信じ、政治活動にもエネルギーを集中してきた彼は、私に吃音問題の解決のための請願運動の必要性を説いた。賛成をした私は、それでは全国的な規模でカンパ運動にもとりくもうと逆に提案をした。若かった私は恥ずかしいことに、その時カンパ金の方により強く心が動かされたのだった。

さっそく東京、京都、その他の言友会

で話しあいもたれ、署名、請願運動を全国の言友会が展開することになった。署名用紙やビラが印刷され、狭い事務所がより狭く感じられるほど積み上げられた。

「これだけのビラを配るのに一年はかかるぞ」

とそそっかしい印刷担当者責めたが、あとのまつりであった。

事務所で泊ることの多かった私は、いつも山と積まれたビラを眺めながら眠りについた。

このビラを早く片付けなければならぬ。私たちは請願運動にエネルギーを集中していった。

立看板が用意され、ハンドマイクがあるメーカーから提供された。それらを運ぶトラック

も用意された。署名カンパ運動が始まったのは、冷たい風の吹きつける二月のことであった。

「ご通行中の皆さん、私たちはどもりです。自分のどもりを克服しようと集まっている言友

会の者です。言語障害児対策は日本ではたいへん遅れています。全国にもっともっと多くの

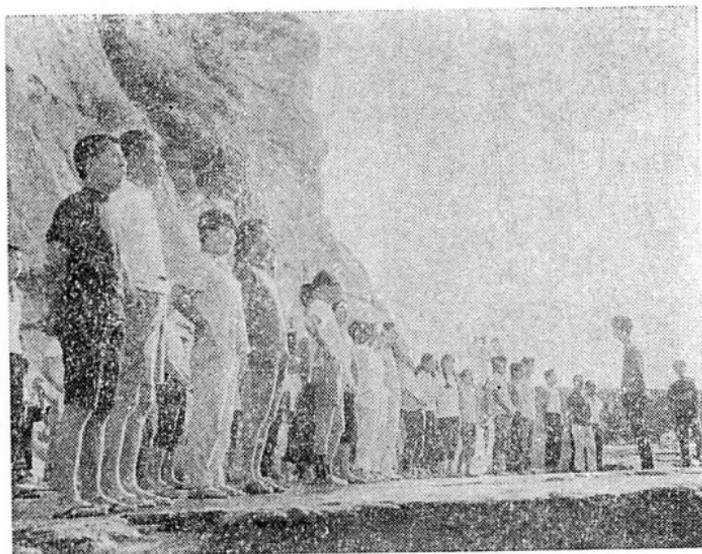
言語治療教室の設置と専門の治療機関を作らねばなりません」

時にはどもり、時には大雄弁家になったつもりでマイクを手にした。新しく入った会員も

古い会員も街頭に立った。一週間に三日、今日は有楽町、明日は目黒と東京中で署名カンパ

運動が続けられた。昭和四五年二月から一二月の一一カ月の間に、署名約五千、カンパ金四

三万円、言友会の会員の個人カンパを含めて六〇数万円が私たちの手元に集まった。



夏期合宿に103名が参加

### 事務所新築に動く

その頃、言友会には、責任ある活動をしていくための専従がおかれた。その費用は全てカンパに頼らなければならなかった。六〇数名が毎月会費の他に五〇〇〜一、〇〇〇円のカンパを継続してくれることになった。ともすれば全ての仕事を引きうけがちになり、昼間は一人きりで事務所にいる専従者を孤立させないためにも私たちは力を入れて活動を続けなければならなかった。その熱意が実ったのか、その年の言友会の夏の合宿には一〇三名という記録的な参加者を得た。吃音者のエネルギーが千葉の海に爆発したのだった。

しかし、事務所改築の交渉は順調には進まなかった。新しく建てた建物は坂谷氏の登記とするかわり、半永久的に言友会が使用し、家賃

の月五、〇〇〇円は二〇年間据え置く」という条件に、運営委員会では議論が百出した。言友会が全額費用を負担し、更に家賃を払うのはおかしいという意見が強く出され、たびたび坂谷氏と交渉を重ねた結果、時価二五〇万円する借地権を七〇万円で買い取ることに成功した。寒い夜、凍える手でマイクを持って訴え、寄せられた暖かいカンパ金六〇数万円は全て借地権の買い取りで消えた。常識では考えられない安い買い物ではあったが、お金のない言友会にとっては大きな金額であった。事務所新築は新しい局面を迎えた。

### 全障研とともに事務所を

障害者運動に積極的に関わる中で、私たちと全国障害者問題研究会（全障研）とのつきあいが始まっていた。

そんなある日、私は、新宿にある全障研の事務所に遊びに出かけた。六畳一間のアパートを事務所として使用していた全障研も、また事務所を求めていることをそのとき知った。世間話の中から、言友会が事務所を作ろうとしているとの話がでた。そして共同出資で事務所を建てようというところまで話が進んだ。建築費用は折半し、所有は言友会で、五年間無料で全障研が一室を事務所として使い、五年たった時点で全障研が出した金の半分を返却するという条件は、私たち言友会にとっては願ってもないことであった。しかし、借地権買い取

りその他ですでに八〇万円近いお金を使いきり、私たちにはお金が全くなくなってしまった。私たちはまた、金策に苦勞しなければならなくなった。

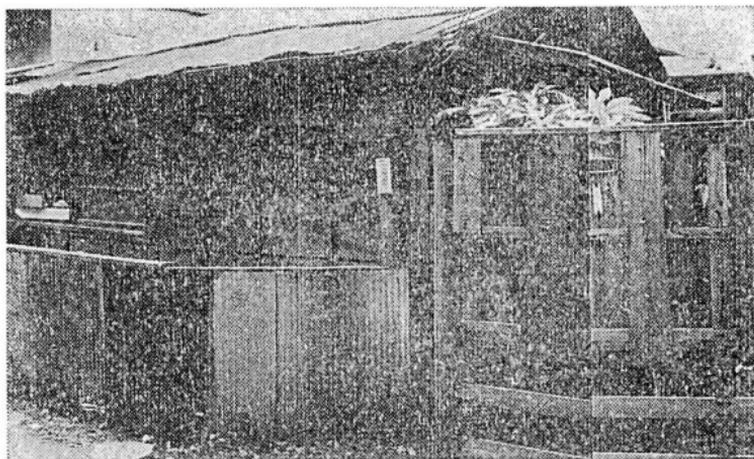
その年五月の第四回言友会全国大会（名古屋）では、事務所新築を東京言友会のものと考えず、全言連の事務所として位置づけ、全国でカンパ運動に取りくむという大会決定がなされた。

全国の仲間に応まされ、私たちはまた活動を開始した。私たちは再び街頭へ出るとともに、全会員にさらにカンパを要請した。

カンパとともに、自分たちの力で少しでもお金を稼ごうと建築を請け負ってくれた建築会社でのアルバイトが始まった。毎週日曜日私たちは朝八時に集合した。建築資材の整備が私たちの仕事であった。炎天下まっ黒に日焼けした私たちは上半身裸で作業に励んだ。交通費は自己負担、さらにそこで得た報酬は全て事務所建設の費用になるといふ条件の中でも多くの方が参加をしてくれた。働いている人にとっては日曜日は休日、それを返上しての参加だった。近くを通りかかったからと西瓜の差し入れをしてくれた会員、また建設会社の人の善意に励まされながら、私たちは汗にまみれた。

「風呂代ぐらいは出そう」

と言うと、



懐しい旧事務所

「風呂代、出してくれるのですか？」

と若い会員がうれしそうに言った。その頃の風呂代はまだ五〇円だったであろうか。みんなと汗を流しあい、風呂につきりながら、一日の仕事ぶりを話しあった。

「今日の分はトイレのタイル分ぐらいかな」

私たちは、新しく建つであろう建物に思いをはせた。

このバイトは、事務所が新築されてからも続いた。

言友会のエネルギーが一気に爆発した頃の活動は楽しかった。事務所には常に五、六名が泊まりこみ、記念祭に、文化祭に、合宿にと言友会三大行事に取りこんだ。

事務所新築が決まり、建設会社との契約をかわした私たちは、次の目標、五周年記念大会へとエネルギーを集中させた。映画『若者たち』のスタッフを囲んでの討論会、みんなで歌う歌「言友会の歌」の発表、夢のような企画が会員のしやにむな活動によって現実のものとなった。



完成した新事務所

の人びとがかけつけてくれ、四〇〇名の人と言友会の創立五周年を祝ってくれた。その数日後に旧事務所の取り壊しがあった。

いろいろな活動があった。けんかをしたり飲んだりした。失恋に泣きむせんだ人もいた。ボロ屋だけど本当にみんなが親しんだ事務所が今取り壊される。私たちの思いを知る由もない建設会社の人たちが無造作に取り壊していく。

「もっと大事に扱ってください。」

言友会の歌は、「若者たち」「昭和ブルース」の作曲家、佐藤勝氏が心よく作曲を引きつけてくださった。言友会の歌がテープによって届けられたとき、事務所の仕事がすませたあと、みんなで何度も何度も聞いた。さっそく生演奏のあるビアホールに楽符を持っていき、演奏してもらった。お客さんはどもりの人たちの歌とも知らず、私たちの歌に手拍子を打った。愉快だった。

当日は、いろんなサークル、障害者団体

一〇名ほどの会員の見守る中、事務所は音をたてて崩れていった。涙が一筋、ほおを伝った。ありがたい。長い間ありがたい。私たちは心の中で叫んでいた。

### 故吉田昌平氏の思い出

私が言友会の活動の中で涙を流したのは、旧事務所が取り壊される時と吉田昌平氏の死に直面した時の二回である。

言友会が好きで好きでたまらなかった彼と私はまさに言友会の虫であった。言友会の大会の議事の最中に喧嘩をしたり、意見が合わないと言っては何度も喧嘩をした。「お前みたいな奴とはもう会いたくない」とお互いに何度この言葉を言い合っただろうか。それでも私たちは離れることはなかった。彼は私にとって本気で怒りをぶつけられる相手であった。

彼との出会いは昭和四一年七月の下旬であったろうか。久しぶりに事務所を訪れた私は、見かけない男が一人、自分の家のように住みついているのを見て驚いた。一見おとなしそうで、変に図々しいこの男の間の抜けた話しぶりが、この家にいることの正当性を主張していた。

話してみると愉快な男で、自分が何故ここに住んでいるのかを、おもしろおかしく語ってくれた。どもりに悩み、なんとかどもりを治したいと思いつめた彼は、職を捨て、恋人と離

れて東京のどもり矯正所に来たのだった。

そこで言友会を知り、例会に参加するうちに会がおもしろくなり、京都にも言友会を作ろうと決意したという。

ちようど夏休みに入っていた私は、彼と私と、そしてSとIとの四人で共同生活を始めた。彼が土方やダンプの運転手をして稼いだお金は、私たちの夕食代に消えていった。カレーライスやブタ汁を作り、夜も遅くまで語り明かした。二カ月にわたる私たちとの付き合いの中で、彼は京都で言友会を作るエネルギーを貯えていった。

彼は、その後京都に戻り、言友会を作る活動を開始した。九月下旬京都に帰り翌年の六月まで、職につかずに彼は言友会の専従として仲間作りや事務所作りに専念した。

活動家が育ち、会が軌道に乗ったのを見届けて、彼はタクシーの運転手になった。どもりながらも親切に応待する彼のタクシーは評判であったが、その料金収入のカーブは言友会の活動に対する貢献度と見事に反比例し続けた。

その後、京都ろうあセンターの職員になった彼は、水を得た魚のように手話通訳や聴力検査・聴能訓練に打ち込んでいった。彼の豪放でユーモラスな性格と、人並み外れた行動力は、ろうあ者と吃音者との結びつきに大きな役割を果たした。彼のシンボルとも言うべき大柄な体と太い手の指で、体ごと語る彼の手話はろうあ者の信頼を得ていった。「僕は手話をやりな

がら話すとももらない、君も手話をやったらどうだ」と私たちにも推めたものだ。

彼は京都、私は東京と生活の場は離れたが、二人は良く会った。彼は、私のことを「千三つ」と言っては良くからかった。大風呂敷を広げた話ばかりで、千に三つしかまともなことを言わないと皮肉なのだ。その彼とて、私に勝るとも劣らず話が大きかった。私たち二人が会うと夢は大きく広がった。

彼は、良く東京に出てきては私と新宿のサウナで話し会った。私たちは、それをサウナ会談と名付けた。京都では受け入れてもらえない話でも、東京では受け入れられて話が進んでいく。それに力を得ては、彼は「東京は実行することを決意し動き始めた」と京都の会員を説得し、強引とも言えるやり方で京都言友会をリードして行った。

その現われが、雑誌『ことばのりずむ』の発行であり第一回吃音問題研究集会の開催であった。

当時、全国に言友会が広がりつつある情勢の中で、彼と私は「吃音児・者の指導はいかにあるべきか」「各地で吃音に対してどのような取り組みがなされているのか」「吃音とは何か」などを全国のレベルで総合的に考える雑誌や研究会の必要性を感じていた。京都と東京が一体となって雑誌作りが進められ、昭和四六年九月『ことばのりずむ』が創刊された。その後、彼が病に倒れるまで彼を編集責任者とする京都言友会がその発刊の責任を担っていった。

昭和四七年五月には、彼を実行委員長とした第一回吃音問題研究集会が京都で開かれた。彼なくしてはとも開かれなかったと言われる集会であった。冒頭の「ハヒフへ本日は……」で始まった実行委員長の挨拶は、未だに参加者の心に残っている。思えば、この吃音問題研究集会が終った頃から彼は時々頭痛を訴えるようになっていた。

正月には一緒にマージャンをやるうと言っていた彼が、卓を囲む直前の昭和四七年二月二九日、病に倒れた。すぐ京都の病院に駆けつけた私は、大きな体の彼が小さくなってベッドに横たわっている姿を見て胸が締めつけられた。「伊藤やで」と言った私の声に頭だけを動かしてわかったという合い図をしてくれた。

その後、一進一退を続けた彼だが、時には見違える程元気な時もあった。そんなある時、彼は私にこう言った。「なあ伊藤、この春大阪教育大学を卒業したら東京へ帰るやろ。オレも病気が治ったら家族みんなを連れて一緒に東京へ行くわ。二人で東京言友会の専従をしたら東京で大きな事ができるで。やはり東京は日本の中心や、東京で活動しなきゃなあ。早く治りたいわ……」

彼は病の中でも常に言友会のことを考えていた。その彼が、突然、余りにも急に昭和四八年三月二九日、帰らぬ人となった。病名は脳腫瘍であった。私の胸の中で、彼は今も生き続けている。「言友会を頼むよ」、彼はニッコリ笑ってそう言っているようだ。

## 第四章

全国の仲間たち、どもりだからと自分をさげすむことはやめよう。どもりが治ってからの人生を夢みるより、人としての責務を怠っている自分を恥じよう。そして、どもりだからと自分の可能性を閉ざしている硬い殻を打ち破ろう。

## 1 全国吃音相談会

辻中 忍

オンボロ車に、スピーカーと横まくをとりつけて「どもりで悩んでいるみなさん、私たちとともにどもりを克服しましょう」と呼びかけながら全国をまわりたい。よく私たちはそんなどもりの旅をしたいと語り合っていました。まだ言友会ができていない地方へ出かけてゆき、一人で悩んでいる吃音者に呼びかけて全国いたるところに言友会をつくっていききたいと思っていたのです。

そんな夢物語りが昭和五〇年一〇月から翌年二月にかけて、全国吃音相談会として実現しました。そのきっかけは、私たちが「治す努力の否定」の方向でどもりの問題を考えてゆくべきだと確信が持てるようになったことにあります。どもりは治らないかもしれないが、どもりを持ったままでもよりよく生きてゆくことを一人でも多くの吃音者に考えてほしい。そのためだけ多くの人に「治す努力の否定」の考え方を伝えようと考えたのです。また、「治す努力の否定」が言友会を知らず一人で悩んでいる人にどれだけ受け入れてもらえるか、問題があるとすればどこにあるのか、多くの人に指摘してもらいたいとも思ったので

す。実際、言友会の中でもある程度活動した人でなければ受け入れられない、どもりを治したいとやってくる人達にはとうてい話すことはできない、というような批判がありました。

私たちが、「治す努力の否定」に確信を持てば持つだけ、どうしても実行しなければならぬ課題になってきました。言友会という狭い枠の中だけで議論し合い、わかり合っているだけでは本当に吃音者の役に立たない。多くの吃音者にもことばの教室の先生にも、吃音児を持つ親にも考えてもらい批判してもらおうことによって、「治す努力の否定」は吃音の問題に役立つものになってゆくといえるからです。

そこで私たちは、全国の各都道府県で吃音者に呼びかけ相談会を開いていこう。そこで参加された人達の相談にのるとともに「治す努力の否定」を語っていこうと考えたのです。

いざ実行しようと考えてみたものの、本当に実現できるものかあやぶまれました。なにしろ困難な条件ばかりだったのです。費用にしても最低百万円はかかると思われ、そんな金はどこをついても集まりそうありません。会場はどうする。呼びかけはどうする。言友会のある地域ならともかく、まったく何のつてもない地域の場合何から手をつけてよいのやら見当もつかないのです。

困難な条件ばかりを考えていると、いつまでたってもできるだろうかできないだろうかと迷い決心が定まらないものです。とにかくやろうと決め、どうしたら実現できるのかと考え

ていけば案外方法はみつかるものです。道は開けてきました。まず、相談会を開く地域の「ことばの教室」に相談会の主旨を伝え会場の世話をお願いしました。また、地域の新聞社へも報道を依頼したのですが、出発二週間前になっても、返事は帰ってきません。あせりにあせりました。考えてみればいぶん乱暴な話です。これまでなんの連絡もなかった「ことばの教室」へ突然相談会を開くから会場をたのむとお願いするのですから、相談会は人びとの善意によって実現できたようなものです。どの地域でも特にことばの教室の先生方に大変お世話になりました。また、NHK厚生文化事業団が報道面で協力してくれました。

出発三日前、ようやく第一回目の北海道、東北地方の会場の八割がきまり、くりかえし「ことばの教室」と新聞社、当方でわかっている吃音者に案内とよびかけを送りました。自動車にスピーカー、横断幕というのは実現しなかったですが、一人三〇キロ近くのリュックを担いで大阪をたちました。

こうして、会国吃音相談会は、昭和五〇年一〇月三日の帯広会場をかきりに、翌年二月二九日の東京会場まで、三五都道府県三八会場で開くことができました。相談会の対象者には中学生以上の吃音者を予定していましたが「ことばの教室」の先生、吃音児を持つお母さん方が多数参加してくださいました。その内訳は吃音者二二二名、「ことばの教室」の先生八七名、吃音児の母親七二名でした。

参加してくださった方々にとって、この相談会がどれほどの価値を持ち得たかわかりません。しかし、何よりはっきりいえるのは、この相談会で一番得をしたのは私たちだったという事です。どもりの問題をかかえている多くの人達とじかに接してその実態にふれたことは、今後、私たちがどもりの問題を考えていくうえで大きな自信になると思います。

多くの人と出合い、いろいろな事がありました。そのエピソードは語りつくすことはできません。特に私の中で強く残っているのは、ことばの教室の先生の人間的な魅力でした。参加してくださった先生方はすべてどもりの問題に真剣にとりくんでいらっしやる人達ばかりでしたが、その中でも特に人間的な魅力に富んだ人達がおられました。吃音児にとってなにより必要なものは、魅力ある人達に接して何かを受けることなのではないかと思いました。

また、これまで言友会は、百数十万吃音者解放といってきましたが、その数字は人口一パーセントの出現率からとったものです。しかし、実際にどもりに悩んでいる人はもっと少ないようです。特に成人の場合ほどもりであれば悩んでいると独断的に考えていたようで、考えを改めなければならぬと思いました。相談会に参加した人でも、深刻な問題をかかえているという人はいましたが、どもりながらもそれなりにがんばっている人も多かったようです。そして、各地ではどもりながらも活躍している人の話をいろいろ聞きました。

「治す努力の否定」ということに関して、予想以上に多くの人にわかってもらえました。年

輩の人や何回も矯正所に通った人ほど強く反発し、理解しにくかったようでした。一方、若い人や矯正所に通った事のない人ほどよく理解してもらえたようです。その後、言友会の実践でも、新しく入会してきた人ほど「治す努力の否定」を早く理解し受け入れられるということがわかってきました。

「治す努力の否定」を理解してくれた人はすでにどもりに負けずになんばっている人や、どものために消極的になってはいけないと気づいている人です。また、多くの人かどもりのために消極的になってはいけないと気づきながらもきっかけをつかめず立ちどまっているようです。その人たちは「話はわかるが、しかし何をすれば」といいます。私たちの相談会がどれだけそのきっかけになり得たかわかりません。しかし、どもりを治すことがよりよく生きるきっかけにはなり得まいということはおわかってもらえたのではないかと思っています。

## 2 明るく生きる吃音者たち

——福岡での相談会のテープより——

伊藤伸二

なぜどもりを治さなくてはならないか

私たちは、どもりを治したいと常日頃考えてきました。吃音者へのアプローチの歴史も、どもりを治さなければ、吃音者の幸せはあり得ないとし、治す方向で出発しました。吃音児を対象にしたことばの教室は、吃音を治療するとして「言語治療教室」という名称で出発しました。

なぜ、どもりを治すということが考えられたのでしょうか。ここから話を始めなければなりません。

吃音者が苦しそうにどもっています。ついつい目をそらしたくなります。どもらずに話せば二分で話せることを五分もかかって話しています。不自由だろうな、とは誰もが感じることでしょう。どもらない人が空気を吸うように自然にことばを出すのに、私たちは大変な苦勞して言葉を出してきました。なめらかに話すという点から考えれば確かに劣っているのです。聞き手も、話している本人もどもっているのを異常であると感じ、どもりというレッテルをはり、なめらかに話せる人とは一線を画するのです。そしてどもるのを異常と自分も聞き手も思う。吃音者は人口のパーセントもいるかいないかの少数派なのです。少数派はなめらかに話す多数派に近づきたいと願います。まして、それが劣ったものであるという自覚が本人にあれば当然のことでもあります。

また社会の吃音者に対する評価も決して良いものではありません。どもっていると仕事に

さしつかえる、人間関係がうまくいかないと予想し、できればどもらない人を採用しようとする企業は現実にあります。結婚相手が吃音者であれば、その人がどもらというだけで反対されるといふ話も聞きます。

言友会では一般の人を対象に、どもりから何を連想するかという調査をしたことがあります。一般の人は、みつともないもの、かわいそうなもの、恥ずかしいもの、というイメージを強くもっていることがわかりました。

ふり返ってみれば、私たちは子どもの頃、あの子のまねをするとどもりになるよ、と遊んでもらえなかったことがあります。どもらと笑われ、からかわれもしました。先生からは「早く治しておけ」と言われたこともありました。

どもりに対するこのような暗いイメージが強化されるほど、吃音者は治りたいと願い、善意の周囲の人びとは治してあげたいと願うでしょう。これは無理からぬことと言えます。

### どもりは治る、治せるもの

明治三六年、日本で始めての吃音矯正機関が東京の小石川にできました。どもりに悩む人たちが全国からつめかけたといふことです。

どもりがこれほど人を苦しめるものなのかと当事者は改めて思い知ったと述べています。

「どもりは治さなければならぬし、また治るものだ」と一つの強力な方向が定まりました。以来、各地に吃音矯正所ができ、吃音者の切実な願いと結びついて「治る、治せるもの」という前提がゆき渡っていったのです。

では、その前提から、いろいろな治療方法が考え出され、いろいろな取り組みがなされ、そこで本当に吃音者の悩みが解決されたかという点、どうもそうではないらしいのです。

たとえ一時的に治ったとしてもすぐに元に戻ってしまうことが明らかにされてきたからです。「治せる」はずのものが、いくら努力しても治らないとき、そして「治さなければならぬもの」であるとき、吃音者も治療者もジレンマに陥ってしまいます。

治らなかった吃音者は、「努力が足りないんだ、精神力が弱いからだ」と自分を責めます。また「お母さんの態度が改まると子どものどもりは治りますよ」と言われたお母さんは、治らない場合、責任は自分にあると自身を責めるのです。

同様に、ことばの先生の場合は、「私の勉強不足、技術不足が悪いのだ、他の人が担当すれば治ったかもしれない」と自分を責めます。

「どもりは治る、治せるもの」という前提が親も子も先生も救いのないジレンマに陥し入れられていることに、私たちは気づかなくなりました。

「少なくとも、どもりで困っている人が、治ると信じて、治すための努力をすることは、悪

いはずはない」という、一見もつともな考えを、一度考えなおす必要があります。

### どもりは治るか

私は一〇年間、成人吃音者の団体である言友会で活動してまいりました。かれこれ一、〇〇名以上の成人のどもりの方々と接してきましたが、私自身のどもりを含めてどもりが治ったという人を私は知りません。民間の吃音矯正所へ行き、確かにその場ではどもらなくなった人が、一カ月、二カ月で元の状態に戻ってしまう例が残念ながらほとんどのようです。

事実、ある民間の吃音矯正所の先生が成人の吃音者で自分の指導を受け治った人は一割にも満たないと発言しているのです。日本だけかという、日本よりある意味で研究が進み、治療システムも機関も整っている、といわれるアメリカにおいても実情は変らないようです。昭和四九年の言友会の全国大会にアメリカ吃音者会議から派遣されて参加した会長のマイケル・ハートフォードさんが「アメリカで、私の知っている限り、成人のどもりで治った人はいません。どもりは治らないと思います」と発言しました。

吃音児を対象にした「ことばの教室」でも同じようなことが言えそうです。子どもものどもりは治しやすいから今のうちに治そうと「言語治療教室」として出発したはずですが、だんだんと「ことばの教室」と名称をかえてきています。治るはずの吃音児がなかなか治らず、

治療ということばが使えなくなってきたからなのでしようか。

いろんな地方で、この吃音相談会を続けながら、多くの「ことばの教室」の先生方と話し合いを続けてまいりました。

その中で、教室開設以来七年間、どもりを治そうと努力してきたが、どもりが治ったという点で自分が納得ができて終了させた子どもは二人しかいなかった、と話してくださる先生がいきました。またある教室では、三年後に追跡調査をしたら、教室にいた時よりどもりそのものはひどくなり、悩みも深まっていたという例があったといえます。またある教室では小学校の時、もう大丈夫と終了させた子が高校生になって悩みが深まって訪れてきたとの話もありました。

これらの事実は、事実として私たちは認めざるを得ないのです。

### どもりが軽くなれば悩みが軽くなるか

それでは、努力してそれがうまくいって多少なりともどもりが軽くなったらどうなるのかということも考えておく必要があります。たとえばどもりが完全に治らないとしても、できるだけ、どもりを軽くすることができ、軽くなれば吃音の悩みも少なくなりその人の幸せにつながるかと一般的には考えられがちです。

ところが現実はどうも全てがそううまくいくとは限らないようです。ある程度軽くなった人は、それでよしとするより、あと一歩良くなりたいたと、その要求は際限なく上がっていきます。ある程度で要求をおさえることは非常に難しいのです。

またどもりが周期的に軽くなったり重くなったりする人が、その度に一喜一憂することは想像以上に苦しいものです。ひどくどもっている自分が本当の自分なのか、あまりどもらないのが自分なのか、とてもつかみにくくなるからです。

私たちが昭和四九年、吃音者の悩みを調査した時も、どもりがいわゆる軽い人は、どもりの悩みは重い人より少ないだろうと簡単に決めつけられない結果が出ました。他の人から、どもりとは思われない程の人が一層悩みが深いという事実がでてきたのです。

私たちが接している吃音者の中にも、ひどくどもりながら、信じられないほど明るい人もいれば、とてもどもっているとは思えない程軽いのに非常に深刻に悩んでいるという例によくぶつかります。

どもりをできるだけ治そう、軽くしようという努力も人によってはその悩みの解決には至っていないということですが、

治す努力のもたらすもの

どもりの問題解決は、どもりが治るとか軽くなるとかでとらえては正しく導き出すことはできません。

むしろ私たちは「治すもの」「治せるもの」と考え努力してきたことが、どもりの問題をこじらせてきたのではないかと思っっているのです。努力してどもりが治った場合はそれではないのですが、治らなかつた場合、その人に与える影響はかなり大きいものがあります。さきほどのべたジレンマに陥ることもその一つです。

なめらかに話すことを目指しているのですから、例えわずかにどもつただけでも自分を許すことができません。どもらずに話そうとすればするほど、どもるのではないかという不安が高まり、どもることに対して敏感になってしまいます。

民間のどもり矯正所へ行った人は、一時的にせよどもらなくなったという経験を少なからず持っています。努力してどもらなくなることは非常に嬉しいことです。しかし、再びどもりだすと喜びが大きかつただけに、絶望もまた大きいのです。あれだけ努力してもだめなのだと自分に対してさえ自信を失なってしまう。

そして、今はどもっているがまた努力すれば治るのではないかとどうしても考えてしまいます。あのと時のようにどもらなくなれば自分はなんでもできるんだと、どもりが治ることへの憧れはどんどん大きくなってゆきます。そして、どもっている現実の自分を受け入れる

ことができなくなり、自分が何かしたくとも「どもりだから——できない」と「どもりが治ったら——しよう」と現実の生活で消極的になっていくのです。

### 私の逃げの人生

私の子どもの頃をふり返ってみますと、どもることのいやさに逃げてばかりいたような気がします。

小学校の高学年の時、クラブ役員に推されながら引き受ける勇気が持てませんでした。小学校の五年頃から、中学校へ入った時の自己紹介が気になり、不安にいつも脅えていました。中学生の時は、英語や国語の時間に指名されるのが恐ろしくて、先生の話がろくに聞けませんでした。当てられるのがいやで無理に予習をしていかなかったこともありました。

今から考えれば笑い話になりそうですが、こんなことも経験しています。

小学校から続けてきた卓球を高校でも続けたくて卓球部へ入部しました。嬉しいことに私の好きなタイプの女性も卓球部に入っていました。彼女の姿を見ながら練習に励むのが私の生きがいになっていきました。ところがしばらくして、新入生歓迎の男女合同合宿が持たれることになりました。「合宿となると多分みんなの前で話さなくてはならないだろう。彼女とも話すことになるだろう。それでは僕のどもりがバレてしまう」私は深刻に悩みました。

結局私は、好きな人にどもりがばれることがいやさにあれ程好きだった卓球を諦め、合宿の直前に退部したのです。

それからの私は一段とどもりのために閉じ込められるようになりました。今日、国語の時間にあたるとわかっている時は、カバンを持って家を出ても学校の近くへ行くと足が止ってしまい、カバンをどこかに隠すと、映画を覗に行ったり、電車に乗って遠出をしたりしました。警察のお世話になることもありました。それでも私はどもりから逃げ続けていたのです。

### 吃音者の甘え

私の体験からも考え、多くの吃音者の悩みをお聞きしていると、どもりの問題は、どもるどもらないが問題でなく、どもるために自分のしたいことも簡単にあきらめ、また当然しなければならぬことでもしないで、どもるからと自分を甘えさせる、逃げの人生が身につけてしまうというこのようです。

ある吃音者は自分の人生を次のように言っています。

「何かしなければならぬことでも、困難を感じると、何かと自分に言い逃れをして逃げ、それでも自分はどもりだから仕方がない、と思いつつも逃げてきた自分が恥ずかしい。責任逃れをしていながら、ついついそのようにして自分に甘えてきました。ひよっとすると今ま

で私は、どもりそのもので苦しみ悩むより、どもりを理由に、意に反して、してきた行為に對して思い悩んできたことの方がはるかに多かったかも知れない。でもそこから一步も踏み出せないまま、その悪循環のなかにどっぷりと浸っていた。どもりについて本当に真剣に考えてこなかったような気がする」

社会人になってからも逃げの人生が続きますと、人生を真剣に生きることとはできません。

### 三つの生き方

逃げの人生からの脱皮は、これまでいやだと思っていたどもりと仲良くすることから始まります。それにはどもりを「治る、治せる」と思うのではなく、治らないかも知れない、さらには治らぬものとしての生き方を考えることです。

どもりは治らないかも知れないと知らされたその後、吃音者の生き方と対処の仕方を、これまで接してきた多くの吃音者の生き方を通して整理すると、次の三つに大別できました。

①どもりに負けて、どもりであることを嘆き人生を無為に過ごしてしまう人

②治らないかも知れないが、たとえパーセントの確率でも治る可能性があるのなら自分

はその治る一パーセントにかけようとして、治す努力に歳月を費し、空しい人生を過ごしてしまう人

③どもりを治すために使ってきたエネルギーを、かけがえのない自分の人生をより豊かにするために集中しようとする人

### ①の場合

どもりであることを恨み嘆き、できるだけ話さなくてもよい仕事につき、ひっそりと生きようとした人はたくさんいます。しかし、その人として積極的に治す努力はしなくともなんとか治りたいという望みはいつまでも持ち続けています。ある相談会で五〇歳に近い人が来られました。

「私は今、役所のビルの掃除係をしているが、私がどもりでなかったら今の仕事はしていない。もっと違った仕事をしているはずだ、今の仕事がいやでいやでならない。今となっては仕方がないが、早くどもりを治して別の仕事につきたい」

と語っていました。またある相談会ではオルガンのセールスマンをしている人が来られました。職場での人間関係が煩わしく、一人だけで仕事ができるセールスの仕事を続けているのです。しかし三年セールスをしていても一台も売れず、社長からもやめてほしいとたびたび言われてもやめられないのです。人と一緒に仕事をすることに非常に大きな不安を抱き、たとえ売れなくても一人でできるセールスという仕事に安住し、別の仕事が思い浮かばない

のです。会社からもらう給料はごくわずかです。それでも生活ぎりぎりのところですがまんし、自分はどもりだから仕方がないのだとあきらめているという話でした。

## ②の場合

たとえばパーセントでも治る可能性があるなら、その一パーセントにかけたい。自分は一パーセントに入るため努力をするのだと、常に頭にどもりが治った時のことを思い浮かべ努力をしている人がいます。私達のまわりにはこのような人がたくさんいました。ある病院でどもりの研究が進んでいるという話を聞けば病院へ、断食が良いと聞けば断食会道場へ、薬がいいと聞けばそれを求めに行きます。自分で努力をするというよりはむしろ、治してくれるところを捜し求めていると言った方があたっていている人がいます。

私は一度矯正所へ行っただけですんだのは幸運だったと思います。四カ月通ったその間でも、いったん終了し二カ月たってまた入所した人に会いました。五回、六回と矯正所通いを繰り返す人も少なくありません。一回につき三〜四週間入所するとしましょう。学生でもない限り、それは職を捨てることに等しいのです。職をやめて入所し、どもりが治って新しい職を求めても、またどもりがぶり返します。またお金を貯えるまでそこで働き、貯ったお金でもう一度矯正所へ行く。この繰り返しをしていると、泥沼に入ったのも同じで人生にとっ

て非常に大切な青春の一時期をどもりを治すためにのみ浪費してしまふことになります。治すために費す精神的、時間的、金銭的なエネルギーの損失ははかりしれないものがあるのです。

### ③の場合

もう一つの型は、「どもりが治らなくても、どもりを持ったまま、自分は何ができるか」を考え、よりよい人生に向かって、これまで治す努力のために使ってきた努力を集中する人です。どもりを持ったままの生き方を考え始めると、これまでどもりだからできないと思つて自分自身でその可能性をつぶしてきたことがわかり、どもり以外の自分の問題に目がむき、どもり以外のことで自分が本当に努力しなければならぬこともわかつてくるのです。

以上三つの生き方をご紹介します。どの生き方を選ぶかは、その人自身の判断です。どの道を選ぶと、その人が納得して選んだ道であるなら、他人がとやかく言うことはできません。「私はこうでしか生きられないんだ」ということがあると思うからです。三つのどの道を選ぶのかはみなさまの自由ですが、多くの吃音者の体験を見聞きしてきた私たちは三つ目の生き方をお勧めしたいと思うのです。私たちはどもりを持ったまま、いかに生きるかを考えたいと思っています。どもりながらも自分の可能性を追求していく、それは楽しく

ゆかいなことだからです。

### どもりを持ったまま素直に生きる人たち

北海道、東北、北陸、四国、九州と吃音相談会で、いろいろな方と出会ってきました。どもりで悩み、なんとか治したいと思っっている多くの方々に、「どもりはどう治すべきか、ではなく、どう生きるかを考えることだ」とどもりを持った生き方を確立することをおすすめしてきました。

反対に、どもりに負けないで明るく生きている方々から私たちが励まされてきました。

どもる程度に差はあっても、どもるといふ事実は同じであるのに、なんと吃音者の生き方が様々なのかと多くの方々とは接し改めて考えさせられました。

三番目の生き方を選んだ人たち、つまりどもりを持ったままいかに生きるかを真剣に考えている人たちの印象は鮮やかに、浮かんでまいります。ある人は弁護士として、ある人は教師として、ある人はセールスマンとして、理容師として、どもりながらも明るく、自分の仕事に忠実に生きておられたのです。時には、「私がこの相談会に参加したのは、相談を受けに来たのではなくて、皆さんを励ましたくて来たんです」とご自分の体験を話してください方もありました。四〇〇〇名の組合員を組織する鉄工関係労働組合の執行委員長が、「労働

者の生活と権利を守るためには、どもるとかどもらないとかで立ち止ってられないのです。どもりながらも言わなくてはならないのです」とさわやかに話してくださいました。明るく生きる吃音者は、私たちが思っている以上に多いと感じました。

### 早期教育の大切さ

どもりは治らないかもしれないとして、どもりを持ったままの生き方を確立するには、早期の教育が必要だということをお話しましょう。

釜石市の相談会に、ことばの教室の先生に連れられて中学三年生の男の子が参加しました。中学三年生と言え、一番悩みの深まる時期です。その彼が、今どもりに対してどのような考えているかは、とても興味あることでした。「どもりは治らないかもしれないことは知っています」と事もなげに言った彼は、次のような話をしてくれました。

「中学二年生の時に、『ことばのりずむ』という雑誌を、ことばの教室の先生から読めと言われた。そこには、どもりは治らないかもしれないと書いてあり、非常にショックを受けた。確実に治るものと思ってことばの教室に通っていただけに、しばらくは本当に悲しかった。しかし、それが事実であるなら、これまでどもるといふことで、生徒会やクラブの役員になることから逃げていたけれど、これからは逃げないでがんばろうと思うようになってきた」

最後に彼は、

「中学二年生の時、どもりは治らないかもしれないこと、またどもりながらも明るく生きていく生き方を知った。今から思えば非常に残念だ。もっと早く知っていればよかった。そうしたらもっと楽しく小学校時代、中学校時代を送れたのじゃないか」

と多くのお母さんの前で話してくれました。

この話を聞いて私は驚きました。なぜなら言友会の内外で「成人のどもりの人に治らないかもしれないことは話してよいが、中学生、高校生に言うのは残酷であり、ショックを与えただけで、よいことは何もない」と指摘されてきたからです。しかし、私たちは、彼の話を聞いて、どもりは治るかもしれないから治そうと、その人をひきずるより、どもりをひきうけて生きることを早期に教えることの必要性を痛感しました。

広島では、こんな高校生に会いました。

相談会が終り、参加者の一部と広島駅ビルの中華料理店で食事をとるようになりました。私のテーブルに彼がすわっていたのです。

「どうして、みんなあんなにどもりに悩むのかなあ。どもっていてもちっとも構わないのに」

ふと彼はもらしました。

子どもの頃からよくどもっていた彼は、中学生の頃など「どもり」「お前アホか」「ども安」と同級生からからかわれたそうです。確かにからかわれることはいやで、どもっているとめんどろくさくなるけれど、悩む対象にはならなかったというのです。私は驚きました。なぜ彼がそうなのか非常に興味をもちました。

「自分でもなぜ、みんながこれほど悩んでいるどもりに、悩まずにすんだのかわからなかった。しかし、今日の相談会に参加し、先生の話やみんなの話を聞くうちに、ひよっとして、『あの人の姿』を見ていたからではないかと思いついた」

と仰うのです。彼の言う「あの人」とは、小さい頃からの友達のお兄さんで、いつも明るく、彼に話しかけてくれたそうです。その人はひどくどもっていたものの、よく勉強もでき、みんなから好かれていた人でした。彼がどもりになったのは「あの人」と仲が良かったからだとよくからかわれたが、どもりがうつっても大好きな「あの人」のようなすばらしい人になれるのなと思っていたというのです。どもりが恥ずかしいものとか悪いものとかいう気持はもたなかった。それが悩まずにいた原因ではないかと思えるというのです。

釜石の中学生、そして広島の高校生、どもりに悩んだ中学校、高校時代をもつ私には、彼らがとてもまぶしく感じられました。

と同時に家庭、学校、近所などの周囲がどもりに対するマイナスのイメージを持たず、ど

もっているそのままをうけ入れていけば、そして彼らが悩んだ時、どもりを持ったまま明るく生きる人たちの姿に接することができれば、このような中学校、高校生に育つことは十分に可能であると確信しました。

### 子どものどもり

吃音相談会でいろいろな人と会ってきた私は、成人のどもりも、学童・幼児のどもりも、その取り扱いの根本においては全く同じであると確信するようになりました。成人のどもりは、自分自身で今後の人生を考え、選んでいけます。それに対して、子どもの場合は、周囲の人たちが「どもりを持ったままいかに生きるか」ということを考えていってやればよいと思うのです。

私は、どもりの子を持つお母さんにいつも次のようにお話をします。

「お子さんのどもりが治るのか治らないのかは残念ながらわかりません。こうしたら確実に治るといふ治療法が確立されていない現在、あなたのお子さんは治らない可能性もあるので。しかし、治らないかも知れないといふって嘆くことはありません。なぜなら、どもりに負けない、明るい子に育てることは可能だからです。そのような子に育てるために母親として何ができるかを考えてください」と。

それでは、どもりに負けない明るい子どもに育てるにはどのようなようにすればよいのか考えましょう。その前にお母さんに日常の子どもへの接し方をふり返っていただくために、暗い消極的な吃音者を育てる方法をまず話してみましょう。「明るい子どもを育てるためにこのようにしましょう」と話をするより、「このような接し方をすれば、暗い消極的な子どもに育ってしまいますよ」と話した方がよくおわかりいただけると思います。

(1) 子どもがどもるたびに、悲しい顔やいやな顔をし、「もつとゆっくり言いなさい、もう一度言い直しなさい」と注意してあげましょう。また、時にはどもつたらヒステリックにしゃべりましょう。

そうすると、お子さんがどもることに對して、とても暗いイメージを持つのに役立ちます。また話すことがだんだんいやになる子に育てることもできます。

(2) どもりは悪いもの、劣ったもの、不便なものという考え方をしっかり持ってください。

大切なこの子が、今のうちに治しておかないと将来たいへん損をすると考え、どもりは

必ず治せる。と宣伝している所へ出かけてください。そこへ行くたびに、親子ともども、  
「どもりは悪いもの。」という気持を高めることができます。

(3) 子どもの将来を案じ、大きな不安を持ち続けてください。

どもりのために将来、学校嫌いになるのではないか？ 友だちができないのじゃないか？  
就職できないのじゃないか？ 結婚は？ 次から次へと不安の輪を広げていってください。

お母さんがそのような不安を持ち、それを信じて子どもに接すれば、お母さんのその気持  
は通じ、だいたいお母さんが予想したことは実現することになります。

(4) ご両親自身が消極的な生活を続けてください。

引っ込み思案で、何事にも消極的な生活をご両親とも続けてください。PTAや町内会で  
何か役を引き受けざるを得なくなっても、何かと口実を作って逃げてください。そのような生  
活を続けてくださると、逃げの人生の見本を真近にみる子どもは、将来、消極的な人になっ  
てくれるでしょう。

(5)「どもりは治る、治せる」と信じてください。

決して、子どもさんのどもっている状態を受け入れてはいけません。治ることを考え続けるのです。どもりさえ治れば勉強もできるようになり、友だちとも仲良くでき、いいつけもよく聞くよい子になるのです。お母さん自身が子どものももりを受け入れなければ、子ども自身がどもりを受け入れることはないでしょう。

将来、どもりが治るのを夢見、消極的な吃音者に育てることは、これでほぼ完成です。

お母さんは、すでにお気づきでしょうが、暗い消極的な吃音者に育てる法は、全く逆をすれば、明るい前向きな吃音者に育てる方法となります。お心あたりがあれば是非もう一度考えなおしてください。

ここで参考までに富山の相談会でのお話をしましょう。

どもりの子をもつPTAの役員さんがいました。その人自身もどものですが、会議のときなど積極的に発言していました。たまたまその学校には「ことばの教室」があったため、クラス担任は、今のうちに治しては、と「ことばの教室」への入級をすすめました。ところ

がお父さんは、

「私はどもりだけけれど、今までそのために損をしたことはない。うちの子も幸いどもりながらも活発に授業に参加し、明るく生活している。この子がどもりで本格的に悩んだ時は相談にのる自信がある。その子と共に明るく生きることを考えたい。だからことばの教室へやる気はないし、本人も行くとうはしない」と断ったそうです。

私はその話を聞いて驚きました。未だかつてそのようなお父さんには会えなかったからです。どもりながら立派に生活しているお父さんでも、自分の子どものもどもりとなると別問題だと思っていました。自分の経験した辛い思いを息子にはさせたくないと思うのが人情でしょう。きっとその子は、お父さんの生き方を見て、どもりに負けない元気な子に育ってくれと思います。

これまでの話でおわかりいただけだと思います。お母さん方は、どもりを悪いもの、劣ったものと考えるのではなく、どもりその子の持っている一つの個性として、どもっているそのままを受け入れてください。その子のどもりを治そうとするのではなく、その子の持っているよい面をいかに伸ばすか考えてください。どもりを治そうとして、その子を私たちが経験してきたような悪い方向に追い込むことのないよう気をつけてください。そして、大きくなくて、もしどもりに悩むようなことがれば、その時は相談相手になってあげてください。

他の事なら話せても、私たちはどもりの悩みは母親にすら話せず、一人で悩んでいました。悩みごとを話し合える親子のパイプだけは今のうちからつないでおいってください。このことがどもりの子を持つお母さんにとって一番大切なことです。相談を受けた時に、「どもりは治らないかも知れないこと、それでも明るく生きられること」をその子どもに具体例をあげて説明してあげてください。どもりながらも明るく生きる吃音者に手伝ってもらえば効果はさらにあがるでしょう。

### おわりに

私たちは、前に述べましたような、①の生き方になったり、②の生き方をしたりしながら、誰にも悩みを打ち明けられないで一人で悩んできました。しかし私たちは言友会の活動の中で、多くの吃音者やいろいろな立場の人と接し、共に人生を考えるなかで、たとえどもっても言わなければならぬことは言い、為すべきことはやるといふ姿勢を身につけることができました。自分のこれまでの逃げた、甘えた生活を反省し、どもりを治すことに執着した生き方から、どもりを持ったままでよりよく生きる方向への転換を図ることができました。

しかし、全国各地では、まだ一人で悩んでいる人たちがたくさんいるに違いないだろうから、それらの人びとと話し合い、仲間作りを通してどもりの問題の解決を図りたいと、このよう

な相談会を全国各地で開いてまいりました。

この相談会ではどもりで悩んでいる方々にお会いした一方、どもりながら明るく健康に生きていく吃音者とも知り合うことができました。専門家<sup>の</sup>助けも借りず、吃音者の仲間も知らず、自分の体験を通して、逃げの人生、甘えの人生を克服している人たちと触れ合うことができたことは、私たちが全国をまわって得た最大の収穫でした。

吃音者であれば誰しもが悩み、消極的にならざるを得ないと考えていたことが誤りであることにも気づかされました。どもりだからとあきらめたり、逃げたりせず、自分の力を貯わえていけば、職業の選択や結婚にハンディを感じることはないのではないか、ということはいろいろな人が示してくれました。あの人たちを見ると、「何故、どもりを治さなければならぬのか」と疑問すら感じるので、日本中に明るく生きる吃音者が育てば、お母さんもおとぼの教室の先生も、どもってもあのような生活ができると思えば、どもりを治すことにとらわれなくなるでしょう。どもることがハンディにならない見本が周囲にたくさんあるからです。

どもっているために損をしないような社会、どもっているそのままの姿が受け入れられる社会、その社会の実現こそ私たちの願いです。そのような社会を実現するために、私たちは明るいどもりのイメージを日本に育てなくてはなりません。

## 第五章

その第一歩として、私たちはまず自らが吃音者であること、また、どもりを持ったままの生き方を確立することを、社会にも自らにも宣言することを決意した。

## 1 たとえどもりでも

—— K君の吃音克服指導記録 ——

綾部小学校きこえ・ことばの教室担当者

## K君との出会い

K・T、彼は今、中学二年生の吃音児である。彼との出会いはかなり古く、もう六年も前にさかのぼる。

一メートル程へだてた机の向こうに、丸顔のかわいい彼がちよこんと坐っていた。こちらの問いかけにゆっくりした口調でポツリポツリと答えた。随所に難発と連発を交えながら、それでも出にくいときは右手を前後に激しく振り、体を動かしながら何とか一音を出そうと必死にもがく姿があった。かなり重症のどもりのように感じられた。

同伴した母親の話によれば、発吃は二〜三歳頃。ことばの非流暢さに気づいた両親はそのたびに「おちついて……」「ゆっくり……」など、わが子のどもりに気づいた母親の誰もがする注意を頻繁にしたという。

当時の教育相談記録をみると次のように記してある。

へ母親が病気がちで十分に子どもの面倒がみられず、楽しく接してやれなかった。本児は母に甘えることもできず、小さいなりに寂しい思いをしていたもよう。両親には待望の男児ということで期待も大きく過保護にしながらもあれこれと本児に対する干渉が多かった……などから非流暢なことばが出やすい状態であったと考えられる。本児のどもり方はかなり重い  
が、授業中積極的に発言するなど、ことばの問題はまだ大きくないと考えていいのではない  
か

### 指導の経過

K君の指導はさつそく始められた。両親、学級担任への働きかけを強化すると共に、彼に  
対しては、まず遊びのなかで気楽に話せる場の保障に努めた。一方、話し方を改善するため  
に、難発を故意の連発に移行する指導からはじめられた。

その後、同時音読、マスキング、リズム読み、引き伸ばしなど、吃音指導に使うあらゆる  
手を使って指導を試みた。しかし、彼の強固などもり方は、時には調子良くなったこともあ  
ったが、それも長続きはしなかった。

自我意識のめざめが始まる頃から、どもりを回避しようという反応がぼつぼつみられるよ  
うになった。どもりの内面化が進み出したようである。中学生になるとそれはますますひど

くなり、会話の途中でつまりかけると、「あれ？」とか「どうやったかいなあ」などの語を挿入するようになってきた。へ話す——どもるの繰り返りから、本児自身フラストレーションを感じているようである。それは語に対するものだけでなく、コミュニケーションの場においても言えることだ。

K君は次のように訴えている。

「駅で切符を買うとき顔が赤くなり、恥ずかしかったです。その時は何も言えずにただ黙っていました。それでなんとか治そうと思いい足を動かしながら言ったり、走って駅名を言ったこともありす……。もうことばの教室を終了できるかなと思っているうちにだんだんひどくなり、将来のことが気になります。」

つまり、成人吃音者の大半がそうであるように、自分の非流暢な話し方を何とか避けようとする予期反応（恐れ、あがきといった心理反応）が、非流暢な話しことばに加えられているわけである。

K君の指導は、どもりパターンの改善、即ちどもらない練習だけではどうにもならなくなってきた。もしこのままいけば、たとえばどもらなくなったとしても、いつ逆戻りするかわからないからである。今後に必要なのは、まず話すことに対する不安、話さねばならぬ場に対する不安を取り除くことであつた。

## 吃音克服指導

### ① 克服指導の意義

本校ことばの教室は開設以来七年が過ぎた。この間、私達は多くの吃音児と出会い、その指導にあたってきた。多くの子ども達はどもりが改善されて、目下話すことにためらいのない日常生活を送っている。しかしK児は六年間通級したが、現に治らずに現在もどもっている。K君のどもりは将来治るかも知れない。しかし今、少なくともどもりを持って生活して、そのどもりに大きな不安を抱いている。どもる、という外面の症状ばかりに目を向けて、例えそれが流暢な話し方になつたとしても、それで彼の吃音問題が消失したといえるだろうか。それよりもへどもりVという欠陥を持ったままで、それが彼の社会生活に障害とならないような指導を行なうことがことばの教室に課せられた任務であり、今彼にしてやれる最大の援助に違いない。

そのためには、「僕はどもりです。例えどもりであっても、このどもりによって僕は人間になりました」と価値の転換をはかり、たくましい人間として育ていく方向を見つけ出さねばと考えた。

## ② 系統的脱感作

克服に向けての指導として、まずはじめにどもりに対する恐れや不安を取り除く、いわゆる系統的脱感作の指導を試みた。彼との話し合いで作成した不安階層表（ヒエラルキー）は別表の通りである。六月から不安階層表に従い、一から順にその不安消去にかかった。これは私達も初めての試みで、その技法にとまどいながらも数少ない文献や自律訓練研究会参加などにより研究しあつた。彼もまた自律訓練法をよく習得し、短時間で十分な弛緩状態に容易に入れるようになり、不安消去は順調にはかどつた。特に後半になって不安度（SUD）の高い項目が意外と早く消去できたことは、前半の熱心な学習によって語や場に対する不安が制止された結果によるものと思う。十一月中旬、すべての項目にわたって不安の制止がはかれた。

## ③ どもりに打ちかつために

彼は日常の不安を及ぼすような場面で、A・T・を駆使し情緒の安定がはかれるようになってきた。また、脱感作によって一つ一つその不安場面に対する恐れや不安が消去、軽減される体験を得るなかで、吃音に対する考え方も少しずつながら変化しつつあつた。それは、「どもることを別になんとも思えへん」という彼のことがばでも証明された。しかし、彼の本心は決してこんなものではない。「そら、すらすら話せたらよいけど……ときには話すのを

五君の不安階層表

- |     |                               |       |   |
|-----|-------------------------------|-------|---|
| 一、  | 学校からの帰り道友だちと話をする。             | S U D | 三 |
| 二、  | 家の人と話をする。                     | 一     | 〇 |
| 三、  | 綾部駅で梅迫までくださいといって切符を買う。        | 一三    | 〇 |
| 四、  | 学校でA先生にはようございませとあいさつする。       | 二〇    | 〇 |
| 五、  | 職員室へ入って先生に用事を伝える。             | 三〇    | 〇 |
| 六、  | 誰もいないとき電話がなり自分が電話に出る。         | 三八    | 〇 |
| 七、  | 自分から人に電話をかける。                 | 四八    | 〇 |
| 八、  | 学級みんなの前で発表する。                 | 六〇    | 〇 |
| 九、  | 人と話しているとき急に次の語が出にくいと思う。       | 六五    | 〇 |
| 一〇、 | 国語の時間、自分の前の人を読んでる。次は自分だ。      | 七三    | 〇 |
| 一一、 | みんなの前で本を読んでるときに急に次の語が出にくいと思う。 | 八〇    | 〇 |

S U D は不安の度合を表わす

やめようとするかも知れない」と、ことばをひるがえす。

彼の心中には、へ自分のどもりを治したい。そしてすらすら言えるようになりたい、とへ治らないのではないか。どもりを持ったままでもどうにかなるさゝの二つの思いが葛藤していたのかも知れない。

私たちはこの機会をとらえて、夏休み頃からどもりに立ち向かいたくましく生きる人間に育てあげるための克服指導に入っていた。

**a** 成人吃音者の生き方を学ぶ（昭和五〇年八月～九月）

まず、京都市友会の故吉田昌平氏の講演テープを聞かせ、氏がへ吃音をもったままでくタクシーの運転手をしながら大勢の得意客を作っていた話を聞かせた。テープでは、昌平氏がどもりながらもそれを恥じらうことなく、堂々と聴衆に聞かせる話をしている。じっと聞きいつているK君の顔は真剣そのものだった。目と耳が回転するテープに引きつけられているような感じさえ受けた。

「ぼく、どもりを治そうとばかり思っていたが、こんな生き方もあるんやなあ！」——帰りがわに彼はこうつぶやいた。

二学期になってから書いた感想文のなかで彼は次のように述べている。

へ吃音をもったまま生きる——こんなことができればすばらしいだろうな。本を読んだらや

っぱりでもあります。でもすらすら読めたら体の調子がおかしいのだと思うようになりました。――中略――気楽に考えると不安はなく読んだあとも笑顔がでます。……まだまだ生活面に満たされないところがありますが、満たされなければそれでよいと思います」と。

### b 「ある成人吃音者の半生」の学習（昭和五〇年九月～昭和五一年一月）

故吉田昌平氏の生きざまを知ったことは、確かに彼に大きな転換をもたらした。へどもりをもったままの人生、これは彼にとつてかつて想像すらしなかつた世界であろう。しかし、こんな大きな価値の転換が一朝一夕でできるわけではない。彼の心にはとまどいがありありとうかがえた。へ満たされなくてもよい、この裏には「どもつてもいやあない、何とかなるさ」のあきらめに似た境地があつたのかも知れない。とにかく私達は彼がどもりをもつたままでも満たされた生活のできる、そんなすばらしい生き方を共に考えあう必要があると考えた。

学習資料として、へある成人吃音者の半生（『ことばのりずむ』六号）を使い、吃音にとらわれず行動できる人間になるための生き方を学ばせることをこの学習のねらいに据えた。この頃はバレエ練習（K君はバレエボールクラブに属している）とか試合が盛んな頃で、指導日に欠席することも多く、その上一回の指導に三〇分足らずしかとれないので、この資料学習は予想外に手間どつた。

彼は一時間の学習に意欲的にとりくんだ。マンツーマンの指導ではおのずと教師側のペー

スで進められることが多いが、彼はこの資料を何回も何回も読み返し疑問点は積極的に聞き返した。

この文中にあることば『表面的にどもり症状が出ていても心がどもっていないければいい』は、彼が自分のどもりを見なおし、人間変革への出発点になる教訓である。

多くの吃音者が苦しい体験の中からやっと思ひだしたものは、自分のどもりに目覚め、どもりをもったままたくましく生きることである。そして、どもりという長いトンネルからぬけ出たとき、そこに見た世界は今までにない明るいものであり、希望のある社会であったという。K児の満たされない今の生活を打ち破り、彼の心の奥底にこんな世界を入りこませることができたら、その将来に明るい展望がもてるだろう。私達はこんな生き方をなんとか実感としてわからせたいと願った。

作者の考えのどれを取り上げてみてもK児には否定できるものはない。その一つ一つが格言のように彼の心に食い入ったに違いない。

彼は忠実に理解していった。そして余すところは「もうひとつ勇氣が……」の不安だけであつた。

堂々とどもるために、まず生活面の中から具体的に実行できるものを話し合いによってあげていった。それは、

- ・授業中どもつてもいいから一回は発言する。
  - ・わかっていることは積極的に発言する。
  - ・バレーの練習に励みレギュラーになる。
- などであった。

学習が終りに近づいたとき彼は、「本を上手に読んだらどもりが治るのではない。どもることに對しての恐れ、不安をもたなくなつたと自分自身氣がついたら本当に治つたのだ」といった。半年前に「そら、すらすら話せたらよいけど……」といったことばと余りにも對照的であり、積極的にどもり克服の途に向かう象徴的なことばであった。

この頃、担任の先生との情報交換のたびに「K君すごくどもるんですよ」とか「前よりかなりひどくなつたという先生もありますよ」とたびたび聞かされた。私達は、このことは、彼がどもりを前面に出しかけた証拠だととらえた。ことばの教室でもよくしゃべつた。そしてよくどもつた。しかし、息使いやあえぎ、回避の反応は皆無といつていいほどであった。〈授業中も積極的に発表する回数が多くなつた〉〈文化部員として委員会の報告を自らかつて、どもりながらも最後まできちんと報告しおえた〉等々、彼が約束した行動の一つ一つを實踐に移している明るいニュースを聞くことができた。

いま、彼は吃音克服に向けての第一のステップをやつと登りきつたようである。

### c どもり宣言 (昭和五年二月～昭和五年三月)

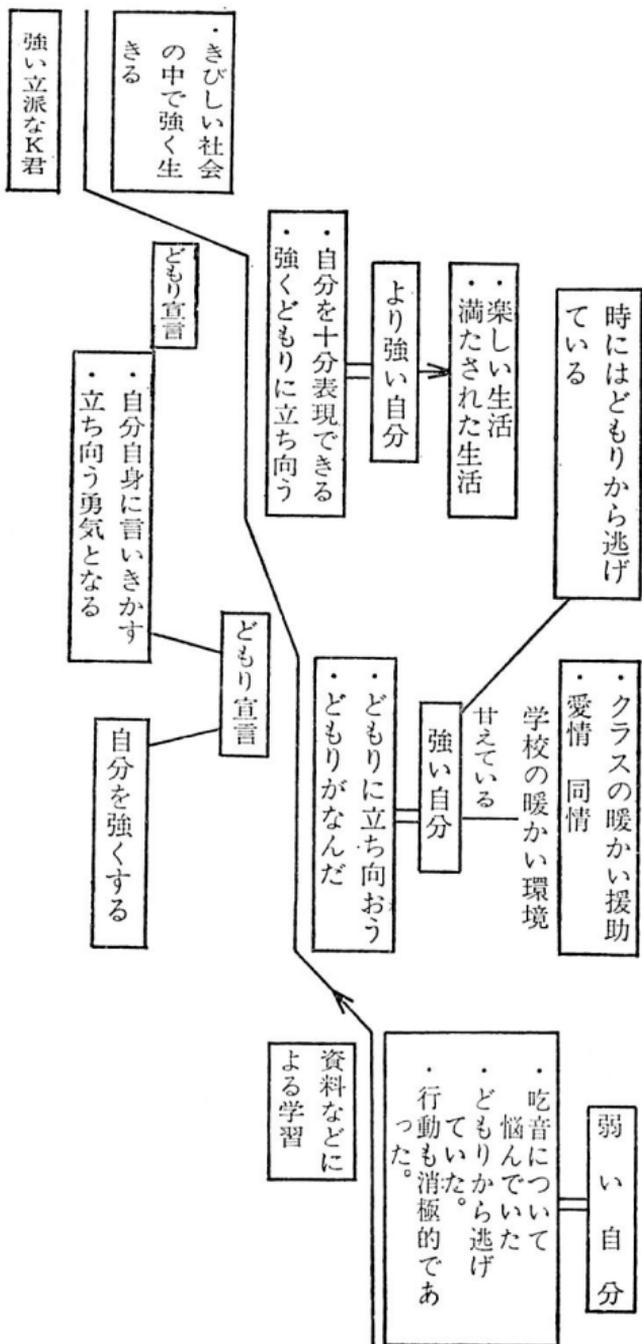
吃音克服に向けての第二のステップにどもり宣言をとり上げた。まず、どもり宣言をなぜするのか、その意義について二時間の話し合いをもち、図(次頁参照)のようにまとめてみた。K君は「何か一つ思い切ったことをやれば自信がつき、それが次に発展していく。クラスのみんなはぼくがどもりであることを知っている。しかし、そのことしか知らない。ぼくが今どもりを乗り越えようとして何をやろうとしているかを知ってもらうことが結局は自分のためになるのだから……」と、どもりを乗り越え自分の新しい道を切り開くためにその決意をみんなに伝えることを決心した。

さっそく宣言文の内容検討にはいった。宣言文の柱は話し合いによって次のようになった。

- 1 ぼくはどもりである
- 2 なぜ宣言するのか
- 3 自分がどもりで困ったり悩んだ体験
- 4 ことばの教室で学んだこと
- 5 現在の心境と今後の生き方

完成した宣言文は原稿用紙七枚にも及び、どもり克服に向けての明るい展望に立つK君の決意が随所に表われていた。(資料一、「ぼくはどもりです」参照)

どもり宣言の意義



ここでK君の通う中学校での教師集団の取り組みを紹介しておこう。

### どもし宣言

どもし宣言文発表の依頼を受けた中学校では、K君の担任の提起で、この件について数回の職員会が持たれた。そこでの見解は、この宣言を人権学習の一環として扱おうということ、また、彼の意志を尊重しつつ、クラスだけにとどめず学年全体の場にひろげていこうと意志統一がなされた。

各クラスではホーム・ルームを使って事前指導がなされた。吃音とは、吃音児の問題、障害児教育の問題などが話し合われた。お膳立ても十分にそろったなかで、彼は三月一二日この宣言文を学年集会のなかで読みあげた。吃音でない人ならたったの六七分で読み終える発表文を三十分にわたりトットツと読みあげた。同じ音が何度も繰り返されたり、最初の音がどうにも出にくいときがたびたびあった。しかし、表現ひとつ変えようとせずに読むK君の姿には、自分のどしりを全部はき出そうとする意気込みが感じられた。彼はその時の感想を次のように述べている。

いざ発表となった。正直いって不安があった。それに、すらすらいくといいなあ、とい

うことも思った。「ぼくはどもりです」と始まった。はじめからつまったらかなんとか、この字がつまりそうだと思うことはまったくなかった。読むのに夢中だった。

初めから終わりまでどもったりつまったりしたが、ぼくはこのことを少しも後悔していない。(中略)

この発表をして、これ程しゃべり方よりも内容が大事だと思ったのは初めてである。これからどもってでも本当のことばでしゃべるということ、よく発表するということを守りたい。それを実行することで次の階段にのぞみたいと思う。

彼は吃音克服の第二のステップを登った。今後彼を厳しく見つけてくれる多くの仲間達に支えられて、より強い人間へと育ててくれるであろう。そして、さらに第三、第四のどもり宣言をやりぬくことがこれからの使命である。「ぼくはどもりです」「どもりを持ったまま、すばらしい人生を送っています」——彼が胸を張ってそう言える人間にしていくため、私達は彼と共にがんばりたいと思っている。

### どもり音宣言文(資料・一)

ぼくはどもりです。生まれつきのどもりです。

ここでなぜ、ぼくのどもりについて発表するのかというと、それは自分のためにするのです。つまり、どもりに立ち向かいどもりに対する不安を少しでもなくそうという気持ちで、これから発表します。

ぼくは今どもり克服に向かって一つの階段をのぼろうとしています。ここで発表をすることが、その階段をのぼりきることになるのです。

どもりというものは、たとえこのどもりがなおらなくても不安がなくなったときにへ吃音克服になるのだと思っています。わかりやすくいうと、いつどんなときでもどもりを恐れずに、どんどんどもりを出していくことだと思います。

どもりのために悩んだり苦しんだりしたことがたくさん頭にうかんできます。その一つに、初めのうちはしゃべるのが大変こわかったように思えます。それに本を読む順番がまわってきたとき、できることなら読みたくない、さげたいと思うときもあつたし、ときにはこんなことも思いました。もう大人になりたくないとか、どこか違う所へ行ってみたいとか、どもりの国があつたらいいなあなんてことを思いました。

ある国語の時間に、なん回かまちごうたら職員室へ行って読むというのがあって、ぼくは字はまちがえなかったけれど大変よくつまりました。ひとりの子が「孝夫くんときはどうなるん」と質問しました。そのとき、ぼくはせめてどもりでなかったらなあとか、自

分はなせどもりなんだろうとか、ぼくだって早く普通の人のようにしゃべりたいと思いましたが。それに普通の人をうらやましく思ったこともありましたが。でも、そんなことを思ってもどもりはなおりません。こんなぼくが生きていてもなにもならないし、早く死にたいと思いました。そんなことを思う日が続くと日一日が満たされなく思いましたし、毎日毎日おもしろくないことばかり続きました。

ことばの教室に通うようになってからもう六、七年くればようとしていきます。はじめのうちは本の読み方を変えたり、一音一音のばしたりして読む学習をしました。それから中学一、二年になると、学習のなかにもどもりに対する生き方や考え方の勉強が三分の一ほどはいるようになりました。はじめのうちは納得することばかりでした。また、そのときの考え方では、自分からどもりを表わさなければならぬという反面、はずかしい気持ちがありました。

先生からある時、吉田昌平さんの話を聞きました。昌平さんはどもりでタクシーの運転手だったそうです。そんな昌平さんは、いつもお客さんに「ぼ、ぼくはど、どもりのしよへいです」というように、話すことを恐れずにどもりながらも、自分からしゃべっていき、とても話すのが好きだったそうです。そういう昌平さんの素ほくさとか素直さがひとびとに認められて、タクシー会社には昌平さんと話したいという人とか、昌平のタク

シーに乗りたいという電話がかかってきたそうです。

ぼくはどもることを恐れず、どんどん話していこうとする、この人の生き方はすばらしいことだと思いました。それに、その人を見たことはないが、たぶん心が広く明るい人だと思います。この話を聞いて、やっぱり自分からどもりを表わさなければという考え方が強まってきました。

そんな時、ことばの教室の先生が「ある吃音者の半生」という資料を提供してくださいました。この資料は、ぼくにとってこれから生きていくためのアドバイスをしてくれたと思います。

資料の中には大事なことがたくさん書いてありました。まず、この資料を読んでどもりの正体を知りました。つまり、どもりに対する不安から体と心の機能を影響させるということを知りました。自分のどもりは自分の手でしか治せないということや、どもっても本当のことばで話さなければならぬということ、それに、どもりに立ち向かわなければならぬということなど、まだまだたくさんだいたいじなことが書いてありました。

先生が「この資料に書いてあるように、クラスでどもりについて発表してみないか」と言われました。それで、ぼくは家で資料を何回も読み返しました。やっぱり自分のどもりは自分でしか治せない、自分でどもりに立ち向かわなければ道は開けないと思い、ぼくの

どもりについて発表しようと決意しました。

ぼくはどもりですが生きて以上、楽しいこと、悲しいこと、おもしろいことなどいろいろな壁にぶちあたることもあると思います。やっぱり生きて以上すばらしい生き方にしたいと思います。そのためには、今後の目標として、話すことを大切にしたいと思います。具体的にいうと、話すときにどもってでもごまかしたりしないで、本当のことばで伝えるということです。しゃべり方よりも内容がだいじだと思えます。それに、わかっていることがあったら発表し、疑問に思ったことは口に出すということです。

このようにどもりをのりこえて、昌平さんのような生き方をしていきたいと思えます。

### K君のどもり宣言を聞いて（資料・二）

その一、

U・T

きょうのK君の発表を聞いて、私はK君を見なおしました。いつも発表されるときに、「つらいだろうな、私だったら泣き出すかもしれないのにな」と思いながら、K君の発表を聞いています。それなのにみんなの前で自分のすべてを発表するなど、無茶苦茶だと思っていました。だけど、K君がそれを宣言されて、K君のためになるのだからいいと思います。K君はとても強いし立派です。

私がもしK君の立場だったら、こんな発表をするどころか死んでしまいかも知れない。これからもっともっとみんなと話して、K君の悩みを心からふっきってほしいと思います。私はK君にくらべてとつても恥ずかしい。なぜかという、私にもいくらか悩みはあるけれど、K君の悩みにくらべたらほんの小さな虫けらくらいのものにしか過ぎない。それなのに、私はその小さな悩みに苦しんだりしているけれど、こんな自分が馬鹿らしく思えてきた。K君の発表を聞いて反省させられました。もっと自分に自信をもって生きなくては、そして、もっと強い人間になりたいと思います。

K君も自分にもっともっと自信を持って生きてほしい。

その二、

T・T

K君の大事な発表については、ぼくはいろいろな感想をもった。発表しておられる時は目をつぶって聞いた。心を耳にして真剣に聞いた。なぜ真剣に聞くだけの価値があるのか。それは、K君が自分の不自由なところや欠点を自分の意志で、多くの人びとに公開する強い心と勇気をもっているからだ。

「勇気」という二つの文字は、人間にとってなかなか実行に移せない字だと思う。そのことを考えながら聞いていた。

発表の途中で誰かが少し笑ったような気がした。その時ぼくは一学期頃のことを思い出した。K君が本を読んでいたときに悪気はなかったが、つい笑ってしまった。その時は気持ちをごまかしたが、発表を聞いているうちに自分が非難されてもいいような気持ちになった。K君の勇氣ある発表を聞いて、自分の気持や考え方を大きく変えさせられた。

きょうの発表を機会に、今まで以上に助け合い忠告をしあいながら、良き友になろうと決心した。

K君、自分に自信をもち勇氣をもって前進してほしい。

## 2 七年の歲月の中で——吃音児を持つ母親の体験

安藤百枝

子どもがどもることに気がついた日から、約七年過ぎました。長いようで短く、短いようで長かったこの七年の歲月を、ふり返ってみたいと思います。

### 治ると信じて

子どもがどもりはじめたのは三歳半頃で、時々「ボ、ボク」と軽く連発しているのに気が

つきましたが、一時的なものだろうと大して気にもとめませんでした。心配もしなかった代わりに、どもりというものにまるで無知で無関心だったので、私はゆっくり言ってごらんなど時々注意をしておりました。

そのような状態で幼稚園に通い始め、五歳の誕生日を迎えました。五歳になったばかりの秋、風邪で発熱して嘔吐が三日位続き、その後とてもひどくどもり始めました。放っておける状態ではないとあわてて、私はいつか電柱に貼ってあった「どもりは治る」という広告を思い出しました。

電話帳で矯正所を探し、都内のあるスピーチ・クリニックに通い始めました。これで治るんだ、と胸をなでおろしたものです。そこでのやり方を見て、小さな子どもにこんな訓練をしてもよいものだろうかと多少の疑問はあったのですが、治るということばをひたすら信じて通いつづけました。事実少しづつ軽くなってきたのです。

ところが、しばらく軽い状態が続いた後、以前にも増して苦しそうにどもるようになり、不安にかられた私は、また別の矯正所をたずねました。そこでも半年位で治るでしょうと言われたのですが、遠方で、子どもが遊びを犠牲にして通うのを嫌がったこともあって、練習用のレコードを買っただけで止めました。日によって波があり、一進一退をくり返していましたが、子どもは親が思うほどに困っている様子もなく、元気に通園し、帰ってからは友だ

ちと怪獣ごっこなどに夢中でした。

### NHKのどもりの子の母親教室で学んで

その頃、NHKの教育テレビで、どもりの子の母親教室という番組があることを知りました。その番組では、お母さんたちが勉強した結果、子どものどもりの問題が解決した、と話してあげていました。その時の私には、どもりの問題が解決する、ということとはどもりが治るということと同じ意味にきこえ、さっそく母親教室への入会を申し込みました。

NHKでの一年間の勉強の中で、私はどもりの始まりや、子どものどもりは母親が家庭で子どもを正しく扱うだけで予防もできるし、悪化を防止することもできるのだということを知って、これまでの勉強不足を嘆き、自責の念でいっぱいとなり、私がどもりにしたのだから私が治してやらねば、という悲壮感にも似た気持になったこともありました。

どもりの子どもの家庭での扱い方、どもりに対する考え方などを勉強していく過程で、私は自分の姿をいやというほど見せつけられて、これまでの子どもへの接し方が何とない加減なものであったかと反省させられました。そしてどもりの改善のために良かれと言われることは、すぐに実行に移しました。どもりのことを心配したり、不安に思ったりすることが良くないことはわかっていても、こればかりはどうにもならず、さまざまな葛藤がうずまいた

り、眠れない夜が続いたこともありました。ある日、心配量というものが目方で測れるとしたら、私の心配量も他の人のものも、量そのものは大して違いはないのではないかと、違いがあるとすれば、それを心配と感ずる感度の違いではないか、と思いました。それからとても気が楽になり、子どもの症状が軽くなったことと相まって、心配量も次第に少なくなっていきました。

NHKでの一年間の勉強が終った頃には、他のお母様たちをはじめ、私もすっかり落ちついて、どもりのことで頭がいっぱいだった一年前の自分がウソのようだと話しあったりしたのですが、その時は、母親がたとえどもっていても明るい気持ちで子どもを受けとめ、励ますことが、どもりを治す道へつながるのだと信じて疑いませんでした。子どもに話す練習などはさせないで、どもりに対する心配を捨て、たくさん話すようにすることが、どもりを治す方法なのだ、と全て治すことに結びつけていたのです。ちょうどその頃、主人の転勤で大阪に引越すことになって東京を離れる時、もう少し言語障害のことについて勉強したいと、NHKでお世話になった先生にお願いしました。そして、はからずも大阪教育大学の言語障害児教育教員養成一年課程の学生となりました。

どもりの見方が変わる

そこで私は初めて「治らぬどもりをどうするか」ということばを耳にしたのです。驚きと同時に、これまで何となくモヤモヤしていた疑問や、うやむやにされていた真実が解き明かされた感じがして、胸のつかえがおりたような気持でした。

言語障害一般の勉強の中で、私は特にどもりに興味を持ち、本を読んだり、いろいろな情報をあさったり、ことばの教室の実体に触れたりしました。多くの成人吃音者に会って彼らの体験談を聞くうちに、どもりにとらわれ、治すことに執着してきたことが、いかにその人にとってマイナスであったかを知りました。大学の講義の中で聞いた「どもるといふピンチをチャンスに変えよう」「どもりを持ったまま強くたくましい子に」「どもること自体が自己という人間の価値の創造につながる」などという先生方のことば、「どもってうまく言えないことよりも、人に受け入れられないことの方が何倍も辛い」「どもりは治らなかつたけど、これまでの苦しみや悩みが現在おおいにプラスになっている」という成人吃音者のことばは、どもりは治さなければいけないものだ、どもりが治らなければ将来の幸せも否定されるのだ、と思っていた私には、どれも新鮮で強烈で、私自身を根底から揺さぶるものでした。どもりに対する私の考え方が変わってきたのは、こうした過程の中からだろうと思います。

どもるかどもらないかということは大したことでなくなり、人間の価値観や、いかに生きるか、ということが私の心を占領していたのです。大学での一年の課程を修了する時には、

どもりを治さなければ、という気持はすっかり影をひそめていました。「自分はどもりであったからこそ、現在の自分があるのです」と言える子どもに育てたいと思うようになりました。

### いかに生きるかが重要

どもりをもったままいかに生きるか、ということを考えて、これまで必死の思いでやってきた私の子どもへの接し方は、果たして正しかったのだろうか、という疑問が湧いてきました。干渉を少なく、どもりを意識させないで、子どもの話をよく聞こう。ゆっくり話しかけよう。叱り方を工夫しよう。等々は、吃音児に限らず、全ての子どもに大切なこととは言うまでもありません。それが「どもりを治すために」ということと結びつくと、かえって子どもをスポイルしてしまうこともあると思います。叱り方の工夫という一つをとってみても、「どもりを治すために」という目標と、「明るくたくましく生きる吃音者にするために」という目標とでは、母親が実際に子どもに接する場合、かなり違ってくるのではないのでしょうか。私自身、過保護だなあと思いつつも、どもりが治るのなら、と目をつぶってきたことがかなりありました。それが子どもをスポイルするのだということに気づかず。大阪教育大での一年課程を修了して、私はさらにもう一年研究生として残りました。その

間たくさんの吃音者と語りあったり、一緒に仕事をしたりする機会にも恵まれ、彼らとの付き合いの中で、「生きる」ということにとって、どもるかどもらないかということは重要な問題ではないということ、本当に自分のものとすることができずにはなりました。

吃音に対する私の価値観を変え、生きるということにとって一番大切なものは何か、ということを教えてくれたのは、専門書ではなく、どもることにとらわれずに、明るく前向きに、そして自分に素直に生きていく多くの吃音者でした。

### 私と彼のこれから

現在、私の子どもは小学校五年生です。どもりはじめてから七年になるのですが、今までのところ、どもるということが彼の生活にマイナスになったことはないようです。「どもりであったからこそ、現在の自分があるのです」と堂々とと言えるような子どもに育てたいと、かっこいいことを言いましたが、そのことばを言ってから三年たった今、私は、母親として子どもにしてやれることは何だろうと、自分に問いかけています。彼にしてやれることは何もないのではないか、という気が今はするのです。どもりをもったままの生き方を、私が教えてやることはできません。私の日常の言動から、またいろいろな人や書物との出会いの中から、彼自身がどもりをもったままの生き方を自分のものとしていくのを期待しつつ彼の生

き方を見守ってやることしか、私にはできそうにありません。

これから彼自身の悩みが内面化していく時期だと思いますが、深い悩みを体験してこそ、どもりをもったまま生きるということが本当に自分自身のものとなるのだろうと思います。その過程で私ができることは、どもりながら明るく素直に、前向きに生きている吃音者が多くいることを彼に知らせ、その人達に会わせてやることくらいだと思います。その人達の生きざまから、彼自身が、何かを学びとってくれることを期待しつつ……。親の期待とは全く別の方向に歩んでゆくこともあるかも知れませんが、それはそれで仕方のないことではないでしょうか。

いま、私の胸の中には、ある成人吃音者のことばが深くつきささり、そして輝きはじめています。私は、吃音者のこのことばを、じっくりかみしめ、味わいたいと思っています。そのことばとは、

『どもりが治るといふ薬が発明されたとしても、私は飲まないでしょう』です。

### 3 どもりに負けないで

中島秀雄

「私は、どもりというものは簡単には治らないようなので、逆にそのどもりを治そうと思う気持ちを何か別の方向にぶつけたと思います。また、たとえ人が何と言おうと気にしないで、これからの人生を歩んでいきたいと思っています」

とうとう言えた。どもりに苦しみ、他人にいろいろと言われて反発し悩み、どうにかしてどもりを治そうと努力した結果を否定するようなこの発言。いつからか自分の頭には浮かんでいたことなのだが、なかなか言い出せなかった。それが先生方のお話を聞き、話し合いをしているうちに、とうとうみんなの前で、自分のことばで言えたのです。昭和五〇年一〇月、釜石市でひらかれた言友会主催による吃音相談会に、私が通級している「ことばの教室」の先生といっしょに参加したときのことです。

私がつきだしたのは、小学校六年生の頃だったと思います。

サ行やヤ行音、ヒの発音がうまくできない私は早口で話し、聞き返されるとわざとゆっくり言いなおすことで発音の悪さをごまかしていました。しかし、ゆっくり話しても聞き返されることがあり、だんだんとそれが多くなるように感じだしました。家で隠れて、一人発音の練習をし、どんなふうに話したら一度でわかってもらえらるだろうかと考えました。練習中は、自分なりに発音が上達したように思い、実際に友達と話してみると聞き返しをされる。そうすると、以前よりも自分のことばを意識して早口で話すようになりました。そのうちに

早口で話すと舌がもつれるように感じ、ことばがつかまることがありました。そんなとき相手の顔を見ると表情が動くことがあります、それがとても気になりました。

うまく話そうとすると舌がもつれました。次は、話すときだけでなく本を読むのも気になり出しました。ある日とうとう先生から、

「ゆっくりと一つ一つはつきりと読みなさい」

と注意されてしまいました。自分では、ゆっくり話したり読んだりするよりは、早くした方がよいと思っていましたし、先生から直接注意されるほどへただと思っていなかったので、ショックでした。そういうえば、私が話すときの友達の顔が、以前と違っていい感じにも感じられました。

それからは、家で本読みの練習をしていけばいいだろうと、文章を暗記するくらい練習をするようにしました。しかし、練習しているときはうまくいっても、学校ではしくじることが多く、話すこと、読むことができます気になってきました。

このころになると、班の友達が話すときに助け船を出してくれたり、先生と同じように、「ゆっくりしゃべれ」

と注意してくれることが多くなりました。私は、先生や友達からいろいろと言われるのがいやで、本読みの練習をいっしょうけんめいしました。おかげで読み方はじょうずになった

のですが、ときどきひっかかるのはちつとも変わりませんでした。いくら練習しても治らないので、だんだんに練習時間を短縮し、ついにはやめてしまいました。そのうちに、短く話せば楽なことに気づき、必要最小限の話しかしないようにしました。そして、できるだけ話しかけられないよう、話すことのないよう、いつも目立たないようにすることにしました。

小学校卒業の頃には、あまり話をしない私のことを気にする人はほとんどなくなりました。中学校の入学式当日、一人一人が自己紹介することになっていましたので、私は十分に準備をしてみんなの前に立ちました。自信を持って始めたのですが、もうことばがつまってしまいました。だれも何も言わないで聞いてくれたので、どうやら終わったものの、新しい級友にも私のどもりは知られてしまいました。

この日の失敗は時折り思い出され、ますます話す場面から逃げるようになりました。そして、家で自分なりに話す練習を始めたもののかえってどもりが悪化していくようで、友達から注意されたりからかわれたりすることが多くなりました。私はあせり、どんなふうにしたらどもりは治るのだろうかと思ひ、こんなにみんなにバカにされてもどうにもならないのか、死ななきゃ治らないのかと考えるようになりました。

こんなことは進級するたびにくり返されました。私たちの学校では、学年が変わると学級編成替えがあり級友が入れ変わります。新しい級友が私のことばをおもしろがりわざと話しかけ

ひやかしたり、親切らしく注意してくれたりするのです。相手にしないといつまでも続くので、早く飽きてくれることを願いながら適当に相手をするのですが、ほんとうに苦痛です。こんなとき、なんとかどもりからぬけ出そうとあせるのですが何ともなりません。学校に行くのがいやで何度かズル休みをしました。またよく腹痛をおこしました。先生にはずいぶん弱いなあ、と言われ、健康について注意も受けました。自分では体に自信があるのですがとんどきどうにもならないほど痛むのです。

私が「ことばの教室」に通級するようになったのは中学校に入学してからです。どもりを治したいと考えていた私は、突然校長室に呼ばれ、ことばの検査をされたのには驚いたものの、「ことばの教室」に入級できると聞いて大きな期待を持ちました。

その後、母といっしょに「ことばの教室」に行き、あらためて検査をうけました。本読み、五十音や文章の復唱を録音したものを母と初めて聞いて私はびっくりし、ことばの教室に入ることを強く希望しました。「ことばの教室」の先生は、私の家が遠いことを気にして、一〇キロも離れているし、中学校は帰りも遅いが通うのはだいじょうぶかと何度も念を押されました。私は、

「どもりを一日も早く治したいから必ず最後まで通います」

と答えました。私は、週に二回最後の時間を欠課してバスで一〇キロも通うことに不安が

なかったわけではありませんでした。

ことばの教室では、音読練習や先生との話し合い、ゲームなどをし、また思いきり大声でさわいだりもしました。発音の悪い音の正しい発音のしかたも指導され、舌の動かし方の練習もしました。ことばの教室で先生と話し、音読をすると、今までになく楽に話したり読めたりでき、学校でも気楽に話をするようになりました。私のどもりはだいぶん軽くなったといわれるようになりました。私はそれに力を得て体の疲れも忘れまじめに通級しました。しかし、その後、症状は一進一退、やっぱり「ことばの教室」でも治らないんだなあという声がか聞こえてもきました。私自身もやはりだめかと、教室を休むことが多くなりました。休み出すと行きにくくなり、長期間休んでしまい、退級しようかと思うようになりました。しかし、自分のことばを考えると思い切ることができないで、通いはじめる、また休むということをくり返しました。

三年生になっても変わりませんでした。ずるずる休む。そうすると症状が悪化する。不安にかられてどうしようもなくなり教室に顔を出す。教室に行けば気持が落ちつき楽に話せるつもりになる。だが翌日はもとどおり。自分で自分にあきれ、いやになるのです。そして、どうすればいいんだろう、このままでは進学するにも就職するにもだめだろう、どうすればいいだろう、あれこれ考えることが多くなりました。

釜石市でひらかれた吃音相談会に勧められ、どんなことをする会なのかもわからないで参加したのはこの頃でした。「ことばの教室」の先生に連れられて、私といっしょに宮古から参加したのは、高校一年の女生徒でした。汽車の中で、この女高生と思いきり話しあうことができました。

この会での先生方のお話『どもりは無理に治すことではなく恐れないことだ』は、私のモヤモヤを吹きとばしてくれました。そうだ、どもりというものは気持があせればあせるほどかえって悪化するものなのだ、無理に治すべきでないということが、このときはっきりとわかったのです。治そうとする努力を別の方に向けてすることで、他人に誇れるものを身につけることができる。この考えが、このとき以来私の心に生れ、だんだんに強く根づいてきています。

私はこの相談会に参加したことが本当に有意義だったと思います。この日ほどしゃべりたいことをしゃべり、自分の気持を正直に話したことはないと思います。気がねなく話すことができ、話を通じ合う、こんなにすばらしいことはありません。こんなすばらしい会をひらいてくれた先生方に感謝の気持でいっぱいです。また、この会のあることを知り参加することができたのは、「ことばの教室」に入っていたおかげと思います。「ことばの教室」に入っていないよかったなあこのとき思いました。

「ことばの教室」は、昭和五一年三月に卒業しました。「ことばの教室」の先生が、恐れな  
いでだれとでも話せるようになったからもうだいじょうぶといって卒業させてくれました。  
卒業式の日がちょうど高校入試にぶつかってしまったので、前もって録音していた私の作文  
をみんなに聞かせることにしました。

数日後、ことばの教室に行くと、先生は、

「秀雄君のことばを、みんな感激して聞いていたよ」

と言ってくれました。私みたいなもののしゃべったことを、それもとぎどきどきもってしゃ  
べったことを、みんながばからしいとも思わないで本気で聞いてくれることは本当にありが  
たいことです。こちらが真剣に話をすれば、たとえどもっていても相手はちゃんと聞いてく  
れるんだということを知りました。

高校に入学してからももっています。中学校のときと同じくひやかす人もいますが、多  
くは親切に、

「落ちついて、落ちついて」

「はじめから大きな声を出さないで静かにしゃべれ」

などとアドバイスをしてくれます。この親切はほとんど役に立ちませんが。

私は本当に幸福な人間だと思えます。普通の人は、どもりの人に会うとはじめはびっくり

した顔をし、いやに親切になつたり、逆にわざとしゃべらせようとしています。そんなときのその人の目は軽蔑やあわれみの目です。私はこのごろこんな人に会うことがないからです。

私は、これからもどもりのことは気にかげずに、自分自身で道をきり開いて、まっすぐに歩みたいと思っています。私たちに對する誤った認識から不必要な干渉や拒否にであうことがあると思います。予想されない大きな壁につきあたることもあると思います。どんなに厚い壁でもそれを避けて通るようなことをしないで、突き破って進んでいきたいと思ひます。

#### 4 新しい青春を求めて

山川夏雄

#### 新しい考え方を知って

就職して半年ほどたち、いよいよ秋も深まった頃、私はO大学のK先生の研究室を訪れました。どもりに苦しんでいたものの、無気力のどん底にいた私は、どもりをなんとかしたいと願ひながらも、怠慢な日々を過ごしていたのでした。

O大学を訪れたのも、勤務先の上司の勧めからでした。消極的な私の仕事ぶりを見て、ど

もりを治しておかなければと案じてくれたのでしよう。私はせっかく紹介してもらったのだから、行かなくては悪いと思い、いやいやながら出かけたのでした。

K先生のお話は、今まで聞いたのと全く違ったものでした。どもってでもやりたいことをやりなさい、とおっしゃるのです。「どもりでもうまい物は食べたいし、女性とデートもしたい。それならどもりながらやればいいじゃないか」

私は一瞬あつげにとられました。どもりだからやりたいことができなくて困っているのに、どもりながらやれとはどういうことなのか、理解できなかったのです。どもりながら話してやりたいことをやり、恋人など作るなど私には想像もつかなかったのです。

ともあれ、同じ研究室のIさんが相談相手に決まり、私は週一回定期的にそこへ通うことになりました。

初めの頃は、とにかくいやいや通っていました。自分が相手にどう思われているかが気になり、Iさんが私の話をよく聞き、明るく接してくれても、内心ばかりしているのではないかと疑いは、なかなか消えませんでした。私はいつも相談が終って部屋を出る時、後髪を引かれるように聞き耳を立てていました。自分をばかにして笑っているのではないかと、気になったからでした。

## さぼってしまったKJ法

数週間たった後、私はIさんと、「女性にもてるには？」というテーマで話し合いました。その話し合いをテープに録音し、私は次週までにKJ法（川喜田二郎著『発想法』中公新書）という方法を使ってまとめよう言われました。

テープを聞いてラベルに書きとったものの、それから先の要領がのみこめなかった私は、本当に最後まで完成してくるように言われたのか疑問になってきました。特に模造紙などどうして手に入れればよいのかわからず、まさか最初からそこまで要求されることはないんじゃないかと考えてしまいました。それで私はそれ以上やるのをやめ、そのまま相談に出かけることにしたのです。

ところが、IさんはKJ法を最後まで完成するよう言ったはずだということです。Iさんに手厳しくしかられた私は、「なぜKJ法をさぼったか？」というテーマでその日は話し合い、それをKJ法でまとめることを約束しました。

しぶしぶやったKJ法でしたが、やってみると自分の問題がいろいろわかってきました。自分は必ずしもどもるからではなく、自分が傷つくのを恐れて消極的になっていくとか、消極性をごまかすために理屈をつけて自分を正当化してしまうとか、いろいろな発見がありま

した。KJ法をさぼって自分に手落ちはないと思いこんでいたのも、そうしたことの現われだったようです。

自分の問題点に気づいた私は、消極的な発想を少しづつ変えていき、現実の場でも、今までよりは積極的に行動しようと努めました。しかし、話す恐さは相変らずで、どもってもかまわないと思っても、舌が出ると慌ててしまいました。

### 腹話術への挑戦

そんな時Iさんから、「五月の全言連大会を目標に腹話術を始めないか？」と言われました。「腹話術に関する資料は一切ない。全て自分で情報を集め、練習をして、とにかく五月に発表しなさい」というあまりにも無茶な注文でした。

私はこれはできそうもないから断りたいと思いましたが、「一人でやるとはいっても、結局はなんとかしてくれるのだろう」と安易な気持ちもあり、引き受けてしまいました。年も明けた一月半ばのことでした。

腹話術。私はとっさに自分の家の近くに、あるプロの腹話術師が住んでいることを思い出しました。何のヒントも与えられなかった私としては、これが唯一の頼みの綱でした。しかし、直接たずねるとか電話をするなど思いもよらず、住所を調べるのに見当をつけたあたり

を一軒一軒見てまわり、家を見つけてから手紙を出したのでした。一週間に私が行動をしたのは、一本の手紙を出したことだけでした。

次の週、こんなことでよかったのだろうかと思ひながら相談に行くと、案の定、「今までと全く行動パターンが変わっていない」とIさんから指摘されました。それでその次の週は、労働会館や市民会館などへ行つて、腹話術のサークルについて尋ねました。腹話術についてはなんの収穫もなかったのですが、私がつもつて話しても親切に受け答えをしてもらえたことが嬉しく、大いに自己満足を覚えたのでした。

次の週、ある雑誌の腹話術サークルの紹介記事を渡されました。私はいかにもありがたいという顔をしながら、そこに電話番号が載っているのを見てがく然としました。サークルの場所は東京なので、たずねていくわけにもいかず、今度こそ電話をかけなければならなくなつてしまつたのです。

ことのほか電話が苦手だつた私は、相談に行く期限ぎりぎりまで電話ができずにいました。相談日の前日は昼間から電話のことばかり考えていました。夕食がすんでからも、私は部屋の中で一人、なんとか逃げ出したいた気持を抑さえ、勇気を奮い起こそうとしました。しかし、私の努力をあざ笑うかのように、いい知れぬ不安がじわじわと全身を襲つてくるのでした。

時間がたつにつれ、私はせつぱつまつてきました。ようやく決意を固めて部屋から出、電

話の前に立った私は、自分を励まし、思い切ってダイヤルを回したのです。

受話器をとる音がし、聞こえてきたのは若い女の人の声でした。

「もしもし」と相手は呼びます。必至の努力にもかかわらず、私の口から声は出ません。「もしもし」相手の声が不審そうな調子に変わります。受話器にしがみつくように、私はもがきました。電話を切られる前になんとか声を出さねばと、必死の思いでした。

相手が何度呼んだ後だったでしょう。なんとか私の口から声が出ました。ほっとしながらどもりどもり用件を伝えると、サークルの責任者の人が代ってくれ、親切に説明をしてくださいました。電話をかけ終った後、どもった時にいつも感じる、やり場のないばつの悪さをその時はそれほど感じませんでした。むしろ、なんとか乗り越えたという満足をより感じていたようでした。

進展のないままそうこうするうちに、プロの腹話術師の人に出した手紙の返事が来ました。「忙しくて暇はないが、時間があいた時、腹話術の手ほどきをしましょう」という親切な内容で、ていねいに電話番号も書いてありました。

再び電話をかけることになりました。前回と同じ経過をたどり、やはり苦勞して電話をかけました。相手の人のスケジュールの都合で会いに行く日が決まらず、何度も電話をすることになりました。しかし、いやだった電話もかけるにつれ、その恐怖心はわずかながら薄ら

いでいく感じでした。

とうとう最後には、自宅までおうかがいし、腹話術について説明を聞いて、ようやくそれを参考にして練習ができるようになったのでした。もうすでに三月に入り、春の声を聞く頃になっていました。

練習はなかなかはかどりませんでした。腹話術がうまくできるかどうかより、どもったらどうしようという心配ばかりしていて、練習に打ち込むことができなかつたからです。

### 全言連大会で

いよいよ五月が近づきました。人形を不十分ながら工夫して作りました。そこで試しにIさんの前で演じてみましたが、どもってことばが出ず、しらけて演じるのが苦痛でした。

全言連大会は五月の三～五日の三日間、高野山で開かれました。全国のどもりが一堂に会するこの大会に参加したことは、私にとって貴重な体験でした。多くの人と知り合い、それぞれの悩みや体験を語ることで、私には大変参考になったのでした。

私の腹話術は研究発表というかたちで、大会の最後のプログラムに入っていました。最終日は朝からそわそわと落ち着きませんでした。腹話術の最中につまんで立ち往生してしまつたらどうしようと、不安な気持に何度も駆られました。

プログラムはだんだんと進んでいきました。私は次第に緊張し、不安がますます強くなっていきました。この場から逃げ出したいと思うこともたびたびありました。もう前でやっていることなど眼中にありませんでした。私はどうでもいいと投げ出すことだけを恐れ、緊張にじっと耐えていました。

いよいよ私の出番になりました。前の発表が終って私の名前が呼ばれるまで、私の胸は張り裂けそうに早鐘を打っていました。

「次は特別参加の山川さんです」

司会の人の声で立ち上がった私は、不思議なことに、それまでの緊張がすーっと引いていくのに気づきました。

思いがけず落ち着いて話し始めた私は、それでもひどくどもりました。なにしろ、今まで目の前にしたことがないほど多くの人びとが、私を見つめているのです。私はひどくどもりながらも、腹話術の説明をしました。

いよいよ腹話術を演じる段になりました。この前の失敗がちらりと脳裏をかすめます。しかし、今はあの時の照れくささがみじんもありません。思い切って第一声を出しました。すると不思議なことに、今まで練習でもできなかったほどうまくやれるのです。演じている間中、どもってはいっても中断することはありません。人形がどもらずに私だけひどくどもって

いるのが大いに受け、全然笑わそうと思っていなかったのに会場は笑いの渦になってしまいました。

### 自己変革の中で

短かい実演でしたが、最後まで自信がなく、いやいや取り組んできたにしては大成功でした。しかし、それより私にとって大切だったのは、その過程でした。どもるのがいやで話さなかった私が、無理にでも電話をしたり話をしたりしているうちに、どもることの恐さが少しずつ減ってきたのです。それらの行動を通して、やりたいことをどもりながらやっていけそうな気がしてきたのです。

その後、私は少しずつ自分の行動範囲を拡大し、今までやらなかったことをやっていくようになりました。恐る恐るながら何か新しい経験をするたびに、自分が解放されていく感じがしました。今までこんなことができなかつたのか。こんなことにおびえていたのか。自分の愚かしさに気づくばかりでした。

職場でも、私は電話や事務室を訪れる人への応待にまだまだ困ってはいましたが、少しずつでも逃げないように心掛けていきました。また、どもりのハンディをなんとか補おうと一生懸命仕事をし、仕事について勉強もしていきました。引っ込んでいてはだめだと、どもり

ながら話し合うことも増えていきました。

ただ、自分の殻に閉じ込められぬよう、現実の中に自分をさらしていくのは苦しいことでした。失敗をしても安易に自分を甘やかすことができなくなり、積極的に行動しようという意志と、逃げようとする感情との間に葛藤が続いたのです。

### 新しい青春

腹話術を大会で行なってから二年がたちました。言友会創立十周年記念大会が行なわれ、「吃音者宣言」が採択されたこの頃、私はようやく前途に光を見ていました。

職場会議で、私はいつの間にか主要な発言者の一人になっていました。電話にも慣れ、事務室を訪れる人への応待もできるようになっていました。ひどくどもってはいても、話し方の要領をつかみ、話す時の悲壮感が薄れたせいでしょうか、仕事についての理解を深め、何をどう言えばいいかがわかって、確信を持って話すようになったからでしょうか。少なくとも仕事に関して、どもりはそれほど問題でなくなってきたのでした。

とはいえ、まだまだざつくばらんに話すのが苦手なのです。どもりながらも気負わずに、もっと楽しく会話ができたらと思っています。そして、どもりながらも恋人を作りたいとも思っています。新しい青春を、私はいま歩き始めたところなのです。

## 5 『吃』よ、誉あれ

鳥羽 稔

吃音克服体験談ということですが、私自身、どもりを治しえたわけではありません。今日もなお、「吃」を引っ提げたままにいる現役ドモリストでございます。それでは一体、私にとってどもりを克服するということは何であったのか、とにかく、私の中で生き続ける「吃」の遍歴のあらましを、ありのままに、みずからが納得できるまで、語り切ってみたく思います。

私の幼少時を振りかえると、子供たちから「ニワトリ」と呼ばれ、事あるごとに、あざ笑われていた覚えばかりがあります。顔面をひきつらせ、打ちこぼしてしまう私の連発音が、鶏の鳴き声に似ていたのでしょうか。その「ニワトリ」が小学校上級生になり中学へ行く頃には、誰からとでもなく「きちがいドモ安」と陰口され、友人も少ないままにいました。私の耳に「ドモリ」という単語が触れたとたん、私は忌わしい狂犬となって、その者へ襲いかかっていたからです。

疎開先での中学校一年のとき、戦争が終わりました。翌年、私はひとり身で田舎を逃れ、空

襲による焼け跡だらけな街へ戻っております。級友らの、とどまりもない軽やかな音声の氾濫の中で、重い「ひき吃」である自分を、教室の片隅にこごめさせているより、爆撃で半ば壊れた倉庫街の壁にもたれ、卒倒しそうになる飢えをこらえて風を見ている方が、私には、この上ない安穩でございました。この理由を知らない廢墟こそ、どもりな私の住むべきすみかなのだと思つたものです。そこでは、言葉などいらず、けだもののように生きておればよかつたからです。が、年ごとに、私の廢墟は失われ、世の中が物質的に榮えはじめて、どもらない言葉が、生活上必要条件となつてまいります。私が、まともな職に就けようわけがございませぬ。町工場の職工、飯場住まいの土方、キャバレーの仕込み雑役夫、などなど低所得のふちを堂どうめぐりする間に、あたりは神武景氣だと言つて囃したて、ビルが建ち国産車が増産され、ファッションショーは満員となります。いつからか、私は、川瀬にあがつた切株のような疎外感の中に、自分を閉じこめてしまつたようです。どもりな自分が憎く、醜く、やり場のない日々が続きます。飲めなかつた酒を知り、泥酔の中でみずからの「吃」を、ごまかし、酔いざめて白けかえつたみずからの上に「吃」をつのらせ、「嘲けた」と言つては傷害沙汰を起こしてしまい、自分への蔑視と虐待は雪ダルマ式にふくれ、やまふことを知りませぬ。とどのつまり、ホールのフロアに蹲り、血を吐きます。結核療養のため、三年余にわたる社会からの強制隔離を余儀なくされます。鉄の寝台にのけぞり、どもりな自分を呪

い毒することしか知らなかった男の犬死にを予感して、私はようやく、その恥ずかしさに震えるのです。

「吃」よ、おれの中の「吃」よ、許しておくれ。ゆえもなく虐たげ、嘲けつづけたおれを、許しておくれ、お前がおれであり、おれがお前だったことが、たったそれだけのことが、このおれにはわからなかった。おれの「吃」と、お前のおれを許しておくれ。

病熱の中で私は、自分の中の「吃」を抱きしめ、「吃」に許しを乞いました。「吃」を認め、「吃」を負うて生きつくすことが、真正銘な自分のあるべき姿であったと、おくれればせながら悟るのです。暗く、たまらなく暗かった私の四囲が、不思議な明るみに照らされ、瞭然と見えてくるのを感じます。なんのことはない。この世の大方の約束ごとは、どもらない、「吃」というものについて全く無知な人たちが、寄って集<sup>たか</sup>って仕組んだものばかりではないか。どもり人間がそのような現代の、社会機構の中に追従していこうと、思うこと自体が無理であったのだ。世間さまの前でおれのどもりを隠そうとするかぎり、どもらない人たちの口から吐かれる音声を真似ようとするかぎり、そのために「吃」を嫌い、「吃」否定による劣等意識を持ちつづけるかぎり、吃人間のうちが、わからは、何ものも生まれようはずはなかったのだ。みずからの「吃」を認め、それをうしろ楯にしてこそ、自分は、世間の吃らない人たちに向って、対等でありうる。そのように考えついたとき、私の中で重たく澱み、私を

苛さいなんだ屈辱感がわか、或る底知れない勇氣に変化けしていくのを、私は覚えました。同時に、「吃」を笠かさにしていじけた自己蔑視の蓑かさを剥むぎとったひとりの人間が、その内面的な成長において、いかに、幼稚で浅はかなまま放棄されていたかを、まざまざとかえりみ、私はあらためて、みずからのためへの恥辱に顔を赤らめるのです。「吃」のない社会が抱えひきずっている苦悩が読めず、「吃」のない人たちの歌が解せないで、何が対等でありえよう。私は、独学をはじめます。「自己点検」という文字を知るようになります。巷間の吃音矯正所へ通うお金も暇もなかった私ですが、いつからか、くだけ散らかす連発音に身を曲げ震える自分を、あわてず見守り、喘ぎの残る事後の「吃」を、抱きくるむように、そっと受けとめていく自分が、除々に育そっていきます。

「どもれ。どもつてもよい。だが、この次には、ほんの少しでよいから、さっきよりは、うまく恰好よくどもつてみる。ほんの少しでよいから」

どもらずに言葉を吐つこう。どもりでない振りをしようという意識を捨てた私は、どもり方へのプロポーションを考えるようになります。吃くつするきわにともなう身体からだのひきつれ、おどりのさまを、その時点での精神状態、体調などを思いあわせながら、みつめ、その姿へのアンデパンダンな終りのない矯正が続けられます。自分の中の「吃」との限りない語り合いです。そこには、暗くみすぼらしいだけであった「吃」との誇り合いはもうありません。

「吃」は終りのないプレイヤーであり、私は、「吃」への終りのない付添い人です。信じ合  
い、はげまし合うことしかありません。

このようにして私は、「言友会」なるドモリストの全国的な連絡協議会が発足、進展をな  
しえていることなど全く知らず、ひとり芝居じみたやり方で、今日までもってまいりまし  
た。年かずも、四〇歳を幾つか回ってしまいました。家庭には、妻と二人の子供がおります。  
幸か不幸か、そのいずれもどもりません。外での私は、零細な広告美術業を経営しておりま  
すが、五、六人の若い中修工たちは誰ひとりとしてどもりません。彼らは敏しょうに動き、  
暇さえあれば活達な舌廻りで饒舌を楽しんでおります。また、私には一〇数人の同人雑誌仲  
間がおります。その同人のほとんどは、巧妙な「語り人」です。私ひとりが、異形の生きも  
のようによもるのです。けれど、私は今、みずからの「吃」に向って、かすかな波立ちも  
ない安らいだ気持で対することができません。妻子よりも友人よりも、血のかかわりの濃、ゆ、  
感じられる私の「吃」ですが、それより何よりも吃つする「吃」の姿の、なんと変りに変つ  
てしまったことでしょうか。「ニワトリ」と呼ばれたあのけたたましい連発音を、私の「吃」  
はいつからか、ほとんど漏らさなくなりしました。難発の発作の中でふと、涎よだれの流れる錯誤に  
とらわれ、あごに掌をあてる癖を、私の「吃」はいつからか取り払ってしまいました。ども  
りぎわに、目玉を中空へ向けてしまうことも、私の「吃」はいつからかやめてしまいました。

押し殺し、にがく喘いではおりますが、私の「吃」は今、安らかに、鎮りかえった低音を奏するばかりです。まどいは、問答は、もうございません。ある日、突然に、「吃」が私から立ち去ってしまうのではないかと不安さえ、この頃の私は覚えます。「吃」との訣別を、私は考えていないからです。今にいたって、「吃」とは、生涯における誇り高き伴侶以外の何者でもございません。

いろいろと、ひとりよがりな体験をしゃべってしまいましたが、開きかえってみますと、所詮、私ひとりの出来事でありません。徒勞、挫折の多くありすぎたことが悔まれます。これからのわれわれ成人吃音者は、団結することによって、その正当な存在性を「吃」のない社会へアピールする必要があるのではないのでしょうか。「吃」が理由で、結婚・就職に困難があるとすれば、それは、悲しいことです。「吃」のない社会の中に、吃音者への潜在的な蔑視感があるとすれば、それは許されないことです。吃音者みずからが、その人間形成において、厳しく点検されねばならないことはいまでもありません。一人一人が、吃人間として自負できる人間に成長していくとき、はじめて、「吃」のない社会へ向って対等しえます。そのためには、「吃」のない社会に、どもりな自分がある、という意識、吃つすることは不自然であり、醜く、恥であるという意識を捨てねばなりません。そのような気持でどもりを治そうとすることは、結果的には、自己否定になり、みずからをさげすむことになる

のではないでしようか。治るものは、それで結構です。どうしても治らないひとびとは、その劣等意識を助長するだけに終ってしまいます。吃人間は、現代社会においては、おのずから対極的な立場に立たされていっているのではないでしようか。そのことを自覚して、立っていくべきではないでしようか。「吃」を知らない人の庭に咲く花を欲しがることより、吃人間としての花を咲かせることを思うべきではないでしようか。どもりを治そうとすることより、どもりを基底にしたしあわせを考え、はげんでこそ、より人間らしく、今日的でありうるのではないでしようか。そうするとき、「吃」ははじめて、醜悪さを失い、独自性を確立してまいります。「吃」は、「吃」自身の力で必ずより素晴らしいもの、より美しいものへ向って変身していくでしよう。ついにそれはどもらない人たちの持つようはずもない、吃人間の心の楽器となって、靈妙な音調を奏でるでしよう。

## 6 どもりと私

守部義男

現在、私は教育委員会で指導主事をしていきます。この仕事の前には、通算約二五年ほどの教職経験があります。このように人の前で話をする事が多い仕事をしてきましたが、実は

私は小学校の頃からどもりに悩まされていたのです。私の場合は、一人で、もたもたとどもりを克服するためにいろいろと試みてきたのですが、言友会のみなさんが、力を合わせてがんばっていることに非常に感動を覚えています。

今日は、

・私のどもり観

・私のおいたち

・自己実現とどもり、あるいは自己実現と障害

という三つの内容に分けてお話してみたいと思います。

どもりはすばらしい人格の証しである

私は、どもりを経験した人、どもりだという人は、どちらかというところどもりはいけない事とか、あるいは重荷であるものとか、そんな受けとめ方をしている方が多いように思います。

しかし、私のどもり観は「どもりはすばらしい人格の証しである」というものなのです。それは、わざわざ他人のことを調べずとも各自、自分のことをじっくり調べればこと足りましょう。私の分析を要約しますと、まじめで、正直で、純情ということになりましょうか。

どもりであることをすばらしいことであると四八歳になった今、そう思えるのですが、一〇代、二〇代の頃には全くそういうふうには思えず、どもりで一人悩んでいたのは事実です。

もう一つ重要なことは、人生においてどもりのような適度な抵抗を持ったために、それを克服する努力がそのまま自分を磨くことになったということです。もともとすばらしい人格がもつと磨かれるという意味で、私はどもりであることを喜んでいるのです。また、「どもりは個性だ」、「だからどもりを持ちながらありのままにふるまえばいいのだ」と私は思っています。世間がそれをどういうふうに見るかということは、また別の要素だと私は思っているのです。

どもりそのものが問題なのではなくて、どもりを克服できないでいること、それが問題なのだと思えます。今の私には、どもりを克服できたという実感と、どもりと徹底的に仲良くなれたという気持があります。どもりが、私を育ててくれたという実感です。

### 人前で話す場に立って克服していく

最初、どうしてもどもりと仲良くなれなかった私が、どうしてもそのような気持になったのか、いきさつを体験を通してお話してみましよう。

幼い頃、私は近所に同じ年代の子がいなかったため、兄弟以外の子どもと遊んだことがあ

りませんでした。それに、小学校にあがる前、百日ぜきと肺炎にかかり一年間ほど闘病生活を送っていました。

家族から、はれものにさわるような育て方をされ、小学校にあがったのは一〇月の運動会の頃でした。級友どうし、ますます仲良くなっている時期に、小さくて、青白くて、病気がちな私が入っていきますと、子どもどうし、相手をけん制いたします。クラスメートに対して、みんなこわい友だちだなあ、という感じを持ち、とうとう学校嫌いになってしまいました。

本を読まされた時は、家ではそらんじるくらいに読んでいても、とたんにどもってみんなからどもりの烙印を押されました。烙印を押されると、どもりはますます私の上へのしかかってきました。

その後、旧制中学校を卒業して軍需工場に動員で働いていた時に代用教員をしないかと誘われましたが、私には、どもりであるという劣等感があって、人前でしゃべるなんて自分にはできないと信じ一度は断りました。

しかし、結局はいろいろな理由で代用教員を引き受けることにしました。そして、自信がなかった教師という仕事をどもりながらもなんとかやりとげることができました。このことが、私に大きな転機をもたらしました。その後、師範学校に入り学校の先生になろうと人生

のさいころを振ったのですから。

師範学校では、このどもりをもう少しなんとかしなければと思い、弁論部に入り、人の前で話をするけいこをしました。その後、弁論の練習から発展して児童文化部に入って活動を続けました。さらに、先輩の誘いもあってNHKの福岡放送局の声優の経験もしました。もともとどもりをなんとかしたいという気持で活動に入ったのですが、いつのまにかそのような活動を通して、どもるどもらないはたいした問題ではなくなっていきました。

私は、人前で話をする時は、前もってよく練習し、いろいろな間のとり方など研究して努力してきました。しかし、話が終った時点でいつも不快感——自分の思う通りに話せなかつた心残り——に苦しめられるのです。ところが、私がそれだけ努力しているのに、意外と自分が気にしているほど他人は自分のことを思っていないということを見ました。それを知って、私は気が楽になってきたような気がしました。

私は、自分がどもりだという話をよくするのですが、そんなある日、ある教師の仲間のサークルで一人のどもりの友だちを知りました。その友人は歌はうまいし、人前でしゃべるのは上手で、子どもたちに対する考え方もしっかりしている人ですが、

「実は私もどもりなんだよ」

と話してくれました。どもりながら人前で話す仕事につき、これを克服して立派に仕事を

している人が自分の周囲にもいることがとても心強く感じられました。

### 成就体験を通して人間の価値観を探る

人間の価値観なんですが、人には、大多数の人と同じようにやりたいという気持と、自分が独自性を発揮したいという両面の気持があるように思います。

私が友だちにけん制されて学校に行けなくなつたように、大部分の人の場合、周囲の人の価値観に本人も引きこまれてしまいます。みんながなめらかに話すから、自分もなめらかに話さなければいけないのかなあといいこまされてしまいます。人間の価値観というレベルで見ると、スラスラしゃべれることだけに価値があると思うこと自体、薄っぺらな人生しか歩めないことになるのではないでしょうか。

ですから人間関係の問題においては、自己理解と新しい自己発見、今までと違ったすばらしい自分を発見して、どもりながらも意外といろいろなことがやれるという経験と、人間関係における成就経験を積み重ねていくことが大切になってきます。それも観念でなく体験を通して、積み重ねていくことが大事だと思います。その体験の積み重ねから、私は「どもりはすばらしい人格の証しである」と思えるようになったのです。

## 障害個性論と自己実現

私は最近、「障害は個性だ」ということを体感し、障害個性論として整理をしているところですが、どもりを含めて、いろいろな障害について、これをどうとらえ、自己の内部にどう位置づけるかという問題をはっきりさせる必要があると考えています。人間を外側から理解しようとすれば、障害は、異常な状態でありましょう。また医学や心理学から見れば、正常に機能しているかいないかが問題となりましょう。しかしこれも、標準から見るという外側からの理解でしかありません。

これらは、障害を背負った者自身にとっては、二義的な参考でしかないと思います。自身自身の人生にとって、それは背が低いとか高いとか、色が黒いとか白いとか……といった個性以外のなものでもないはずです。

私は、自己理解の次元で、これをはっきり意識することが、かけがえのない自己の人生を充足することになると思うのです。障害個性論は、こうした自己が背負っている障害をどう見るかという考え方です。

障害を背負っている人は、外側から見る見方を参考にしながらも、自己の内部における障害のとらえ方を、障害個性論の考え方によって理解しなければ、いつまでたっても障害にふ

りまわされ、一度しかない人生を貧しくすることになると思います。

はじめにも述べましたように、障害そのものが問題ではなく、障害にふりまわされたり、障害におしつぶされたりして、自分の人生を切り開いていけないということが問題だということ。

障害に悩む人は、同じ悩みを持つ友と語り合ったり、本当に心をうちあけられる人を尋ねてよく聞いてもらったりする中で、真の自己を見つめ、真の自己のすばらしさに気づくことが必要です。これが自己実現の入口です。

すばらしい自己が、障害をむしろ一つの踏台にして実現されていくこと、これがそうしたことから始まるのです。

## 7 講談に賭けた人生

田辺一鶴

どもりを治したくて

今日、私が芸能界にいますのは、講談をすることによって私のどもりを治そうとしたのが、

そもそもものきっかけでした。

講談は、リズムに特徴がありますが、テンポはかなり日常生活に近いものです。それで、講談をもっと掘り下げて研究していけば、どもりを治す何かがあるかもしれないと思ったのです。

特に講談の中の「修羅場」では、かなりひどいどもりの私でも、非常になめらかに語れます。そこで、私は多くのどもりの人を集めてみんなで経験を出し合いながら、どもりを治す研究をして行くために「どもり講談教室」を開くことにしたのです。

その頃、売れていなかった私は「当分この教室の運営に集中してみよう」と思いました。幸い本牧亭は午前中空いていましたので、場所の心配はいりません。新聞社に講談教室を開くいきさつを話し、記事としてとりあげてもらいました。開校日には大勢の吃音者が集まり、会場はどもりを治したいという熱気にあふれていました。集まった人達と話し合って、毎週日曜日の午前中に教室をもつことに決めました。生徒が増えたり減ったりするなかで、後で言友会を作った丹野裕文君や伊藤伸二君が育ってってくれました。

「どもり講談教室」が発展的に解散して、しばらく後に言友会が発足しました。私も続けて参加していく予定でしたが、ちょうど、言友会の創立に参加したところから、私にチャンスが訪れてきました。だんだん売れ始めたのです。

「パン、パンパン」と所かまわずたたいてしゃべる講釈師は、これまで一人もいませんでした。どもりの私が話しやすくするために、「パン、パンパン」とたたくの、変った奴がいるぞとお客様が覚えてくれはじめたのです。

どもり特有の随伴運動を、扇子で机を打つことで生かした私は、どもりであるがゆえに世の中に出てきたとも言えるのです。だんだん売れ始め、忙しくなった私は、もう時々しか言友会に参加することができなくなっていました。

言友会はその後大きく発展しましたが、私自身が言友会から受けた恩恵は、かなり大きいものがあります。それまで他人に教えるという経験がなかった私にとって、講談教室や言友会のクラブ活動で、吃音者に講談を教えたという経験は、私に強い自信を与えてくれました。それまでは、うつ向いて、どこかにお金が落ちていないかというような姿勢で歩いていましたが、やっと胸を張って人に会うことができるようになったのです。

### 身寄りはなく、芸はなく

昭和一五、六年、私が小学五年生の時に、東京の西ヶ原小学校にどもりの小学生が三百人近く集まり、どもり矯正教室が開かれました。その時、私は自分のどもりの重さの程度がわからなかったのですが、組み分けをしたら一番ひどい組にもって行かれました。「ぼくのど

もりは重いななあ」とつくづく思いました。

それ以来、いろいろななどもりの矯正方法を試しましたが、どもりの方はいっこうに治りませんでした。それでも、どもりを治すために野球の審判をしたり、話術のクラブに入ったりしました。その内にもっと高度な話術を覚えようと、落語や講談を聞きに寄席へ通いました。そんなある日、寄席で田辺南鶴師匠が、一般の人を対象に講談学校を開いていると知りました。個人教授を受けに来た私が、どもって「ククー」「キィキィー」と息をもらすと、師匠はひどく驚いた様子でした。それでも師匠に、「どもりを治すために来ているんです」と言うと、「住み込みでやってみるかあ」と言ってくれました。私は即座にお願いしました。ところが、どもりを治したいの一念で講談に打ち込んでいるうちに、自然に、どもりを治したいという気持が消えていってしまいました。どもりが治る治らないよりも、私の関心は、講談そのものに移っていったのです。

私は、さらに八年間、講談の練習にあけくれました。しかし、私の努力を尻目に、後輩がどんどん私を追い抜いて出世して行きます。すると師匠は、私がかわいそうに思えたのか、「田辺一鶴」という名前を返してくれと言い出しました。講談をやめろというのです。師匠は、「お客様の中には『お金をやるから一鶴を出さないでくれ』という人もいる、客席でもそう言っている。どもりも以前より軽くなったから、それでいいじゃないか。お前は講

談では食っていけないよ」とも言われました。また師匠は畳に手をつけて、「頼む、頼むからやめてくれ。かわりの仕事がなかったら、私の本を半分ゆずってやるから本屋をしろ」とまで言ってくれたのです。

身寄りはない、お金はない、芸はまずい、あるのは重いどもりだけという私を、師匠なりに案じてくれたのでしよう。

それでも講談がたまらなく好きになっていた私は、「講談を続けさせてください」と一心に頼みました。師匠はしばらく困っていた様子でしたが、寄席には出せないが、自分の独演会にだけは出てもいいだろうと言ってくださったのです。

#### 無名の講談師田辺一鶴、オリピックを語る

しばらくは師匠の独演会しか出られない状態が続きました。その頃から私は、今の講談界に新風を吹きこむためには、少々変った奴が出てこなければだめだと思うようになってきました。若い人が「ワァー」と飛びついて聞いてくれる講釈師がいなければと思うようになりました。そのために、これまで一〇年近くやってきた古典を投げ捨てて新作をやるうとしました。古典の、古めかしいがすばらしい話術を生かして、全く新しい登場人物に振り替えて、「王だ、長島だ」とやったら、少しは違うかなと思ったのです。それ以来、いろいろな

野球物語を作りました。

ちやうどその頃、浄瑠璃の世界でも野球物をやつて、上の方から古典芸能を侮辱する奴だと言われて、新作に取り組むのをあきらめた人がありました。しかし、私はその話を聞いて、私は誰がなんと言おうと新作をやり通そうと、あらためて決心しました。

私は師匠から、新作はやるなど言われていましたので、新作は寄席以外の所でやっています。

しかし、東京オリソピックが行なわれた時は、この時ぞとばかり数々の新作を作りました。そして、これだけは師匠に聞いてもらいました。「いま、高らかにファンファーレ……」じつと聞いていてくれた師匠は、「今までにいろんな弟子をみたけれど、お前みたいに自分の芸に情熱を持ったやつは初めてだ。お前、出世しなくてもいいな。だったら寄席でも新作をやってみるか、出世すると思うなよ。そのかわり自分の好きなことをやれ、何年かすれば、田辺一鶴の時代がくるかもしれない」と言ってくれました。

しばらくたって、師匠の世話で新聞記者がインタビュウに来ました。なにしろ初めてのインタビュウでしたから、その時のことは今でもはっきり覚えています。

私は、まだ完成していませんがと前置きして、記者の前で、新作を一時間にわたって披露しました。記者はびっくりして、「今までにあんたみたいなき情熱家に出会ったのは、初めて

だ。私の目に狂いがなければ、一鶴さんはいつかきつと世に出るよ」と言ってくれました。新聞には「無名の講釈師田辺一鶴氏、オリンピックを語る！」と八段ぬきで出ました。彼は私の恩人の一人なのです。

それ以来、新作を寄席でやるとこれが意外にうけました。特にお客様に若い方が多いとうけまして、寄席だけではもの足りず、しゃべれるところへは、どんどん出かけていきました。病院とか、養老院とか、施設とか、東京都の周辺での施設で私の行かない所はないほどになりました。自分の芸を完成させたいと必死だったのです。それはちょうど、言友会のできる一年前の昭和三九年、私が三五歳頃の話です。

### 講談の世界では出世できないと言われて

その後、後輩が私を追い抜いて二ツ目に昇進した時、私をかわいそうに思ったのか、師匠は「夢の一日真打ち」という興業をやってくれました。「これを胸にたたんで、生涯前座でがまんするんだよ」となぐさめてくれました。後輩が、半年もすれば真打ちになることに決まると、また師匠は、かわいそうにと思って、「一鶴を二ツ目にしてやろう」と骨を折ってくれました。神田山陽先生の「一鶴君は、いつか講談界に名をなす人物かもしれない。あれだけ一生懸命にやっているんだし二ツ目にしてもいいではないか」という口添えもあって、

お情けで二ツ目にしてもらいました。師匠はその時、泣いて喜んでくれました。そして、前例のない、「二ツ目披露興業」をやってくれたのです。

師匠は、「二鶴はどもりで、素質もない。とても講談の世界では出世できない。人生で一番華やかなのは今なんだ」と、一〇日間の披露興業をやってくれたのです。祝儀を持って、「お前、これを胸にたたんで生涯ずっと二ツ目でやるんだよ」と言われました。そして、「私が死ぬ時には命とひきかえに真打ちにしてやる」と言ってくれました。

どもりがひどくて仕事をほされる

今までで一番くやしい思いをしたのは、世の中に少し出かかってきた時でした。ちょうど新作講談が原稿として、雑誌や新聞に売れてきた頃です。東北放送から連続番組の話が入ってきました。「田辺一鶴のサラリーマンで勝負しろ」という番組でした。一年間契約で、初めての番組だったので大喜びしたのを覚えています。しかし、二回分の放送をとりスタジオへ行ったら、「キィー」「ウー」としか声が出ないのです。放送局の人に見れば、二回分だから三〇分位で終わると思っていたんでしょうが、どもって四時間もかかってしまいました。その翌日、私は局から呼び出されて、あっけなく馘になってしまいました。

同じ頃、文化放送でロイジェームスさん司会のスタジオ番組があり、私は川柳の選者でし

た。一位になった川柳を読んでくれと頼まれたので、ふと見ると、川柳の最初の音が「タ」でした。顔が真赤になり、全然声が出ませんでした。放送局からは、「一鶴さん、悪いことは言わないよ。芸人では成功しないから止めた方がいい。それに文化放送ではもう貴方は使わないから」と言われました。あの頃は、シュンとなって家へ帰ることがよくありました。でも一晩でケロリとなって、翌朝には、「なにおう！」という気になっていました。

売れ始めた時の失敗と、売れていない時の失敗では、やはり売れ始めた時の失敗の方がショックが大きかったようです。一〇何年間の下積みからやっと花開こうとする時、横から泥をひっかけられたようなものですから。

### 芸能界の第一線へ

その後、私は運に叶い、NHKテレビの「ステージ一〇一」にレギュラーで起用してもらったのを皮切りに、テレビやラジオや舞台にと、芸能界の第一線におどり出しました。昭和四七年、第一回演芸選賞をいただき、四九年には四五歳で念願の真打ちに昇進しました。言友会の仲間がかけつけてくれたなかで真打ち披露興業をしました。また、売れない頃から養成していた弟子達も、各々の努力が実を結び、次々と真打ちに昇進してくれつつあります。

## 私は今でも

私は今でもどもりますし、どもることでの苦労は、少なからずあります。高座に出て始めの二、三分などは、「タ」「カ」「ト」「オ」「コ」「ク」「ヤ」「シ」に限ってスムーズには出てこないのです。ただ長年の経験から、お客様の顔を見ながらゴマかす術を心得ているだけなのです。しかし、この術とても、同じ吃音者が見たら、すぐゴマかしに気がつく程度のものであります。

以上ふり返れば、吃音者の私が芸能界入りして二〇年になりますが、その間に仲間とか後輩たちが、何人芸能界をやめていったかわかりません。それも私からすれば、私よりもやさしい障害を乗り越えられなくて落ちていってしまったようです。私には、今でもいろいろな苦労がありますが、もうだいじょうぶだろうと思っています。泥にまみれ踏みつけられ、風雨に耐えて出てきた私には、それに負けない強い精神力ができていると思うからなのです。

## どもりだからこそ

私は自分の体験から、吃音者にどもってでもやりたいと思うことは、どんどん実行したらいいと言いたいのです。どもって恥をかくのがいやさに行動できない人がいますが、本当は

どもるのが恥ではなくて、行動できないことの方が恥ずかしいことなのです。勇気がいることかもしれませんが、頑張らなければなりません。

何の苦勞も障害もなく、順調にことが進む人は勇気をそれほど必要としません。安定した自分の立場を守ることと足りるのです。しかし、私達はどもるといふ、ある意味ではハندیを持って居る者は、守ろうにも安定したものがないのです。守るのでなく、攻めていくしかないのです。

芸の世界で考えますと、能弁な人、器用な人はそれほど苦勞なく、ひと通りの芸を身につけてしまいます。苦勞なく人気が出る場合もあります。すると、今度はそれから先、伸びることはむずかしくなります。身につけた芸をこわして新しく作りかえていく努力が足りなくなるのです。今日の芸は明日の芸ではないという自覚が持てないのです。守るのではなく、こわすのには勇気がいるということなのです。

その点とつ弁の人は、なめらかに話すことでは能弁の人にかないっことはありません。そこでどうしたら能弁の人に勝てるかを真剣に考え、工夫をするのです。こうして身についた芸には、能弁の人では表わせない独特の味がでてくるのです。何度も何度も自分の芸をこわして新しい芸を身につけることを生涯続け、とつ弁はとつ弁なりの独自のものを作り出していくしかないのです。そこでとつ弁の人は、自然と「攻めの芸」の形となっているのです。

まして吃音者である私は、「攻めて、攻めて攻めまくる」しか自分を生かせる道はないのです。攻めの姿勢を身につけさせてくれたどもりに、今では心から感謝しています。周困から白い目で見られ、直接に反対も受け、また自分のふがいなさを思い知らされながら新作講演にかけることができたのも、私が吃音者であるからではないかと思っています。

## 8 たとえどもりでも

高橋庄治

### かつては私も

私の書いた『ものの見方考え方』を読まれた方はご存知かと思いますが、私はかつて「どもり」で悩んでいました。

みなさんも小学生のとき、あるいは中学生・高校生のとき、学校の友だちに「どもり」であることを馬鹿にされ、真似されたりしたことがあることでしょう。私もずいぶん、そのこととて悩みもし、苦しみました。そのために、自然に無口になり、自分の小さな堅い「殻」に閉じ込めり、どんなに親切にしてくれる友だちにも、どこか心を許せない卑屈な少

年になってしまいました。そして、ひとりで悩みました。

悩みを人に話せないほど苦しいことはありません。悪い方へ、悪い方へ、その悩みを出口の見付からない方向に追い込んでしまうのです。そして、友だちを恨み、ものをうまく表現できない自分自身を恨むところまで落ち込んでいったのです。

言葉がすらすらとしゃべれたら、どんなにかすばらしいことだろう、と思いました。考えること、思うこと、そのすべてが「どもり」が治ったら……という、今から思えば愚にもつかない夢ばかり追っていました。「どもり」だけが自分の大切な人生を破壊し、青春を灰色の暗いものにしてしていると信じて疑いませんでした。

もう、社会のことも、政治のことも、頭の中にはありません。人が腐敗しきった社会の中で苦しんでいるのを見ようともせずただひたすらに、自分ひとりの問題である「どもり」のことだけをみつめていました。

### 悪循環にとらわれて

どんなに悩んだところで、「どもり」は治りませんでした。悩めば悩むほど、自分自身を傷つけ、自分のことしか考えないようになっていきました。悪循環でした。

時には、表で、大声を出して、発声練習<sup>①</sup>を試みたり、ふとんの中で小声でひとり話し

てみたりしました。しかし、ひとりだと割合にうまくしゃべれて、そのときはちょっと自信をもつても、人の前に出てしゃべると相変らずどもってしまいます。一度どもってしまおうと次の言葉を出すことが恐くて、以前よりさらに深刻な悪循環に陥ってしまいました。そして、自殺したいとさえ考えるようになりました。

またある時は、自分が「どもり」であるのは「運命」である、とも考えて、あきらめようと思いました。「運命」だと思わないことには、自分の気持のやり場がなかったからなのです。

### きっかけ

このように、暗い、希望のない青少年時代を過ごした私が、あることをきっかけにして変わっていききました。「どもり」の悩みから解放され、あまりどもらずに話すようにもなっていたのです。とはいっても、特別などもり克服法などを勉強したとか、七転八倒の苦勞の末に、どもらなくなったというわけではありません。私自身知らないうちに、「どもり」を忘れていたのです。そんな馬鹿なことはありません。と思われましょう。私自身が不思議に思ったのですから、みなさんがそう思われるのは当然のことです。けれどもこれは事実なのです。

そこで、私は、私の「どもり」が全く気にならなくなったきっかけは何だったのか、そして、その経験の中から、みなさんに期待したいと思うことは何なのかを述べてみたいと思います。

### 社会にめざめて

私は、現在、哲学をやっています。そのことと関連するのですが、私が変わった直接のきっかけは戦争です。戦争は、私をも含めて人びとの生活を貧困と不安の極限まで追い詰めました。働ける若者は、戦場へ、軍需工場へと、どんどんかり出されていきました。みんな心の底では、戦争なんてない方がよいと思っていながら口にすら出せませんでした。私は、自分のことだけでなく、社会のことに対して、はたしてこれでいいのだろうかという、疑問をいただきました。そして、私達のおかれている貧しい生活の本当の原因は何なのか、戦争を引き起こすその原因は何なのか、考えました。そのことについて勉強もしました。

その結果、資本主義における基本的な矛盾は、労働者と資本家の矛盾であり、資本家は自らの利潤を追求するために労働者を搾取し、そのために、働く人びとは貧しい生活に陥らざるを得ないことを知りました。さらに、資本家が国内の労働者を搾取することだけでは飽き足りず、さらに高度な利潤追求を行うために、海外に侵略しようとする結果、戦争が引き起

こされるということも知りました。貧乏や戦争は、単なる「運命」や「運」、「偶然」によるのではないのです。

### たとえどもりでも

こうした、ものの真実を知った「どもり」である私は、たとえ「どもり」でも、真実は語らなければいけないと思うようになりました。「どもり」であることから逃げることよりも、ものごとの真実から逃げる方がよっぽど卑法だ、と思いました。私の人生観——世界観——が変り、生き方が変り、しっかり生きてゆく決意ができたことは、私の意欲を強大にしました。

私は、たとえ「どもり」でも、言わなくてはいけないことは、勇気を出して発言してきました。人前で一生懸命にしゃべりました。どもりました。いくらどもってもしゃべりました。ふと気がつくとも私は「どもり」を全く気にしない自分になっていたのでした。またどもることそのものも以前とは比べものにならない程軽くなっていたのです。

いい世の中をつくるために、私一個の恥など、問題でなくなったのです。どんなに自分がどもって恥をかいても、そんなことよりもいい世の中をつくることの方が、私にとって重大になってきたのです。

どもりは軽くなったが

結果として、私の「どもり」は軽くなっていきました。あれ程悩み苦しんだ私が、あまりどもらなくなったら、どんなにかうれしかっただろうと思われるでしょうが、いざ、そうやってみると、たいしたことはないのです。それは、私を苦しめていたことのすべてが「どもり」であった、と考えていたことが、正しくなかったことを意味します。「どもり」であるための苦しみは、たしかに大きなものでした。けれど、ほかの人と同じように、この社会に生きる中であたえられる苦しみの方がずっと大きかった証拠です。「どもり」よりも、もっと根本的な、苦しみの根元が、この社会にあったからなのです。

### 苦しみの根元は

みなさんの中には、かつての私と同じように、苦しみの根元は「どもり」である、と考えておられる方が多いのではないかと思います。なぜなら、その苦しみは、他の人にわからない苦しみだからです。

でも、それは違うのです。おなかが痛くて医者のところへ行って、どもるのが恥ずかしいからといって、しゃべらないくらいなら、そんな痛さは我慢できる痛さです。本当に痛かつ

たら、恥も外聞ありません。人から笑われることなどなんでもないはずですよ。

私は、みなさんが、苦しみの本當の根元が、「どもり」ではないのだ、ということを一  
日も早く気づいていただきたいのです。

### どもりは雄弁よりも

もう一度繰り返しますが、たとえ「どもり」でも、これだけは言わなくてはいけないと思  
える程の確固とした考え方を身につけることです。その時、現象の上で、たとえ言葉がつつ  
かえても、それはその人の言葉の特性であって、決して、劣等感に結びつくものではありません。  
私は言いたいのです。どもり、どもり、しゃべりなさい。中味さえよければ、ども  
りは雄弁な人よりも、もっと雄弁となるのだ」と。

こんなことがありました。横浜国大の先生が、君がどもりしゃべったあのことが自  
分には忘れられない。君は「どもり」のために、どれだけ得をしているか。どれだ  
け印象的な言葉にしているか。私もどもりたい」と言ったのです。また、大山郁夫  
先生がどもっていました。多くの人は、あのどもりが先生の話を、いっそう魅力的なものに  
する」と言いました。私のまねをして、どもる練習をした友達もいました。まさに、どもり  
は、金であり、雄弁は、銀だと、私は思うのです。

## 信念をもって

確固とした思想にもとづいて、自分の考え方と行動に信念をもち、真実をつらぬき通そうとする生きる目標をもったとき、言葉のつかえは、本当に、たいした問題でなくなることを、私は確信をもって、みなさんにお伝えしたいと思います。

これが、「どもり」を克服した道であり、同時に、私がみなさんに期待することでもあるのです。一度しかないかけがえのない人生を、正しいものの見方考え方を身につけて、真実をもとめてやまない姿勢で、生きていこうではありませんか。

## 第六章

どもりで悩んできた私たちは、人に受け入れられないことのつらさを知っている。すべての人が尊重され、個性と能力を発揮して生きることのできる社会の実現こそ私たちの願いである。そして、私たちはこれまでの苦しみを過去のものとして忘れ去ることなく、よりよい社会を実現するために活かしていきたい。

吃音者宣言、それは、どもりながらもたくましく生き、すべての人びとと連帯していこうという私たち吃音者の叫びであり、願いであり、自らへの決意である。

## 1 連帯の輪の中で

— 京都言友会の十年 —

梅原正之

## はじめに

東京に生れた言友会が全国各地に広がり、たゆまぬ活動を続けられたのは、言友会が単に吃音矯正だけをめざしてこなかったからだといえます。狭い部屋の中での発声、発音練習より、「よりよく生きよう」と、個人として言友会として、社会の中に積極的に私たちは身を投じてきました。社会の中で多くの理解者を得、共通の願いを持つ人たちや団体と共に歩んできたのです。言友会の歴史、とりわけ私たち京都言友会の歴史は、そうした連帯の歴史でもありました。ここでは京都言友会の一〇年を振り返りながら、その連帯の歴史を述べてみたいと思います。

## 連帯の芽生え

昭和四一年一〇月二三日、「関西地区吃音者の集い」が同志社大学の一教室で開かれまし

た。この集いの中から、「関西にも言友会を」という声がり上がりました。この集いを契機に京都言友会、大阪言友会、神戸言友会が生れたのです。同志社大学の発音心理研究会が大学の教室を借りてくれたのも、連帯の一つの現われでした。

発音心理研究会の他に京都大学にはデモステネス会、立命館大学にも吃音者サークルがありました。言友会はこれらのサークルにも働きかけ、連帯の話し合いや合同例会を持つていったのです。

この連帯の中で、私たちの共通した要求を京都府に対して要求しようと、昭和四二年一月、府議会であろうあ者、吃音者、サリドマイド児問題を探り上げ、これらの人びとに対する地方自治体としての施策を問いました。知事は、「これらの人びとが生きていて楽しいと言える世の中にしたいと思う、府としてはできる限り諸要求実現のため積極的に努力したい」と答え、議場に詰めかけていた私たちに感動をあたえたのです。この時私たちの提出した要求は、

- ・ 例会会場を公的に確保してほしい。
  - ・ 近い将来、公立の言語障害センターを設置してほしい。
  - ・ 言友会の活動に適切な助成をしてほしい。
- という三項目でした。

## 連帯の輪

昭和四二年一月、例会会場のことで府庁をたずねた私たちは、偶然、京都府言語障害児親の会の人たちと顔を合せました。府議会で吃音問題が採り上げられたことに注目していた親の会の人たちと、期せずして共通の話題が出されました。そこでお互いの要求の正しさと切実さを確かめ合うことができたのです。

当時の親の会が出していた、「言語治療担当の教員の養成」と「言語治療教室の開設」という要求は、そのまま私たちの要求でもありました。この偶然の親の会との顔合わせが、私たちの活動の将来に一つの方向をあたえてくれたのです。

四二年二月、京都市では市長急死のあとをうけ、市長選挙が行なわれました。言友会は会員との話し合いの中で、私たちの要求を実現してくれるであろう革新統一候補を推し、当選のために力を尽しました。

こうして、協力し合え、ささえ合える三つの条件——吃音者サークル相互の協力、親の会との接触、革新市政の誕生——がそろう中で、私たち京都言友会はそのつながりをさらに強めていったのです。

四二年四月、言友会が言語障害問題を解決するための諸事項を請願することを決めると、

「請願するならみんなが固まってやろうではないか」という意見が方々から出されました。そして、吃音者と親の会の連帯の組織である、京都言語障害対策協議会（言対協）が結成されることになったのです。言対協構成団体は京都言友会、京都大学デモステネス会、同志社大学発音心理研究会、京都府言語障害児親の会の四団体でした。

この言対協は初仕事として、府市議会に対する請願支持署名とカンパに取りくみました。この請願の主旨は、

- ・ 公立の言語障害センターを設置してほしい
- ・ 小、中学校に言語治療教室を開設してほしい
- ・ 言語障害児の治療・指導・教育にあたる専門教員の養成をはかってほしい。

というものでした。

この請願運動は二カ月足らずの間に五〇〇〇名の署名を得、府・市議会もこの請願を満場一致で採択しました。請願運動の結果、翌四三年六月、市内に京都で初めての言語治療教室の開設、言語治療担当教員養成のための内地留学が実現したのです。

その後、言対協はさらに四三年三月から、京都市および府下の各地で、「ことばの相談会」

を開き、ことばの障害を持つ人たちや親の要求を受けとめました。この相談会は後に「京都方式」と呼ばれる言語治療教室設置の運動形式を作り出し、その運動の核としての役割を果たしていったのです。

### 聴覚障害者との連帯

ことばに障害を持つ私たちは、生理学的に深い関係のあるきこえに障害を持つ「ろうあ者」や「難聴者」に、特に親近感を持ちやすいようです。そのような感覚も手伝い、また言友会をよく理解してくれている、府の障害者福祉担当職員の仲介もあって、京都府ろうあ協会、京都難聴者協会との接触を持つこともできるようになりました。そして、府に対する要求運動等の情報交換を通じ、密接な関係ができてきました。さらに、四五年十一月、京都ろうあセンターに、聴覚言語訓練室が開設されることになり、その具体的な設備や機能をいかにするかについての話し合いが、三者で行なわれるようになりました。その話し合いの過程で、言友会員がろうあセンターの職員として勤務することにもなりました。運動面ばかりでなく、実際の仕事面でも聴覚障害者とのかかわりが深くなっていたのです。その後、さらに二名の言友会員がろうあセンターに勤務することにもなってきました。

ともかく、ろうあ協会、難聴者協会、言友会の結びつきはさらに強いものとなり、四八年

九月に結成される京都聴覚言語総合センター建設推進委員会（一五団体で構成）の中核となつていったのでした。

### さらに多くの障害者とともに

昭和四六年二月、京都障害児・者の生活と権利を守る連絡会（京障連）がうまれました。それまで京都府下の各地で独自の運動を続けてきた障害者や親の会、教職員、ボランティア組織など三〇団体が団結して作ったのです。京都言友会は、常任委員団体として参加しました。さまざまな障害を持つ人びとや、障害児を持つ親との接触や学習会、共同の行動を通じて、積極的に多くの障害者との交流を広げていきました。肢体不自由の人たちとの海の合宿では介護者となったり、手話サークルに入つてろうあ者の話し相手になったりしました。中途失聴者のための要約筆記も引きうけました。

このような交流の中で、私たちは改めて自己を見直すことができました。その中には、「どもるけれど教師になつて障害児教育にあたりたい」「保母養成学校に入り、保母として働きたい」と新しい生き方を考える人びとが出てきました。「重い障害を持っていても、みんな一生懸命に生きている、自分もどもりに甘えずがんばろう」と障害者の生き方にうたれ、それまでの自己を反省し、生きることの真実にめざめていったのでした。多くの障害ある人

たちから、私たちはことばに尽くせぬ多くのものを学ぶことができました。

### 聴覚・言語障害者の連帯を強めて

「聴覚言語障害総合センターを公的な責任としてつくってほしい」という要求のもとに、ろうあ協会・難聴者協会・言友会を中心に、京都府内で聴覚言語障害にかかわる一四団体で「京都聴覚言語障害総合センター建設推進委員会」がつくられました。結成直後、四八年九月下旬から一二月まで、京都府下全域での支持署名と支援カンパ運動に取り組み、多くの共感を呼んで、わずか二カ月で六万五〇〇〇人の支持署名と三五〇万円のカンパを得るという成果を生みました。その年の一二月には、センター設立の請願を府・市議会に提出し、府議会はこの請願を採択、市議会は継続審議の措置をとったのでした。

それから三年、この連帯の組織は、自治体交渉、政党との話し合い、モデルプランづくり、年に一度の大集会、合同運動会など、多彩な運動を展開し続けてきました。その中で五一年八月、京都市は「総合センター」建設について具体的な提案を出すに至ったのです。こうしでようやく「総合センター」実現の第一歩が踏み出されたのでした。

### 連帯の中で言友会は何を得たか

私はこれまで京都言友会一〇年の連帯の歴史を述べてきました。そこで今度は、言友会として、その連帯の運動の中から何を得たかを述べてみましょう。

昭和四二年七月、言対協の請願運動が成功の直後、京都府は言友会に例会会場として、府庁の一室を提供し、さらに、活動をしやすいようにと物的援助もしました。

四三年三月、言友会の活動を知った一市民の好意で、会事務所開設。この年、府は言友会に事業助成金一〇万円を交付しました。

四五年十一月、京都ろうあセンター聴覚言語訓練室の開設とともに、言友会員もこの施設を利用できるようになりました。

四六年九月、全国言友会連絡協議会の事務局を引き受け、吃音の専門誌『ことばのりずむ』の創刊に尽くしました。

四七年五月、京都市にて開催された第一回全国吃音問題研究集会の準備を受け持ちました。言語治療教室の担当教員、吃音研究者等の協力を得たこの集会は成功しました。

四七年五月、京都吃音者福祉会館が開設されました。京都市が旧市民病院の建物を福祉会館として貸与することを決めたのです。

言友会はこのように京都における諸団体との連帯を強め、言語障害児・者の問題にとりくんできただけでなく、全国の各地にある言友会とともに私たち成人吃音者の問題にとりく

できました。

連帯の発展を可能にしてきたもの

私たち京都言友会が連帯を広げつつ、自らの会活動を充実し得たのは、次のようないろいろな有利な条件があったからです。

- (1) 京都においては、市民の自主的な運動を尊重し、その目的とするものを理解していこうとする行政の基本姿勢があったこと。
- (2) 市民運動の側にも、連帯を広げることが要求を早く解決するとの考えから、共通の要求事項はできるだけ関係する諸団体の間でまとめる方向が確立されていたこと。
- (3) 結成以来、会活動に献身的に打ち込みリーダーが、京都言友会に多く輩出したこと。そして、その人びとが運動の中で連帯の大切さを理解していったこと。

私たちはこのような連帯を発展させる基本的な条件を、今後もしっかりと守っていききたいと思えます。

## おわりに

若干の私見も混じえながら、私は京都言友会の一〇年の歴史と連帯について述べてきました。これから先、さらに私たちは吃音者や言語障害児・者の組織化と要求の実現のために力を尽くさねばならないと思います。

「自らの組織を大切にしながら、幅広い人びと・団体との連帯を深めていく」

このことを常に基本としながら、運動は進められるべきものであると確信しているのです。

## 2 どもりの問題を持っていればこそ

中神秀子

## 私のどもりに対する暗いイメージ

私が子どもの頃、小学校にひどいどもりの子がいました。私の友だちは「あの子と遊んだり、しゃべったりするとどもりがうつるぞ」と言って、そのどもりの子を仲間はずれにしたり、からかっていました。

また、関東大震災の時に「朝鮮の者があばれているぞ」というデマが飛び、多くの朝鮮の人たちが罪もないのに殺されたり、ひどい扱いを受けたことがありました。その時、乾物屋のおじさんが、どもりであるために夜警団に名前を聞かれてすぐに言葉が出ず、「あやしい奴だ」と、竹やりで突かれて死んだという話も聞きました。さらに、私自身が大地震災のことを調べた時に、かなり多くの吃音者が朝鮮の人と間違われて殺されたという事実も知ることができました。

そのような訳で、私はつい最近まで、吃音者は暗い人生を送ってきていて、雰囲気も暗い人が多いだろうと思っていました。

### 吃音者を特別視していた反省

そんな私が、東京言友会から夏季合宿の講演の依頼を受けたのは昭和四五年のことです。当初、私は言友会が吃音者の集まりと聞き、どうして私が選ばれたんだろう、私のやっていることと吃音者の問題は余り関係がないんじゃないかと思っていました。しかし事前の打ち合せのために何人かの言友会の人と会っていくうちに、私は自分の間違いに気づきました。言友会の人たちが、私がこれまでつき合ってきた青年たちと同じ話を求めていることを知ったのです。私はこの時に、吃音者を普通の人とは違う特別なものとして考えていた自分を反

省しました。

これなら、私なりの意見を言えると思ひ、私は合宿に参加しました。

### 若さと熱氣の合宿に参加して

一〇〇人以上が集まった合宿に参加して、私はまず、そのすごい熱氣に驚かされました。そこには、ことばの障害を持つているという湿っぽさなど少しもなく、時には皆から私へのヤジも飛び、若い熱氣のある明るい雰囲気が満ちあふれていました。

私は、どもりという問題を持つているこれらの人たちが、なぜこれほど明るいのかとあれこれ考えてみました。

言友会は自分のどもりを治そうということだけで組織されているのではなく、お互いが慰め合うだけの、いたわり合うだけの表面的なつながりでできている集団でもない。みんなが力を合わせてどもりを克服し、さらにはどもりでない人たちとも連帯していこうという前向きな力強い意志があるのだと私は思いました。

悩みは悩みとして、苦しみは苦しみとして受け入れ、なおかつ前進していこうとする吃音者たちの姿を私は初めて知りました。

## 社会生活と青年運動

私が青年運動に参加していて確信していることは、青年運動は個々の様々な個人的な要求から発生していくものだという事です。ある青年は恋人がいない、どうにかして恋人が欲しい。また、ある青年は賃金が安い、もっと高い賃金が欲しいというように、まず、自分たちの個人的な要求を掲げて運動に入ってきます。

そのような要求は、一つ一つ個々にやっけては、自分達のたった一つの要求でさえも実現させることは容易なことではありません。また、その要求が運動の中で達成されたとしても、それで果たしてその人たちが幸福になれるのか、生きがいのある生活を送れるかという点と必ずしもそうではありません。恋人が欲しいという青年も自分だけの恋人を得て、果たしてそれからその恋人と二人で長い人生をこの社会の中で幸福に送っていけるかという点、必ずしもそうではないのです。

実際には、吃音者も、恋人が欲しいという人も、また賃金を高くして欲しいといった人も個人的な要求だけにとらわれず、みんな一緒に手をつないで、憲法に保障されているような健康で文化的な生活、あるいは公害のない住み良い社会、そういうものを築いていく、その中で、自分たちの乗り越えたい、こうありたいという要求を通していくということが青

年運動のあり方ではないかと思ひます。

どもりの人が、自分のどもりの悩みを解決したいということだけで、他にはわき目もふらずに生きてきたとき、たとえそれが実現したとしても、その間に、個々人が社会生活の中で取り落してきたものは、計り知れないほど大切なものが多かったと言えるのではないでしようか。

### 言友会に期待する

どもりの人が、力を合せて自分たちの問題を克服していかうとすることは本当に良いことだと思ひます。しかし、世の中には別に障害がなくてもことは自由に言えても、自分の心の中に何も言いたいものを持っていない人もいます。また言いたいことがあつても周囲の状況で黙つていなければならぬ人もいるのです。私はそういう世の中であつてはならぬと思ひます。

私は、吃音者のようにハンディキャップを持っている人であればあるほど、たとえ、なかなか言いつらくても何か自分がこう言いたいんだ、ああ訴えたいんだというものを胸にいっぱいもつて、それを実現していかうとする、そういう生活を送つて欲しいと思ひます。

今の社会はまだ、吃音者や朝鮮の人に対する社会の偏見が存在してゐます。そして、賃金

格差の問題、女性が職場や家庭で不当な扱いを受けやすい問題、子どもや弱い者にしわ寄せがきやすいという問題など様々な矛盾が数多く存在しています。私たちは、そのような問題にもっともっと目を向けて偏見のない矛盾のない徹底した民主主義の世の中を日本に実現するため、力を合せてがんばっていかねばなりません。

自分たちの個人的な問題であるどもりを克服することだけに目を奪われるのではなく、そのどもりの問題を考えたことを契機に幅広く社会に目を開き、地域の社会の人たちと協力して明るいより良い社会の実現のためにがんばっていただきたいと思えます。

## あとがき

私たちは、これまで専門家に頼りすぎてきました。言語障害の専門家なら、どもりの悩みを解決してくれる、そう信じてきました。その象徴的なのが民間のどもり矯正所へのあこがれでした。

いま、言友会は「どもりをどう治すか」ではなく、「人としてどう生きるか」を探っています。治療を求めているのではなく、よりよい人生を求めているのです。

どもりに悩み、助けを求めてくる吃音者に言語障害の専門家の役割が必要な時もあるにはあります。しかし根本は、その人がどう生きるかの生き方の問題につきるのです。数少ない専門家より、どもりを受け入れ、生き方を共に考えてくれる友だちが吃音者には必要なのではないのでしょうか。知識、技術を売りものにしていく専門家より、世の中の矛盾の中で多くの問題を持ちながらも生きていく泥臭い生活者こそ、吃音者のよい味方でありましょう。そのように考えれば、私たちの身の回りには味方はたくさんいるのです。身近にいる魚屋さん、大工さん、町のお医者さん、それぞれが明るく素直に生きていてはありませんか。その人

たちを味方につけることです。

そのようなことを考えてきますと、主として一人でこの本を書き始めた私は、一人で書くことに抵抗を感じ出したのです。できるだけ多くの人に体験談をお書きいただき、その体験を通して生き方を学びたい。そう考えたのです。それまで書いていた原稿は全てないものと考え、急きよ体験談中心の構成に切り替えました。

締め切り間際にお願ひし、二日で書き上げてくださった方もいました。急なお願ひで、多くの方々に多大のご迷惑をおかけ致しました。多くの方々が原稿をお寄せくださったことで、吃音者の生き方について、私の一人よがりになるのを避けることができました。

中には著名な方もいますが、多くは「名もなく貧しく美しくもない」吃音者です。手の届かない雲の上の人の話ではありません。それらの人びとの生き方が、どもりに悩む人たちの今後の生き方に多少なりとも参考になれば、うれしい限りです。

この本は多くの方々のご援助によって仕上げることができました。

お忙しい中、急なお願ひにもかかわらず、心よく原稿をお寄せくださった多くの方々に、心からお礼申し上げます。

また紙面の都合で、原稿をお寄せいただきながら載せることができなかつた、内野敏彦さん（福岡言友会）、本田正子さん（福岡言友会）、小林好子さん（名古屋言友会）、倉橋仁さ

ん（札幌言友会）にお詫びとお礼を申し上げます。

この本を作るために、何度か合宿がもたれました。八月中旬から十日間にわたる合宿でこれまで書かれた原稿が検討され、この本を体験談中心の構成にすることにしたのでした。そのあわただしい合宿に、ご自宅を開放し、私たちの仕事が進めやすいようにと、いろいろご配慮くださった、山口県光市の松本巖・静子ご夫妻に心からお礼を申し上げます。

その合宿には、全言連事務局長野崎清治をはじめ、松本進、山川夏雄、辻中忍、伊藤照良が大阪から参加し、北九州言友会から高岡従道が参加しました。

その後大阪での仕上げの合宿には、大阪教育大学学生、溝口稚佳子、東京言友会、石垣夫美雄、京都言友会、梅原正之・喜多順三郎、岐阜言友会、村上英雄らが加わりました。これら多くの言友会関係の人たちが、この本を作り上げたと言えましょう。心から感謝の意を表したいと思います。

また、この本を作るにあたって多くの方々にご教示をいただきました。それらを生かすことができなかった部分もかなりありました。改めてお礼とお詫びを申し上げます。

その他、言友会一〇数年の活動の中や、大阪教育大学の教師生活の中で、また、吃音相談会で全国をまわっている時に、多くの方々にご指導いただき、お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

最後に、この本が世に出るきっかけをつくってくださった八木晃介氏、大野進氏をはじめとする、たいまつ社の方々にお礼を申し上げたいと思います。

昭和五一年九月八日

伊藤伸二

# 言友会十年の歩み

昭和四〇年

9月30日

。講談による「吃音教室」を田辺一鶴が開く

10月21日

。發起人会創立

・上野公園にて、發起人会を創立し、丹野裕文会長、伊藤伸二幹事長、田辺一鶴顧問  
以下役員を選出、『言友会（日本吃音矯正会）』と命名。

昭和四一年

4月3日

。発会式

・杉並区方南会館にて、参加者80名

6月中旬

。事務所開設

10月23日

。関西地区準備会発足

・故吉田昌平を中心に同志社大学にて発足する

・同日、言友会京都支部発足（後に京都言友会と改称）

。東京言友会第一回文化祭（恵比寿区民会館）

・「吃音者よ団結しよう」「団結の力で吃音を矯正しよう」の旗印をかかげる

。言友会大阪支部発足（後に大阪言友会と改称）

昭和四二年

11月27日

4月1日

。京都市市より京都言友会に初めて助成金五万円が下りる。以後継続して支給される

。言友会武蔵野支部発足（後に三多摩言友会と改称）

11月13日

。公開討論会と映画の夕べ（全電通会館ホール）

・神山五郎氏参加、参加者520名

・未封切の映画「若者たち」を上映

11月23日

。京都府言語障害対策協議会発足

12月3日

。全国大会（大阪）

・東京、大阪、京都を中心に言友会を全国に作り、各地言友会を支部でなく独立した言友会とする

昭和四三年

4月20日

。全国言友会連絡協議会（略称全言連）結成大会（第1回全言連大会）

・東京大向区民会館にて参加者75名

・同日、全言連発足、東京に事務局を設置する

7月～8月

。関戸友広は「言語障害児にことばの治療教室を」と全国一周のサイクリングを行い4千名の署名を集める。彼を中心に同年一二月福岡言友会発足

。第2回全言連大会（京都市本能寺会館）・親の会代表の参加

昭和四四年

11月23日

。東京言友会創立3周年記念祭（杉並区方南会館）

・弁論大会、演劇、講談の他、井上ひさし氏、羽仁進氏、田辺一鶴氏の講演

5月3・4日

。第3回全言連大会（大阪市教育会館）

・木森重樹氏の講演等、60名参加

5月18日	昭和四五年
7月20日	2月
11月16日	4月19日
	5月3・4日
	昭和四六年
	4月11日
5月1・2・3日	
7月4日	

- 。東京言友会に理論研究部発足・「理研報告」発行
- 。第1回九州大会（長崎市にて）以後年一回開催
- 。京都言友会3周年記念大会「発表、講演と映画のつどい」40名参加
- \* 昭和44年度は、名古屋、北九州、長崎、札幌、岡山に言友会発足
- 。言語障害対策要求署名運動
  - ・ 全国で署名運動が同年一二月まで展開される、署名数1万3千人
- 。東京言友会創立四周年記念祭（目黒公会堂にて、参加者300名）
  - ・ 「確かなことばを求めて」のテーマのもと、文部省、厚生省、親の会、銀鈴会、こ  
とばの教室の先生を交えての討論を行う
  - ・ 同日、「東京都言語障害対策協議会」発足
- 。第4回全言連大会（名古屋市）
- 。東京言友会第五回創立記念祭（千代田公会堂にて400名参加）
  - ・ 「真の生きがいとはの大討論会」と題して、映画「若者たち」のスタッフを囲んで  
の討論・佐藤勝作曲、合田義雄作詞の「輝く明日」（言友会の歌）の発表
- 。第5回全言連大会（代々木のオリンピック記念青少年総合センター）
  - ・ 「吃音者は障害者なのか」をテーマとして論議される
- 。東京言友会新事務所落成式

9月26日

・全国障害者問題研究会の協力により新築、全言連の事務所として活動の場になる  
 ・吃音の専門誌「ことばのりずむ」創刊

\*昭和46年度は、沼津、和歌山、千葉、沖縄に言友会発足

昭和四七年

2月

・東京都より、東京言友会へ事業委託費40万円が支給される、以後継続される

5月3・

・全国吃音問題研究集会、「どもりを語ろう」のテーマのもと200名参加

4・5日

・第6回全言連大会（京都旅行会館）

5月

・京都言友会、吃音者福祉会館を開館

6月

・大阪言友会、大阪市府より40万円の助成金支給される

\*昭和47年度は、徳島、新潟、高知、日南、佐世保に言友会発足

昭和四八年

3月29日

・元全言連会長、吉田昌平氏死去

5月3・4日

・第7回全言連大会（長崎市にて）

10月

・全国言友会代表者会議・「吃りは治らないかもしれない事を考えよう」をテーマに討議

\*昭和48年度は、石川、長岡に言友会が発足

昭和四九年

5月3・

・第8回全言連大会（和歌山県高野山）、「行動する吃音者へ」のテーマの下に開かれる、

4・5日

アメリカ成人吃音者会議の代表が参加

8月

・福岡市言語障害連絡協議会発足

11月30日

昭和五〇年

5月3日・  
4・5日

10月1日

昭和五一年

5月1日・  
2・3日

7月28日

。「ことばのりずむ」8号発行・特集「治す努力の否定」、大きな問題提起として論議される  
 \* 昭和49年度は岐阜、秋田、盛岡に言友会発足

。第9回全言連大会（兵庫県鉢伏高原）・「治す努力の否定」について論議される

。吃音相談会（全国35都道府県38会場）伊藤伸二、辻中忍、伊藤照良の3人で全国を巡回、翌年2月29日まで続く

\* 昭和50年度は、岡山、仙台に言友会発足

。第10回全言連大会「言友会創立10周年記念大会」（東京にて）

・「吃音者宣言」採択

。日本語障害児教育研究大会で、「吃音者宣言」が話題にのぼる

・全言連から、丹野裕文会長、パネラーとして参加

\* 昭和51年度は、新居浜に言友会発足

## 編著者紹介

伊藤伸二 (いとう・しんじ)

1944年、奈良県に生れる。明治大学文学部及び、政治経済学部卒業。

現在、大阪教育大学講師(聴覚・言語障害児教育教室)、全国言友会連絡協議会事務局長、東京言友会運営委員長などを歴任。著書『改訂 吃音研究ハンドブック』(共編著)『人間とコミュニケーション—吃音者のために』(共訳編)その他。

## 吃音者宣言

たいまつ新書 4 (赤)

---

1976年11月10日	第1刷発行	定価	680円
		送料	120円

編著者© 伊藤伸二

発行者 大野進

発行所 株式会社 たいまつ社

〒160 東京都新宿区百人町 1-23-14

電話 03-371-1590

振替 東京 4-24362

印刷・厚徳社

---

<落丁・乱丁本はおとりかえます>

## 表現を民衆のものに

——たいまつ新書の刊行にあたって——

生きた言葉、確かな言葉、矛盾や不合理を知覚しその克服をめざす変革への言葉——それらの言葉を表現しうる多くの民衆が実在することを小社は信じてきました。言語や文章、そして書物は、金や地位の所有者、あるいはすぐれた表現力や学識をもつ専門家たちだけの独占物ではありません。思想・論理・歴史・記録・芸術表現などがあたかも権威ある営みであるかのように思われてきた長期にわたる錯覚が、この国の民衆から主体的な意識・判断・行動を奪い、流れに浮く木の葉のような状況に人びとを追いやってきました。その繰り返しを是認し、加速する現代の風潮に私たちは逆らいます。体制の撤き散らすすべての「常識」を疑い、権威主義に造反し、民衆内部にわたかまる事大主義を民衆自身の力で克服する——その土台石の一つ一つを積み重ねていくことが、たいまつ新書刊行の願いと目的です。著者・読者・出版・印刷労働者・そして書店が、共同・等質の努力を傾注しながら、たいまつ新書を生みつづけたいと念願するものも、この営みを民衆総体による挑みとして持続したいからにほかなりません。たいまつ新書は、北海道から沖縄までの列島各地に働く民衆のなかの個人が編集委員会を構成し、企画・編集にあたります。日本の各地に在ってそれぞれの仕事・生活・歴史をふまえ、この国の営みを真に民衆のものにしようとして生きる人びととの強固な連帯を生み出すことができれば、たいまつ新書の意図の過半は達せられます。新たな課題、新たな人びととの出会いを期すると同時に、今後の研鑽を誓い、読者諸氏の声援を乞います。(一九七六年一〇月一日)

たいまつ社

たいまつ新書編集委員会

たいまつ新書／既刊

どぶろくと抵抗

野添憲治・真壁仁編著

六五〇円

現代日本の監獄

救援連絡センター編

六五〇円

差別と冤罪の構造

八木晃介

六八〇円

吃音者宣言―言友会運動十年

伊藤伸二編著

六八〇円

郷土教育運動小史―土着の思想と行動

桑原正雄

六八〇円

近刊

農の文化史―古老に学ぶ

佐藤 正

六八〇円

ゴミ屋の記―農民のみる消費と破壊

木村迪夫

六八〇円

## 著者の顔



いとう・しんじ

# つねにすがすがしい好漢

神山五郎

高倉健に惚れ、かつどもりである大学教官というふうには彼を紹介しておこう。事実、伊藤伸二を慕うどもる人びとや関係する学生は多い。彼自身も面倒見がよくつねにすがすがしい。

彼がどもりながら話すせいか、聞き手はつい彼の指示に素直に従ってしまう。かようにどもりであるメリットを生かし続けている好漢である。

この度、どもりであることを主張し、生かす自他の方法、体験などを集め、評価し、書となすという。草稿は全く見ていない。世のなかから厳しく批判されたほうが薬になる段階には彼はいる。読者の叩き方が強ければ強いほど、彼は強くなる。一つおおいにやつつけてください。彼がどうさばるか、それを見るのもまた楽しい。

(郡山市熱海総合病院・健康教育センター所長)

たいまつ新書

4

吃音者宣言  
言友会運動十年

0236-7604-4434

680円